
八天の聖剣

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八天の聖剣

【Nコード】

N3767Q

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

アーティファクトと呼ばれる道具が世界中に浸透している時代・
・・・

千堂剣二は1年前の謎の事故の唯一の生き残り。事故当時の事を覚えておらず、そんな状態のまま現在に至った。

記憶回復のきっかけになればと彼は再びアーティファクトを扱う者アーティファクターを育てる学園に通うことになった・・・・

一章 一話編入

「……凄まじい光景だな」

男はその光景を眺めながら感嘆の声を漏らす。

「そうだな。全く今でも信じられんよ」

別の男が彼の言葉に同意しながら同じようにその光景を見ている。二人の男達の目の前に広がっている光景は廃墟だった。

つい数時間前、この一帯で突然謎の爆発が巻き起こった。

当然何の予兆もなかったため、その一帯で生活していた人達は為す術無くその爆発に飲まれた。

爆発はしばらく続き止んだのは二時間ほど前であった。

「一体何が起こったんだか……」

そう言いながら二人は廃墟を見回す。廃墟内には防護服を来た人間の姿があちこちで見ることができた。

「今のところ死体しか見つかってないそうだな。無理もないが……」

「この状態では生存者は絶望的だろうな」

二人が口々にそう言った時だ。

通信機から調査に行った隊員からの報告が入った。その内容は「生存者を発見。これより生存者を連れそちらに帰投する」ということだ。

その報告を聞いて二人は驚く。

「まさか、生存者が見つかるとは思わなかったな」

「全くだ。詳しい話を聞きたいものだ」

そう言いながら二人は生存者を連れて帰る隊員が帰投する場所へと向かう。

隊員は既に帰投したようで見護兵が連れ帰った生存者を担架に乗せて運ぼうとしているところだった。

遠目から見てみると生存者は少年のようだ。年は恐らく十六歳ぐらい。気を失っているらしく周りがこれだけ騒がしくしても少年が

目を開けることはなかった。

少年は担架に乘せられたまま救急車に乘せられる。

少年を乗せると救急車はすぐさま出発し病院へと向かっていった。

その後の調べで生存者は千堂剣二せんたうけんじと判明。生存者が一名発見されたことは世間に発表されたがメディアから彼を守るために生存者の名前は伏せられ、彼は何度も病院を移ることになった。

それから一年後……

「ここがお前の教室だ」

その声でかつて千堂剣二と呼ばれていた少年は思考していた意識を現在へと引き戻した。

声の主はこれから編入することになったクラスの担任で名前は藤宮玲香みやれいかと言うそうだ。

「ここで少し待っている」

そう言うつと藤宮先生は教室へと入っていく。

今日から自分はこの国立仙陽聖宝学園せんようせいほうで八神剣二やがみけんじとして過ごすことになる。

その事を考えるといろいろな事が頭に浮かんでくる。

全く新しい人生を歩むことへの抵抗。今までの過去を無かった事にしてしまう事。そして……

そんな事を考えていた時に教室のドアが開き慌てて剣二は意識を目の前に戻した。

ドアから藤宮先生が顔を出して手招きする。それを見て剣二は教室へと入っていった。

時は2078年。30年近く前に人類は画期的な発見をした。人を始め生物の中に未知のエネルギーを発見したのだ。

そのエネルギーをマナと呼びそれから5年の月日が経ったある日、

そのマナを動力とした道具が発明された。

人が持つマナを使い強大な力を放つ道具。後にアーティファクトと呼ばれる道具が初めて生み出された日だった。

アーティファクトの力は強大で当時の重火器といった装備を遙かに超える火力を秘め、高い戦果を誇った。

これからの戦争はアーティファクトで決まる。それを予感した各国はすぐさまアーティファクトの研究とそれを扱う人材の育成に力を注いだ。多額の資金が注がれそれによって新たなアーティファクトが生み出され、アーティファクトを扱う物アーティファクターとアーティファクトを作る者クリエイターが育成されていった。

そして現在、アーティファクトは軍という分野だけでなく警察、医療、スポーツといった分野でも活躍するようになっていた。

「八神剣二です。よろしくお願いします」

そう言って剣二は頭を下げる。

「八神は奥の窓側の席に座ってくれ」

藤宮先生に促され彼はその席に向かう。

歩きながら周囲を見渡すと生徒達は新たに加わることになった自分に興味深々な視線を向けている。

その事に内心吐息しながら席に辿り着く。

「よろしくね」

声をかけられ健二は声のした方へと顔を向ける。

挨拶してきたのは自分の右隣の席に座っていた女子生徒だった。

綺麗な長い髪を腰まで伸ばし優しく凛とした瞳は彼女の綺麗な顔立ちをさらに引き立たせていた。

「私、せんとつ あやか泉堂綾香っていうの」

その名前を聞いた瞬間、剣二は目を大きく見開いた。

——その名前は……

「えっと……どうしたの？」

「……あ、いや、何でもない」

すぐさま平静を取り戻した剣二はそう答えて席につく。

「それじゃあ、授業を始める」

そうして授業が始まった……

「ねえねえ、この時期に編入って珍しいね」

「趣味は何？」

「前はどこにいたんだ？」

最初の休憩時間、剣二はクラスメイト達の質問攻めにあっていた。前は病気が原因で一年近く病院で入院していたんだ」

剣二はそう言って話し始める。

心臓系の病気で一年近く入院した事。この度、手術が終わり無事退院出来たこと。そしてこの学園の編入試験に合格した事。

事前に考えた作り話を彼は皆に聞かせた。

「大変だったんだね」

「何か困ったことがあったら言ってくれよ。力を貸すからさ」

話を聞いたクラスメイトはそう言っただけに剣二を励ました。

「八神剣二はいますか？」

彼を探す声が聞こえたのはそんな時だった。

剣二を始め彼の周囲にいた生徒達も声のした方へと視線を向ける。彼を探していたのは女子生徒だった。物静かな雰囲気で見える人によつては人形を思い浮かべるだろう。それほどまでに綺麗な少女だった。

彼女の姿と声には覚えがあった。名前は楠奏^{くすのき かなで}。年齢は一つ上。ここに来たということはあれができたという事だろう。

「ここです」

そう言いながら立ち上がり彼女のもとへ向かう。

「君のアーティファクトが出来たから届けに来た」

感情の籠っていない声で彼女はそう言っただけで両手で持っていたアタッシュケースをこちらへと差し出してきた。

「ありがとうございます」

そう言って差し出されたアタツシukeースを剣二は受け取る。

「とりあえず使ってみて何か不満があったら私のところへ持ってきて。すぐ調整するから。メンテナンスの時も同じように」

「わかりました」

そう答えると要件はそれだけだとばかりに彼女はさっさとその場を立ち去ってしまった。

「お前、あの楠先輩と知り合いなのか？」

席に戻ると早速男子生徒が尋ねてきた。

「あの？あの人が有名なのか？」

「あの人、人間嫌いで有名なんだぜ？」

剣二はまだ疑問に首をかしげているが男子生徒は構わず話を続ける。

「楠奏。2年生でクリエイター専攻。うちの学園の中じゃまずクリエイターとしての実力はトップクラスだな。どこかの企業で既に設計しているくらいクリエイターとしての実力は有名だけど普段は誰かと話すのも臆病そうな人なんだよ。だから、制作依頼どころかメンテナンスの依頼すらも受けてはくれない事でも有名なんだよ」
「アーティファクトはそれまでの常識を変えるほど凄まじい力を持っている。しかし、所詮人によって生み出された物。使い続ければ摩耗もしていく。当然、定期的なメンテナンスや点検が必要になってくる。」

軍等なら所属しているクリエイターに、医療等ならクリエイターの業者にメンテナンスを依頼する事になる。

こういった学校の場合、外部の業者などに依頼することも可能だが基本的に高額なのでほとんどの学生は外部の業者に依頼することはない。変わりに同じ学園内にいるクリエイターの学生に点検やメンテナンスを依頼することになる。

学園側もそれを想定しているらしく、学生間でのアーティファクトに関する取引は原則無料で行うように校則で決められている。材料は基本的な物なら学園が無料で用意してくれるし設備も学校のも

のを無料で貸しだしてくれる。

アーティファクターを目指す学生にとっては安くメンテナン스や点検が済み、クリエイターを目指す学生にとっては貴重な実習となる。この制度は両者ともに得られるものが多いのだ。

「それなのにメンテナン스どころかアーティファクトを製作してもらっただ！っていか何で知り合いなんだ！？」

興奮した口調で男子生徒は剣二の机を叩く。

「波瀬君。落ち着いて」

綾香が興奮する男子生徒、波瀬優木^{はな ゆうき}を宥める。それで優木は我に返った。

「あ、悪い……それで何で知り合いなんだ？」

その疑問は他のクラスメイトも感じているらしく興味深々という目でこちらを見ている。

「知り合いの知り合いだ。ここに編入するって事でアーティファクトを作ってもらうことになってそれで彼女を紹介されたんだ」

周りの雰囲気^{ふんいき}に内心呆れつつも剣二は律儀に答える。

その説明で大体の生徒は納得した。何人かはまだ何か疑っている様子はあったがそれを気にしても仕方がない。

「それでアーティファクトってどんなの？」

この質問にも他のクラスメイトは食いついた。全員の視線が剣二が持つアタッシュケースに注がれる。

しかし丁度その時、チャイムが鳴り担任の教師が教室へと入ってきた。

「仕方ない。次の時間だ」

優木がそう言う^{いう}と他のクラスメイト達も頷きそれぞれ自分の席へと戻って行った。

彼らの様子に呆れつつもどこか楽しげな表情で剣二は次の授業の準備をしていった。

一章二話模擬戦

次の休憩時間、クラスメイト達は剣二のアーティファクトを確かめようと群がってきたがそれを止めたのは意外にも先ほど次の時間だと言っていた優木だった。

「まあ、待て待て。よく考えたら今日は午後に実技の授業があるじゃないか。それまでのお楽しみって事にしねえか？」

彼の提案にクラスメイト達は少しの間考えこむがやがて納得したのか次々と剣二から離れていった。

「助かった」

素直にそう思った剣二は優木に礼を言う。

しかし、優木はどこかの悪代官が浮かべそうな凶悪な笑みを浮かべながらこう言ってきた。

「いいって。そのおかげでうまくいけば儲けられるかもしれないし

……」

「……何をやる気だ？」

嫌な予感を感じたそう言っただけで優木に尋ねる。

「お前のアーティファクトがどんなもので賭けをするのさ……」

「……」

今にも声を出して笑いそうな彼に剣二はもはや呆れた視線しか返すことができなかった。

そして実技の授業。

剣二はアタッシュケースを持ってグラウンドに立っていた。

周囲がちらちらとこちらに視線を送ってくる。多くの男子がやけに熱心にこちらのアタッシュケースを見ているのは恐らく波瀬が原因だろう。

「全員揃ったようだな」

そう言うのは藤宮先生だった。

「とりあえず準備運動をやってそれから模擬戦を始める。八神!!」
テキパキと指示する最中、藤宮先生は剣二を呼ぶ。

「はい」

「編入していきなりの模擬戦だがやれるか？」

編入直後、まだクラスに慣れきっていない状況で模擬戦ができるのか心配してくれたようだ。

「大丈夫です」

そう答えつつ剣二は過去の感覚を呼び起こしていく。

かつて千堂剣二と呼ばれていた頃、彼はこれと同じようなアーティファクターやクリエイターを育成する学園に通っていた。そこは中高一貫校でアーティファクターを学んだ経験はここにいる大半の学生より長いだろう。

——大丈夫。やれる。

ブランクがあるせいか多少ブレを感じるがそれでも悪くない感覚だ。自然と体が引き締まる。

「大丈夫そうだな。それじゃあ、準備運動が終わり次第早速始めてもらおうか。相手は……そうだな。泉堂。お前にやってもらおう」

「はい!!」

藤宮先生のオーダーに綾香は元気よく答えた。

そのやり取りを見て剣二は己の過去をそこに重ねるのだった……

準備運動が終わると藤宮先生は綾香と剣二の名前を呼んだ。

二人が返事をする则ち彼女は場所を指定しそこに立つように指示をする。

彼女の指示に従い二人は指定された場所に立った。

剣二は彼女が持つ武器に視線を送る。

彼女が持っているアーティファクトは杖だった。それもいわゆる物語が魔法使いがもちそうなタイプの杖だ。

——杖そのものは余り戦闘に向いた物とは思えない。となると効果攻撃型か？

彼はアタツシユケースを降ろしロックを外しながら相手を分析する。

効果攻撃型とはアーティファクトの系統の一つである。基本的にアーティファクトの半数以上を占める系統でもある。

攻撃効果を持ったアーティファクトがこれに当てはまる。このタイプは効果が攻撃能力を持っているためアーティファクトが武器の形状をしてないものが他の系統と比べて圧倒的に多いのだ。

綾香は半身の構えで杖の杖先はこちらにしつかりと向けられている。まるで狙いをつけるかのよう……

一方の剣二はアタツシユケースのロック外してアタツシユケースを開いたところだった。しかし、彼は中身には手をつけずそのまま立ち上がってしまう。

と、彼が立ち上がるのと同時にアタツシユケースから何かが飛び出してきた。

綾香を含めて生徒達は飛び出してきたものの正体を確かめようとあちこち視線を巡らせる。

それらは少しの間、準備運動をするかのように周囲を飛び回っていた。やがて、それも終わったのか剣二と綾香の間に向かって集まり剣二を守る盾の様に8本の剣が立ち並んだ。

「意思操作型のアーティファクトか」

そう言ったのは藤宮先生だった。

意思操作型は使用者の意思に応じて自由に動き回る効果を持つアーティファクトに与えられる系統である。精密な動作するために高い集中力が必要で動かす数が増えるほどその分意識が分散してしまい動きは大雑把になりやすい傾向があるが使いこなせばかなり複雑な動きもできるため、かなりトリッキーなアーティファクトといえる。

彼のアーティファクトを見ていた綾香はその事を思い出し、自分の表情を引き締める。

ちなみにギャラリーの方からは喜びの声や悔しがる声が続くも聞こえてきた。

それらの騒ぎを藤宮先生は視線で黙らせる。

「両者、準備はいいようだな……」

そう言つて藤宮先生は右腕を上げる。

それを見て綾香は腰を落とし、剣二は剣の剣先を綾香の方へと向ける。

そして……

「始め!!」

その掛け声と共に模擬戦が始まった……

先手をとつたのは綾香だった。すぐさま杖にマナを送り込む。

彼女のマナの供給に応じて杖がその力を起動させる。

杖の先に供給されたマナが集まり直後、マナの砲撃が剣二に向かって放たれた。

しかし、その攻撃を予想していた剣二は左へのサイドステップで砲撃を避けると剣に意志を飛ばす。

彼の意志に応じて6本の剣が綾香に目掛けて飛翔していく。

反射的に綾香は右へサイドステップ。直後、彼女の左の頬を剣が掠めていく。

攻撃を避けた綾香が再び砲撃を放つ。しかし、その攻撃も読んでいた剣二は再び砲撃を避けてしまうと再び剣に意志を送る。

直後、綾香を通り抜けた剣達が停止、反転。再び彼女に襲いかかる。

しかしこの程度の攻撃、彼女も予想済み。剣の方に視線を向けつつ今度は反対側に飛ぶ。

だが、それに合わせて剣がその軌道を変更、綾香の後を追いかける。

る。

——回避のタイミングと方向を読まれた？

一瞬、綾香は視線を背後の剣二に向ける。だがすぐさま剣に向き直り剣の対処に集中する。

彼女が選んだ対処は持っている杖で剣を弾くというものだった。できるだけ遠くに飛ばすことで剣が戦場に帰還するまでの時間を稼ぐ。

1本、2本、3本、4本までは上手くいった。だが4本目を弾いた辺りで5本目の軌道が若干変わった。4本目を弾いたことでできた杖の死角へと剣が回りこんできたのだ。

さらに6本目の剣は彼女の回避するであろう位置へと既に方向を変えていた。防御はできない。かといって避ければ6本目が彼女を襲う。ゆえに彼女は第三の選択を行った。

4本目を弾いた影響で杖の先は地面の方を向いている。ゆえに迷わず彼女は砲撃を放った。

砲撃は地面に着弾、と同時に爆発が巻き起こる。

爆発の衝撃で5本目と6本目の剣の軌道が変わる。さらには砲撃の衝撃で吹き飛んだ綾香は先ほどとは全く別の場所にいる。

加えて先程の爆発でグラウンドの砂が舞い視界を妨げている。恐らく剣二はまだこちらを見つけていない。どこにいるのかわからない以上剣が襲いかかってくる可能性は低い。

ゆえに綾香は迷わず先程剣二がいた方向に砲撃を放った。砲撃の衝撃で砂煙が吹き飛び視界が開く。そして彼女は見た。砲撃を放った先に彼の姿はなかった事を……

判断は一瞬、直後彼女は飛ぶ。そして彼女の予想通り、先ほど自分が砲撃を放った場所を2本の剣が通過する。

剣が2本しか来なかったことに疑問を持ち、彼女は急いで周囲を見回す。

砂煙が晴れかけている視界。そこにこちらに向かって飛翔してくる2本の影を見つける。

再び飛んで剣を避ける。

――攻撃は6本。後2本はどこ？

彼女の疑問はその直後、視線を落としたことで氷解した。

ふと、下を見るとそこには水平になって砂をかぶった2本の剣の姿があった。

誘導されたことを悟った直後、剣は縦になるとこちらに向かって斬り上げてくる。

金属音。反射的に杖を水平にして2本の剣の斬り上げを防ぐ。

そして後ろへと跳躍。他の剣を警戒する頃には砂煙が晴れ視界は最初の状態へと戻っていた。

剣は8本、剣二の目前に展開しいつでも彼女に向けて放つ事ができる状態だ。

――やっかいね……

睨み合った状態の中で彼女が思ったのはそれだった。

状況は彼にペースを握られている状態だ。使用者は離れ、いくつかの剣でこちらを注意を引き、その間に他の剣が死角から襲う。

意志操作型を操るアーティファクターの常套手段である。

一方の自分は効果攻撃型。その効果はマナによる砲撃。威力は高いのが特徴でその威力は学園内でも上位に位置する。

しかし、単発故に避けられやすい。

おまけに連射もできないので剣二の剣を全て撃ち落とすには全てが纏まっていないといけない。

――一撃を当てる事ができればそれで終わらせられる自信はあるんだけど……

それができれば苦労しない。

剣二との距離はそれなりに離れている。ここで撃っても軽々と避けられてしまうだろう。

そうなるに彼に近づかないといけない訳だが彼の剣達がそれを許さないだろう。とはいえ近づかない事にはどうしようもない。

「やるしかないか」

思いを言葉にして彼女は駆け出した。

そうして戦いが再び始まる。

剣二の四方八方からの剣の攻撃に対処しつつ綾香は彼との距離を詰める。時たま隙を見ては砲撃を放っている。

一方の剣二は距離を取って彼女の砲撃を避けながら8本の剣を巧みに操り彼女の接近を妨害しつつ攻撃を放つ。

戦いは派手ながら、されども状況は膠着状態に陥っていた。

そんな膠着状態の中、剣二はこちらに近づこうとする綾香を見ていた。

彼女の狙いは想像がつく。回避できない距離まで接近しあの砲撃を放つつもりなのだろう。

—— やっかいだな。

今までのやり取りを得て彼は綾香に対してそう結論する。

現状、数と位置取りによってこちらが主導権を握っているがそれでも綱渡りの状態、ミスをすればあっという間に負けてしまう。

それほどの威力をあの砲撃は秘めている。当たればまず終わりだ。だからこそ、絶対必中の状況にさせる訳にはいかない。

砲撃に対処できる距離を維持しつつ攻撃を繰り返す。これが堅実な対処だ。

そう判断すると剣二は距離をとりつつ6本の剣を綾香の元へ向かわせる。2本は突破された時の迎撃用として残す。意志操作型の基本的な戦い方だ。

まずは6本のうち1本を先行させる。

彼女が回避行動に出るのなら次々と剣の軌道を変更させて追い詰めていく。

逆に防御に出るなら防御の死角から他の剣で襲わせる。

そういう手を現在想定している。

そうしているうちに先行した剣が綾香に迫る。

彼女が選択した選択は……迎撃だった。

——な！？

予想外の手に剣二は驚く。

彼女の攻撃は威力はあるが連射のきかない砲撃。

攻撃の迎撃として使うには不向きだ。

しかし、彼女はそれを選択した。

先行していた1本ともう1本は砲撃の線上にある。今から意思を飛ばしたところでその2本は砲撃から逃れることは出来ないだろう。ならば、砲撃に構わず残り4本で彼女を狙うのがベストだ。

現在、綾香は砲撃を放つために止めた足で己の体を砲撃の反動から支えている。つまり、動けない。チャンスだ。

そう判断すると残り4本の剣を彼女に向けて放つ。

しかし、その直後剣二は彼女の真の狙いを見ることになった。

なんと、彼女は砲撃の反動に耐えながら杖先の向きを右に変えていったのだ。

当然、杖先から放たれる砲撃も右へと向きを変えていく。

それはまるで巨大な剣を横へ振る動作に見える。実際、綾香の砲撃は彼女の元に向かう4本の剣と剣二を飲み込まんとは迫ってきている。

——迎撃と攻撃の両方を選んだということか。

彼女の判断に感心しつつも剣二は剣達に意思を送る。

最初に迎撃された2本は離れたところにある。それらはすぐに呼び戻す。

残りの4本は左へと軌道を変更して砲撃に巻き込まれないようにする。綾香への攻撃は中断することになってしまいが先の2本が戻ってきてない以上、一瞬でも攻撃の手段をなくす訳にはいかない。

無論、自分の事も忘れてはいない。

——少々危険だが……

そう思いつつも彼はその手段で打って出ることにした。

体のあちこちから痛みを感じる。

無理な砲撃向きの変更は綾香の体に多大な負担を掛けていた。

——でも、それくらいしないと勝てない。

それがこれまでのやり取りから感じた結論だった。

ノールリスクで攻めても勝ち目は薄い。ならば、リスクを冒すして勝ちに行く。そのためにこの手段を選んだ。

——彼はどうでるかな？

その疑問とともに綾香は彼、八神剣二を見る。

既に4本の剣はこちらへと向けていた剣先を右に向け、迫り来る砲撃から逃れようとしている。恐らく、これで時間を稼いでいる間に先に飛ばされた剣を呼び戻すのだろう。

しかし、砲撃は剣だけに迫っているのではない。その後方、剣二に本人にも迫っている。

先の剣の動きから彼は逃れる自信がある事が伺える。

そしてその自信通り彼は逃れた。驚くべき方法で……

彼が選んだ方法……それは上へと逃げることだった。

やり方は簡単だ。迎撃用に残していた2本の剣のうち1本に乗って上へと上昇する。それだけだ。

慣れない人間がやると移動中にバランスを崩して剣から落ちたりするが、剣二は手慣れた感じでバランスをとって立っていた。そのまま剣を上昇させて砲撃から逃れる。

だが、彼が剣に乗ったのは避けるためだけではない。何と彼は剣に乗ったまま綾香に接近していったのだ。

向こうはリスクを冒して勝ちを狙ってきている。そういう覚悟で来る相手に堅実策では押し切られる可能性がある。

ならばこちらもしリスクを恐れず攻めるべきだ。

そう判断した彼の狙いは接近戦。次の砲撃より早く懐に入り込む。そして剣二の狙い通り、彼は綾香の懐に入り込み剣から飛び降りる。

すかさず一緒についてきた剣を握り綾香に向けて一閃。

寸前のところで避けた彼女に先ほど剣二が乗っていた剣が襲いかかる。

これを杖で弾いた綾香に再び剣二が襲いかかる。

腕の力と意思操作による力、二つの力ののった剣が彼女の杖のガードを崩す。

直後、剣二の背後に隠れていた別の剣が姿を現し彼女の目の前で静止した。

これが決定打となった。

こうして剣二と綾香の模擬戦は終了した。

一章三話戦いの後

その日の放課後、剣二の周りには人だかりができていた。

「泉堂に勝つなんてお前すげーよ」

「まさかあそこまで強いなんて思わなかったよね？」

「ねー」

クラスメイト達はそう言っただけで次々と剣二を褒めたたえていた。

「いや、それは誉め過ぎだと思うんだが……」

彼らの反応に剣二は少し戸惑っている。何故そこまで皆が褒めるのかわからないからだ。

「そっといえば八神君知らないか」

「泉堂さんの名前を聞いて気づいているのかとばかり思ってたんだが……」

彼のその反応を見てクラスメイト達は何やら理解したという顔を浮かべる。

「どういうことだ？」

何を言っているのかわからない剣二は戸惑いの面持ちのまま彼らに尋ねる。

「泉堂さんってあの泉堂刀弥の娘さんだよ」

「え!？」

予想外の答えに剣二は思わず大きな声を上げて驚いてしまう。

「やっぱり気づいてなかったんだ」

「普通気づくよな？」

彼の驚きの反応にクラスメイト達は口々にそう言っただけで笑いを漏らす。

「いや、まさか自分の近くにいる人がそんな人とは思わないだろう……大体、娘だからって強いってわけじゃないだろ？」

気がつかなかった理由は別にあつたのだがその事は隠して剣二は反論を試みる。しかし……

「ところがどっこい。彼女入学早々風紀委員にスカウトされている上に総合成績は2年の中じゃトップ。おまけに実技の評価は全学年含めて第4位!!」

こういった学園の場合、風紀委員は暴力沙汰に対応する必要もあって実力が高い者が選ばれる風習がある。基本は2年の中から選ばれるのが普通だ。それが1年。それも入学早々スカウトされるということはかなり実力なのだと容易に想像がつく。

「マジか……」

思わず天を仰いでしまう。

正直、事情が事情なのでできるだけ目立つつもりはなかったのだがどうやらその望みが叶うことはなさそうだ。

「本当に今まで病院にいたのか？」

「実はエリート教育を受けてとか？」

「いやいや、実は秘密の特殊部隊とか……」

そうしてクラスメイト達は剣二を置き去りにして勝手に彼の正体について想像を膨らませて騒いでいく。

「ごめんね。騒がしくて」

「!? 居たのか」

そんな中、彼らを代表して謝ってきたのは先ほど話題の中心にいた綾香だった。

「まあ、隣の席だからね」

そう言っただけで彼女は微笑みを浮かべる。

ふと、先ほどの話を剣二は思い出す。

風紀委員に所属している。総合成績トップ。実技の評価は全学年含めてトップクラス……

——幾ら何でも似すぎだろう……

「どうしたの？」

「うお!？」

会話の途中に考え込んでしまったためか綾香がこちらを覗き込むように顔を近づけて尋ね来た。

近づいたことで視界いっぱいに広がった彼女の顔を見て剣二は驚いてしまう。

「えっと、ごめん。驚かすつもりなんてなかったんだけど」

予想外の反応をした剣二に綾香は戸惑いながら謝ってきた。

「いや、こっちこそ悪い。話の途中で考え込んだ」

未だドキドキする内心を隠しながら剣二も謝る。ちらりとクラスメイト達の方を見ると未だに彼の正体についての話題で騒いでおり幸運にもこちらに気づいている様子はなかった。

「それで、何を考えていたの？」

「え？」

綾香のその問いに剣二は思わず固まってしまった。

さすがに正直に綾香の事について考えていたと本人に言うのは気まずすぎる。

何か別の話はないか、と考えを巡らせていると……

「ちくしょー！！！」

突然、教室内に叫び声が反響した。

驚いて声のした方を見るとそこには何故かまだ席に座っている優木が叫び声を上げながら机を叩いている姿があった。

「波瀬……一体どうしたんだ？」

状況が理解出来ない剣二はとりあえず話を聞いてみるためにそう尋ねる。

「ぼろ負けだ……」

「は？」

訳の分からない彼の返答に意味がわからず思わず声を出してしまう。そこへクラスメイトの男子がわかりやすいようにフォローしてきた。

「あいつ、八神のアーティファクトの賭けでぼろ負けしたんだよ。

そのショックで今まで塞ぎこんでたんだが……」

「……ああ」

呆れたという表情を浮かべ剣二は波瀬の方を見る。彼の方はとい

うと負けた怒りが収まっていないうちに机をたたき続けている。
ふと、時計を見ると授業が終わってから随分と時間が経っていた。
「帰るか」

そう呟くと机にいていた鞆を持ち教室から出ていこうとする。

「八神君。また明日ね」

「お、八神帰るのか？」

「じゃあねえ」

「また明日」

そんな彼を見て綾香が別れの挨拶をしたのをきっかけに続々とクラスメイト達がそれに続いていく。

「ああ、また明日」

剣二は彼らの挨拶を受けてそう返して帰途に着くのだった。

自分のマンションに帰り着いた剣二はドアに鍵を掛けて明かりをつける。

彼を迎える者がいない部屋はただ静かに彼を迎え入れた。

リビングにたどり着くと鞆を床に置きソファーにもたれ掛かるように飛び込んだ。

リビングには時計や冷蔵庫、棚など生活に必要な家具は並んでいる。他にもかわいらしい縫いぐるみなどでリビングは飾られているがそれらは剣二が自分で買ったものではない。

しばらくソファーに倒れていた剣二だがやがてむくりと起き上がるとキッチンに立ち晩御飯の準備を始めた……

晩御飯を食べ食器洗いが終えた丁度その時、チャイムが鳴った。
インターホンで相手を確認してみると知っている相手だったので自動ドアのロックを解除する。

やがて、ドアをノックする音が聞こえ開けると先程の相手が顔を見せた。

「よ、元気か？」

陽気そうな声で目の前の男は剣二にそう挨拶してきた。

「見ての通りです。久瀬さん」

剣二は目の前の男久瀬総一くぜ そういちにそう告げると彼を部屋の中に招き入れた。

「学校はどうだった？」

お茶を運んで席に着くと早速とばかりに彼は剣二にそう尋ねてきた。

「どうって……恐らく一般的に転校生や編入生が受ける扱いを受けましたとしか……」

「まあ、初日はそんなもんか」

そう言ってお茶を飲む。

「ただ、模擬戦の授業で少々やり過ぎてしまっただけは目立つ事になりそうです」

心配するような表情を浮かべて剣二は模擬戦の出来事を話した。それを聞いた途端総一は大きな声を上げて笑い出してしまった。

「ははは……、そりゃあやっちゃったな」

笑い声を漏らしながら彼は剣二の背中を何度も叩いた。

「まあ、心配するな。内容は偽物だが戸籍自体は本物だ。何せ政府発行だからな。だから余程詳しく調べない限りばれる事はない。目立つことを恐れる必要はないんだよ」

そう話すと彼は剣二に向かってウインクをしてきた。

「まあ、それはそうと記憶の方ははどうだ？」

「……すいません。まだ……」

その話題になった途端、申し訳なさそうな顔になって剣二はそう答える。

「まあ、すぐ戻るなんて思っちゃいない。それに記憶回復といっているがどちらかというとお前の日常生活への復帰も目的にはある。俺としてはついでに記憶が戻ってくれば儲けもんだと考えているんだがね」

彼の言葉に剣二は苦笑する。

「しかし、この様子だと冴子さんも時たま様子を見に来てるようだな」

そう言っただけが見るのはリビングに飾られた縫いぐるみだった。

「そうですね。ここに住むことになった時も飾り付け等を手伝ってもらいました」

「なるほどね」

周囲を見渡しながらかう漏らす。

「それじゃあ、大丈夫そうだしそろそろ帰るかな。何かあったら連絡してくれ」

「ありがとうございました」

そう述べるに剣二は彼を見送るために立ち上がった。

久瀬総一は一年前の事件を調査している公務員だそうだ。どういった機関に所属しているのか等詳しいことは聞いていない。

彼が剣二の記憶を気にするのは剣二が見つかった場所が爆発の中心地近くだったかららしい。ひょっとしたら失われた記憶からあの事件の謎が解けるかもしれない。そんな期待があるからだそうだ。

表向きあの事件は原因不明の事故とされている。しかし、実際は何一つわからなかったのとおりあえず事故という形に落ち着いただけの事。だからこそ唯一、原因を見ているかもしれない剣二の記憶は重要な手がかりとなるかもしれないのだ。

もう一ついえばあれだけの爆発にも関わらず剣二が生きていた事も疑問である。それは誰かに言われるまでも剣二自信も不思議に思っていた。その事もあつて当初は剣二が爆発の犯人ではないかと疑われた事もあつた。今はまだマシな扱いだが恐らくそう考えている者はまだ少なからずいるのだろう。

総一を見送った後剣二は風呂に入り就寝のための準備を整えている。

ふと、ニュースを見ようとテレビをつけるとそこには公園を仲良

く遊ぶ兄妹の姿が写っていた。

その映像を見て剣二はかつての自分達の姿をそこに重ねてしまう。
自分の姿と双子の妹である千堂彩花^{せんとう あやか}の姿を……

千堂彩花……

剣二以上にアーティファクターの才能に優れその実力で校内の上位に名を連ねていた。

正義感も強く、そのため風紀委員にも所属していた。――（中高一貫だったため中等部からも風紀委員に所属することができる）

加えて総合成績も優秀で皆からも慕われていた。

そんな彼女の事を剣二は誇りに思っていた。

しかし、1年前の事件で彼女は死んだ。剣二にとってこの事実の半身を失ったような感覚だった。

実際に遺体は見つかってない。というのもあの事件で見つかった遺体は酷い有様でどれが誰なのか知ることができないためだ。ゆえに剣二以外のあの場にいたであろう人達は死亡扱いとなり、彩花もまたその中に名前を加えられる事になった。

気がついたらテレビを消していた。

そして何ともいえない重い気持ちを引きずったまま剣二は自分のベッドに入るとそのまま眠りの中へ入っていった……

一章四話戸惑い

剣二が編入してから数週間が経過した。

模擬戦の結果もあって先輩後輩問わず学園内の多くの生徒が彼に注目することになったが今のところそれ以上の変化がなかったのは幸いだった。

クラスメイト達ともうまく溶け込めており楽しい学園生活を過ごしている。

ただ一つの事を除いては……

「八神君」

その声を聞いた途端、反射的に体が緊張してしまう。

「な、なんだ？」

吃った声で彼女の呼びかけに応じてしまう。

「えっと、数学のプリントを集めるよう先生に言われてるんだけど、いいかな？」

彼の反応に綾香は戸惑いつつも要件を切り出す。

「あ、ああ」

慌てて彼は鞆からプリントを取り出すと彼女に渡す。

「ありがと」

そう言うとき彼女は他のクラスメイトの元へ向かうのだった。

「ねえ、八神君って泉堂さんが相手の時だけ何か様子が違うよね」
放課後、帰る準備をしているとクラスメイトにそう話しかけられた。

それを聞いて他のクラスメイト達も集まってくる。ちなみに綾香は風紀委員の会議があるからと既にここにはいない。

「それ俺も思ってた」

「泉堂さんが相手だと緊張しているというか変に意識しすぎてる感じがするよね」

「……かもな」

何ともいえない表情を浮かべて剣二は答えた。
確かに彼女と話す時、自分が変に緊張しているという自覚はある。
彼女の事を知ってからどうも自分は彼女を妹と重ねてしまっていた。

似ている部分が多いだけで彼女は妹と違うとわかっているのだが
それがどうにも治らない。

おかげで彼女に迷惑を掛けてしまっていた。

「しかし、いくら何でもわかりやすすぎるだろ？」

「だよな？」

「でも、彼女、綺麗で強くて成績優秀な上に性格もいいから人気者だよな」

「ああ、女子、男子含めてファンはかなり多い」

「ライバルも多そうだね」

「だけど、八神君は綾香に勝つくらい強いから他の連中よりは勝算ありそうだけど？」

「確かに」

ふと、意識を現在に戻すとクラスメイト達は何やら盛り上がっている。
「悪い、考え事してた。ところで何をそんなに盛り上がってるんだ？」

疑問に思い聞いてみると、途端にクラスメイト達の視線がこちらに集まってきた。
「な、なんだ？」

その事に剣二はたじろぐ。

「……八神君。私達は八神君の味方だよ？」

「……は？」

突然意味不明な事を言われ剣二思わず声を盛らず。

「何か必要な事があれば言ったね。協力してあげるから」

「正直、俺としてはいろいろ思うところがあるが君になれば彼女を

「託せよう」

「応援しているよ」

次々と出てくる応援の言葉に剣二は嫌な予感を隠せない。

「……一体何の話だ？」

「何って八神君が泉堂さんの事が好きだって話」

恐る恐る尋ねてみると予想通りの答えが帰ってきた。

なるほど、確かに傍から見たらそういう風に見えるのかもしれない。

「悪いがそれはお前達の誤解だ」

一応、面倒事を避けるために剣二は誤解を解くことを試みるが

「えー、じゃあ何で泉堂さんが相手の時だけあんな反応なの？」

「そうよ。そうよ」

「八神。ここは正直に白状すべきだ！！」

と、クラスメイト達が相次いで反論してくる。数も多いので対処するのも面倒だ。それに妹の事を話せない以上対処にも限界がある。「悪い。楠先輩にアーティファクトの調整を頼まないといけないから」

この場は逃げるに限る。溜息一つついてから剣二はそう判断すると急いで教室から出て行く事にした。

後ろから「待って！！」「逃げた！！」等といった声が聞こえてくるが明日にはすっかり忘れているだろう。

そういうクラスだということはこの数週間で嫌でも理解していた。

「全く、どうして恋愛事に持って行こうとするんだろっな」

「……」

そう言っただけで剣二は先程のクラスメイト達の反応を思い出して愚痴をこぼす。

奏は愚痴に反応せず黙ったまま剣二のアーティファクトの調整を続けている。

「そりゃ、綾香に対して俺の反応が他の連中と違うのは事実だろう。」

だからってすぐに恋愛事だと考えるのは短絡的過ぎだろう」

「……」

「まあ、あいつが綺麗なものは認める……性格もこんな反応を返すのに嫌ってる様子がないし……」

「……」

「大体、味方って何だよ。ただ他人の色恋にちょっかい出して楽しみたいだけ……」

「……うるさい」

「……すみません」

剣二の終わらない愚痴にキレたのか突然奏が怒りだし、反射的に剣二は謝ってしまった。

「私は君のアーティファクトを調整するためにここにいる。決して君の愚痴を聞くためじゃない。愚痴を言いたいなら別の人に言って」「その通りなんですが……」

まあ、確かに彼女にとって自分は単なる自分が作ったアーティファクトを使う顧客の一人なのだろう。だが剣二からすればこの学園内で唯一剣二の正体を知っている人間なのだ。そのせいか他の人達より気が楽になってしまうのだ。

アーティファクトの製作の依頼の際にかつて使っていたアーティファクトの情報を出すために彼女には自分の過去が伝えられている。無論、他言無用という事も言っている。

しかし、彼女はこちらの過去に興味を示さずこちらの製作依頼を引き受けてくれた。あれこれ尋ねられる可能性を考えていた剣二としてはこれには助かった。

他人に興味を示さず、ただアーティファクトに心血を注ぐ。それが楠奏という人間だ。

ふと、気になることが頭に浮かんた。

「何故、楠先輩は他の学生達の依頼を受けないんですか？」

人付き合いが苦手だとしてもアーティファクトに興味があるなら他の人の依頼を受けるべきだ。実際、今のうちにただ黙々と作業を

続けてれば人付き合いも何も無いのだから。そして必要とあらば自分の思いついたことをその人のアーティファクトに実装して試すこともできるだろう。

彼女の実績なら向こうもまず反対しないだろうし。

「……この学生はつまんない」

意外にも彼女はこの疑問に答えてくれた。

「実力が低いって事ですか？」

確かに彼女の顧客と比べれば学生達の実力はかなり低いだろう。

「それもあるけどワンパターン」

「ワンパターン？」

何がワンパターンなのかわからず剣二は首を傾げる。

「大半が教科書道理の決まりきった戦い方しかない」

「別に教科書通りの戦い方は悪いとは思いませんけど。教科書には載っているのは現状では最も合理的な戦い方です。あれを使えば効率よく実力を伸ばす事ができますよ」

教科書に載る戦い方にはメジャーという理由だけでなく高い汎用性と取得難易度の低さがある。それを使うという事は短い期間で高い戦闘技術を得ることができるという事だ。

「それは事実。だけどそれだけじゃ駄目。そこからオリジナルを組み込んで独自の戦い方を構築しないと先はない。それは君が一番わかってるはず……」

「……」

あまりの正論には反論ができない。確かに彼女の言う事は正しい。メジャーな戦い方はそれだけ長い間研究されており、その分多くの対抗策が考え出されている。教科書通りの戦い方のまま戦い続ければ、いつかはその多くの対抗策に負けてしまうだろう。

ならばどうすればいいか？

研究されていない戦い方を構築すればいい。無論、零からの戦い方の構築は大変だ。だから現存の戦い方を元に改良を始める。そうして改良に改良を重ね、研究されてもさらに改良を重ねることで自

分だけの戦い方を構築する。

彼女はここの学生達がそれをしない事に不満を感じているようだ。
「私の依頼人は皆いろんな戦い方をしている。もちろん君も……」
そう言っただけで彼女はこちらにディスプレイを見せてきた。見てみるとそこにはこの間の模擬戦の様子が写っている。

「いつの間に録ってたんですか？」

「基本的に実技の授業は全て録画されている。私達は調整等の依頼を正式に受けそういった情報を閲覧する権限が与えられる。データは多くあるに越したことはない。使いこなせなければ意味はないけど……」

要するに学校側が録画していた映像を今回の調整のために読み込んできたらしい。

「本来、意志操作型は使用者は遠く離れて複数のアーティファクトを操り数と相手の死角を突く事で相手を攻撃するのが主流。だけど君の場合それを発展させて逆に使用者も接近する。結果、君が持ったアーティファクトはアーティファクト自身がもつ運動エネルギーと腕力から生み出される運動エネルギーが合わさり高い攻撃力を持つようになった。それだけに留まらず己の体を使うことで相手の死角を増やし、接近戦術と自分のアーティファクトを組み合わせる事で本来の意志操作型の戦い方以上に多様な戦い方ができるようになった。まさに万能」

奏は珍しく饒舌になってこちらに話しかけてくる。恐らく自分の興味のあることには熱くなるタイプなのだろう。

「お褒めに預かり光栄ですけどリスクだってちゃんとあります。まず、近づいたことで相手の攻撃を受ける可能性が高まっています。目まぐるしく動く接近戦ゆえに当たりづらいでしょうけど何かの拍子に止まってしまえば相手の攻撃はまず直撃です」

実際、綾香との模擬戦はミスして彼女の砲撃を受けてしまえばこちらが負ける戦いだった。

「そのために君はそうさせない対抗策、防御方法も考え出している。

それだけ重点的に鍛えている接近戦こそ、本来君の戦い方。最初の模擬戦で何故、教科書通りの戦い方をしたのかの方が不思議」

「別に距離を取る戦い方をしないわけじゃありません。相手を観察するなら離れてる方が視野が広いという点もありますので……」

「……なるほど」

こちらの説明に納得したのか。彼女はただそれだけを言うと再び黙って作業に戻る。

「終わった」

しばらくして彼女はそう言ってディスプレイを閉じると調整のために持ってきた機器の片付けに取り掛かる。

「ありがとうございます」

「アーティファクトの調整は私の仕事。感謝する必要ない」

「仕事なら労をねぎらうのは当然ですけど？」

奏の言葉に剣二はそう返したが彼女は返事もせずに機器をもってそこから去ってしまった。

去る直前、彼女の表情が少し険しかったのは言い返されて怒ったせいだろうか。

ともかく帰ろう。

そう考えると剣二もまたそこから出ていった……

一章五話襲撃

剣二がアーティファクトの調整を受けていた頃。

綾香は風紀委員の会議を終えて帰途についていた。

「はあ……」

思わず溜息を漏らす。

溜息の原因は八神剣二の事だった。

彼が来てから数週間が経過した。

模擬戦の事もあって上級生下級生問わず彼は注目されるようになってしまったがそれでも上手く学園に馴染んできている。

しかし、何故か自分が話しかけると彼はぎこちない動きで反応してくる。

編入初日はそれほど問題なかったしそうなった原因に綾香は心当たりがない。

「どうしてなんだろうな……」

一人そんな事を呟いてしまう。

正直彼とは仲良くなりたくない。

それは男女という意味ではなく同じ立場ににいる者という意味でということだ。

綾香は入学前から父親の件もあって有名だった。学園に入りその实力を見せてからさらにそれに拍車がかかっている。

周囲はそんな彼女を尊敬している。それは下級生からだけでなく同級生や上級生からもだ。

皆、自分のことを天才と言っているが本人からすればそんな事はない。ただ、他の人達より多くの努力をしてきただけのつもりだ。

だから、綾香は剣二の实力を見た時。彼もまた自分と同じよう側の人間だと思った。

病気というハンデを背負っているがそれを足かせと思わず努力で乗り越えようとしている。

だからこそ、同じ立場同士いろいろと話をしたいと思っていたのだが……

彼の態度のせいでそれができないのだ。

——… 一体どうしたらいいんだろう？……

そんな事を考えてたせいだろうか。

彼女が彼に気がついたのは彼が真後ろまで近づいた時だった。

訓練の賜物だろう。反射的に飛んでいた。でなければ彼の短剣で斬られていただろう。

「いい反射神経だ」

襲いかかつてき男も彼女の動きには感心しているようだ。

綾香は相手を観察する。

黒いコートに耳にピアス。灰色に染められた髪に不気味に大きく見開かれ目をした男。記憶を探ってみるが残念ながら思い出される記憶はなかった。

「いきなり襲いかかるなんて…… とういうつもり？ 今の下手したら死んでるわ」

「何を驚いてるんだ？ そのつもりで襲ったんだが……」

綾香の抗議に男は平然と答える。

「え？……」

その答えに綾香は驚く。

「悪く思っなよ。恨むんなら俺達を追い詰めたお前の親父さんを恨むんだな」

その言葉に綾香は合点する。

父である泉堂刀弥は軍で働くアーティファクターで以前どこかの紛争を解決したことで国内では英雄扱いとなっている。

現在はどんな事をしているかは彼女は知らないが恐らく、この男の襲撃は父の仕事に関係するのだろう。

無言のまま彼女は杖を構える。

「いいね」。やっぱり殺すなら抵抗してくれた方が楽しいからな」
抵抗の姿勢を見せたことに相手は喜んだようで喜悅した表情を浮

かべてこちらを見つめる。

「それじゃあ、いくぜ!!」

そう言うと同時に男は綾香の目前まで接近していた。

「え?」

余りの速度に綾香は驚く。慌てて砲撃を放つが男は悠々とその砲撃を避けてしまう。

「おいおい、どこ狙ってんだ?」

呆れたという声を出しながら男は再び綾香に近づくと短剣を振り下ろす。

あまりの速度に綾香は相手の腕が見えなかった。右肩を斬られたと気がついたのは右肩に痛みを感じたためだった。

「おっと、手元が狂っちゃった」

男は狙いが外れたのにうれしそうな声でそう言う。それは楽しみがまだ続くことを喜んでいるかのようだ。

「もつと楽しませてくれよ」

「こ……の……」

再び砲撃を放つ。しかし男は圧倒的な速度でそれを避けると再び彼女に接近する。

一方の綾香は相手のアーティファクトの効果の正体を見極められず、どうすればいいかわからない。

と、いうのもアーティファクトの効果に術者の身体能力を直接的に上昇させる効果は存在しない。

そのため、目の前で起こっている現象は単純に自身の速度を上げるという効果ではないという事だ。何らかの方法でそのように見えているだけなのだ。

それがわかれば何かしら対抗策が見つかるかもしれない。しかし、正体がわからなければ対抗策のしようがない。

再び男の一閃。今度は左腕。思わず右手で斬られた所を抑えつける。

そこへ今度は男の蹴りが繰り出される。

見えない速度で繰り出された蹴りを受けて彼女は吹き飛び壁に全身を打ち付ける。

その直後に右の脇腹に痛みが走る。見るとそこに短剣が刺さっており目の前にはあの男が立っていた。

「もう終わりか？」

「まだよ」

見下ろすように尋ねる男に綾香は苦しそうな表情を見せつつもそう答えると自身の左手で相手の腕を掴む。

「あん？」

何をするのかという表情を男は浮かべる。

それを無視して綾香は右手の杖を目の前の相手に向ける。

「！？この！！」

それで相手はこちらの意図がわかったらしい。短剣を脇腹から抜いて離れようとするがそれを掴む左手がそれを離さず離れる事ができない。

どれだけ早く動くことができれば動きを封じてしまえば避けることはできない。

さすがにこれだけ近いと自分もかなり厳しいがそんな事をいつていられる余裕はない。

「これで！！」

そうして砲撃が放たれた。彼女が狙っていた方向とは違う方向に……。

「え？何で……」

腕を動かしたつもりはない。しかし、右腕に抵抗出来ないほど大きな力が加わったかと思うと杖と腕が彼女の意志に反して別の方向に向いてしまったのだ。

その隙を見逃さず男は彼女の左手に掴まれていた腕を引き離すとそのまま距離を取った。

「いやゝ。さすがに今のは焦ったぜ……」

「まさか……アーティファクトの力は……」

今にも倒れそうな己の体を辛うじて支えながら綾香は呟くように相手に問いかける。

「どうやら気づいたようだな。俺のアーティファクトの能力は特定の場所に指定方向への運動エネルギーを付加する場を展開する能力だ」

「効果……補助型……」

切れ切れの言葉で相手の系統を呟く。

効果補助型は直接攻撃能力を持たない効果を持つアーティファクトの系統。攻撃能力は高くないが効果補助は自身を助けたり相手を妨害する能力等非常に嫌らしい効果が多く、使いようによっては非常に強力な力をもつアーティファクトでもある。

恐らく男は自身のアーティファクトの効果を使って自身の移動の際に自分自身がいる場所にナイフを振る時は自分の腕のある場所に場を展開したのだろう。

そうすることで運動エネルギーが付与されて速度が上昇するという仕組みだ。

「まあ、場の展開できる範囲はそこまで広くはないがこれはこれでも中々いい能力だぜ？」

笑みを浮かべ男はそう言う足元に落ちていた小石を拾うところへ全力で投げてきた。

と、小石が男の手から離れたと同時に見えなくなる。恐らくアーティファクトの効果を使ったのだろう。

「ぐっ」

そう思った直後、腹の辺りから鈍い音が聞こえた。その瞬間、息ができなくなり何かを吐き出そうとする嘔吐感が込み上げてくる。

思わず膝をついてしまう。呼吸ができるようになって足元を見るとやはりというべきか、男が投げた小石がそこにはあった。

「全く、お前の親父さんのせいでこっちは散々だぜ。折角、こっち

が苦勞して集めたアーティファクトを全部台無しにされたんだからな」

そう言いながら男はコートをまくる。そこにはおびただしい数のナイフがあつた。

男はアーティファクトを持っていない方の手でそのうちの一本を手にとつた。

「まあ、運良く逃げることはできたんだが、そうすると折角の苦勞を不意にしたお前の親父さんに腹が立つてきてな。それで調べてみたら娘さんがいるそうじゃねえか。これはそいつに変わりに痛い目にあつてもらうしかないよな？」

そしてナイフを投擲する。

アーティファクトの効果で速度を上げたナイフは綾香の右手の甲に刺さる。

「ああっ！！」

その痛みに綾香は思わず悲鳴をあげる。

「んゝ。いい悲鳴だねゝ」

そう言いつつ男は新たなナイフを手にとると再び彼女にめがけて投げる。

今度は頬をかすめて後ろの壁に当たつた。

「んゝ外れか。やっぱり狙いをつけるのには向いてないな」

自分のアーティファクトを見ながら男はそう漏らす。

男はその後サカスのナイフ投げの要領で次々とナイフを投げていく。

肩や腕、背中。ナイフは次々と彼女に刺さっていく。しかし、彼は頭を狙うことはなかった。恐らく楽しみを引き伸ばすためだろう。しかし、それもやがては飽きる。

「あゝ。飽きちまつたぜ。それじゃあこれで最後にしますか」

そう言つて男は最後の投擲を始めようとする。

「じゃあな。最初に言つたように恨むならお前の親父さんを恨むんだな」

その言葉を手向けに男はナイフを投擲した。

狙いは頭。アーティファクトの効果で速度をあげたナイフはそのまま真っ直ぐ彼女の頭に飛んでいき……

響いたのは金属音だった。

聞こえるはずのない音。しかし、その音は確かに聞こえてきた。

彼女が見たのは見たことのある剣が男の投げたナイフを弾く光景だった。

「なんだ？」

予想外の展開に男は疑問を口にする。

その直後、男の背後から2本の剣が襲いかかる。

男は自身のアーティファクトの効果でそれを避ける。しかし、避ける先を予想していたのか、避けた先には別の剣が男を待ち受けていた。

短剣を使い男は待ち構えていた剣を弾く。と、その剣の影に隠れていた別の剣が男の足元に迫る。男はまだ動ける状態ではない。

咄嗟にアーティファクトの効果を使う。場に触れた剣は場に付加された運動エネルギーに従い指定された方向に弾かれる。

そうして男は周囲に警戒しつつ、そのアーティファクトの使用者を見据える。綾香も同じようにそちらを見ていた。

予想通りそこには見知った姿があった。

「八神君……」

「泉堂。大丈夫か？」

剣二はスタボロの彼女の様子に心配そうな声で尋ねてくる。

「……ん……ちょっと、大丈夫じゃないかも」

苦しそうな状態にも関わらず彼女はそう言って彼に笑みを見せる。

「そうか。悪いがもう少し待っていてくれ。これが終わったら病院に連れて行くから……」

「わかった……」

剣二の言葉に綾香は安心したという表情を浮かべる。

「おいおい、勝手に決めるんじゃないよ」

新たな登場人物に最初、男は驚いたが時間が経つてとむしろ邪魔されたことに腹が立ってきたようだ。自身が怒っていることを隠そうともせず怒りの声を剣二にぶつけてくる。

「その女は俺が殺す。ついでに邪魔したてめえも殺す。これは決定事項だ」

そう言つて男はアーティファクトの効果を使って剣二に接近しようとしてくる。

「剣二!!」

急いで相手のアーティファクトを伝えようと口を開こうとする綾香。しかし……

「わかつている」

それよりも早く剣二が答える。その時には相手の姿が消え、しかし同時に剣も動いていた。

短剣と剣がぶつかり合う。

「ちっ」

男は結び合うことはせず後ろへと飛んで距離を取る。

「あんたは自分の邪魔をされて怒っているようだが……あんた以上に俺も怒っている」

その声から激情に駆られているという様子はない。だが、確かに彼は怒っていた。

「泉堂をこんな目に合わせて……」

何故ここまで怒っているのか彼自身にもわからない。だが、記憶の奥深くからそれは聞こえてくる。

——……をこんな目に合わせたこいつだけは許すわけにはいかない

……

「……覚悟はできてるな？」

静かな、だが迫力ある声で剣二は相手にそう告げる。

そして戦いが始まった……

一章六話憤怒

先に仕掛けたのは剣二だった。

相手が動くより早く相手の真上に配置していた残り3本の剣を男の元へ落としてきたのだ。

真上の剣に気づいた男は急ぎアーティファクトの効果でそこから離れる。

そこへ新たな剣を放つ。狙いは男が避けた先。

姿を現す男の元に剣が迫る。咄嗟に短剣でそれを弾く。だが、それで剣二の攻撃は止まる事はない。

既に避けられた3本のうちの1本を男の元へ飛ばしている。さらにこちらからも2本目の剣を放つ。

その2本が短剣で弾いた直後の男に襲いかかる。

安定しない体勢のまま男は自身のアーティファクトの効果を使い己を無理やり飛ばして剣を避ける。

しかし、相手を逃がさないとばかりに剣二は落とした3本のうちの残り2本の剣で彼を追撃する。

1本を回避してもう1本を短剣で弾く。だがそこへ先程弾いた剣が飛翔してくる。

そうして止まぬ攻撃が続く。

男は避ける、弾く、アーティファクトの効果を用いて剣二の攻撃に対処するが彼の攻撃が止む気配はない。

そうこうしている間に男の体に傷が刻まれる。

それは男のちょっとしたミスで生まれた小さな傷。

だが、小さくても傷は傷。

小さな傷が原因でさらに小さなミスが生まれ新たな小さな傷が作りに出される。

「……クソがつー!!」

攻撃の牢屋から抜け出すことができず男は悪態をつく。

そんな様子を剣二は離れた場所で眺めている。

その表情に怒りも蔑みもない。ただ、無表情で防戦一方の男を見つめていた。

「このガキ……スカしてんじゃねえよ!!」

剣二の表情に腹を立てたのか男は彼に向かって吠える。

「別にスカしているつもりはない……」

男の言葉に剣二はあえて答える。

「それがスカしてるって言ってるんだよ!!」

剣二の挑発にまんまとのせられた相手が大きな声で叫ぶがそこへ剣が襲いかかる。剣二に気を取られていた相手はその剣に対処しきれず新たな傷を作る。

「あんたのアーティファクトの欠点はいくつかある」

そんな様子を見つめながら剣二は話を始める。

「まず、一度効果を使うと次に効果を使うまでほんの僅かだが時間が必要な事。ほんの僅かとはいえ隙は隙だ」

そこへ2本の剣が別方向から男に迫る。アーティファクトの効果を使い男はそこから脱出する。

しかし、先回りしていた別の剣が男が襲いかかる。アーティファクトの効果による移動で足はブレーキに使っており避けることができない。仕方無しに短剣で弾くが今度は挟みこむ形で2本の剣が襲いかかる。

「2つ目は一度の効果で形成できる場が1つである事。2箇所からの攻撃を防ぐことはできないため自身を飛ばして避けるしかない……」

その説明通り、男は自身のアーティファクトの効果で己の身を無理やり飛ばす。だがやはりというべきかそこには別の剣が先回していた。

「クソウ」

悔しそうな表情を浮かべ男はそれを見つめていた。

綾香はその様子を剣二の後ろを見ていた。

「……すごい」

戦況は終始剣二が圧倒している。

最初から相手のアーティファクトの効果を知っていたことやアーティファクト同士の相性などもあるがそれでもここまで一方的に押している事に彼女は驚きを禁じえなかった。

剣二の表情を伺う。相変わらずの無表情で戦いに集中している。

その様子に先程、本当に怒りの言葉を述べた人物なのか？と彼の言葉を聞いた彼女自身でさえ疑いたくなるほどだ。

しかし、彼は間違いなく自分のために怒ってくれた。

その時の言葉を思い出すと少しだけうれしい気持ちが込み上げてくる。

まだ危機を完全に脱していない状況だというのに彼女はそんな事を考えていた。

そんな時だった。

「なんてな！！」

その叫び声と共に男が反撃に転じた。

反撃の始まりは男がナイフを空いている手に握ったところからだった。

それで迫ってくる剣を弾く。

さらに反対の手で握ったナイフでその直後に襲ってくる2本の剣のうち1本に対処する。残り1本は体を動かして避ける。

後の2本はアーティファクトの効果を使うことを予想してか既に予想した移動先へ動いている。つまり、今この瞬間攻撃は来ない。

そして男はアーティファクトの効果を使い残り3本の剣を動かす前に男は剣二に接近する。

そのまま速度を乗せたナイフの突き放つ。通常の人間では見ることのできない速度で放たれる攻撃に対処する術はない。そのはずだった……

しかし、音が見たのは白刃取りで男のナイフを止めた剣二の姿だった。

あっさり攻撃を止められ男は動揺する。そこへ残していた3本のうち2本が背後から男に迫る。

反射的にナイフを手放しアーティファクトの効果で横へと避ける。外れた剣はそのまま剣二の元へ飛んでいくと剣二の腰の辺りで停止。その剣を剣二は左右の手でそれぞれ掴む。

それを見ていた男の元へ3本目の剣が襲いかかる。これを短剣で弾く男。その男の元へ剣二が駆ける。

接近する剣二に男は驚く。意志操作型の使い手が接近戦を仕掛けるなどさすがに想像していなかったのだろう。若干反応が遅れる。接近した剣二は右の一閃を放つ。

これを避けた男はアーティファクトの効果を使って短剣を振り下ろす。

金属音。その一撃を予想して動かしていた左手の剣が男の短剣の攻撃を防ぐ。

そこへ新たな剣が男に向かって襲いかかる。それを己の足で避けるとさらに新たな剣。

その剣をアーティファクトの効果で弾く。だが攻撃は止まずさらに剣二自身が右の剣を水平に薙ぐ。

この攻撃を短剣で防…こうとするがどういう訳か腕が動かない。何故だ？と反射的に腕の方に視線を向ける。

するとそこにはいつの間近づいたのか別の剣が短剣の動きを妨害するように立ちふさがっていた。

予想外の出来事に男の思考が停止する。ゆえに今剣二の一撃を防ぐ手立てはなく、彼の攻撃は男に大きな傷を与えることになった。「がはっ」

剣二の攻撃を受け男は吐血する。しかし剣二は止まること無く続けざまに左の剣を振り上げる。

アーティファクトの効果で斬り上げの軌道を変更する事で対処し

た男の元へ新たな剣が襲いかかる。

すぐさまバックステップで新たな剣から逃れようとする。しかし、その瞬間、背中から別の剣の一撃を見舞われる。

痛みで動きが止まったところへ先程の剣が男の腕に傷を作る。幸い短剣を持つ腕とは反対の腕だったので攻撃をするのに支障はない。痛みを堪え剣二に加速された横一閃を放つ。しかし、既にそこに彼の姿はなかった。

反射的に左右を見渡すがどちらにも彼の姿はない。

奴はどこに？と思った瞬間、右肩を斬られた。

見上げてみるとそこには剣に乗った剣二の姿があった。

そこへ背後、左右、真上の4箇所から剣が襲いかかる。

最早、逃げるしか無いと判断した男はアーティファクトの効果を使い最大速度で正面、剣二の真下から脱出する。

このまま全力で逃げ出せば剣二といえど追いつけるはずがない。

男がそう確信した時だった。

突如、男の目の前の地面から何かが浮き上がってきた。それは剣二が隠していた8本目の剣だった。だがそれがわかってても男にはどうすることもできない。一度アーティファクトの効果で飛ばされた以上、簡単に止まることができないからだ。そのまま男は剣二の剣に腹を貫かれた。

「ああ、もう1つ言い忘れてた欠点があった。一度アーティファクトの効果に乗ってしまうと途中で止まることができない。今みたいに飛んだ後に目の前に何かが現れてもあんたにはどうする事もできないわけだ」

剣二が静かにそう告げるが男は既に気を失っており彼の話など聞いていなかった……

「あの人どうなったの？」

男から短剣を取り上げてからこちらに近づいてくる剣二に綾香は尋ねる。

「気を失ってるだけだ。助けに入る前に警察と救急車を呼んだからそろそろ到着する頃だが……」

そう言っているとサイレンの音がこちらに近づいてくるのが聞こえてきた。

「来たみたいだな」

「みたいだね」

互いに顔を見合わせ笑みを浮かべる。

少ししてサイレンの音は彼らの近くで止まると複数の足音がこちらに近づいてきた。

「立てるか？」

「……何とか」

そう答えて綾香は立ち上がる。だが、ダメージから回復してないのかフラフラの状態だ。

見かねて剣二が肩を貸す。彼にもたれ掛かるように彼女は己の体重を彼に預けると二人はこちらに近づく足音の主達の元へ向かってと歩き出した。

そして剣二は今病室の前に立っていた。目の前の病室には綾香がベッドで横になっているはずだ。

あれから警察からはいろんな事を聞かれた。

綾香は襲われた理由等の動機面で、剣二は撃退方面で。

剣二の行いは正当防衛扱いとされたが警察からはやり過ぎだと注意された。

今思えば剣二もやり過ぎだったと思う。特に最後のあれは極めつけだ。

別に刺す必要はなかった。峰でも柄でも向けてればそれだけで相手は気を失っていただろう。

しかし、あの時の自分は冷静ではなかった。いや、状況の分析、把握といった部分では確かに冷静だったのだろう。

だが、感情の部分では冷静ではなかった。泉堂にひどい目に合わ

せた相手に対して激しい怒りを感じていた。

ふと、あの時の事を思い出す。

あの時、自分は何か大事なことを思い出していなかったか？

しかし、思い返してみてもあの時何を思い出したのか思い出せない。

それでも必死に思い出そうと記憶をなんども探ってみる。

その光景は傍からみると病室に入ろうかどうか悩む見舞い者に見えるのだろう。看護師や入院患者が奇妙な視線で剣二を見ていた。

「八神君。何してるの？」

その声で剣二はハツとする。見るとそこに入院服を着た綾香が立っていた。

「さっきまで先生と話してたの。それで戻ったら八神君がいたんだけど……」

「……」

自分が周囲にどう見えてたのか。それを考えて途端に剣二は恥ずかしくなった。

「えっと、とにかく入ろうか」

それに剣二は反対しなかった。

彼自身、周囲の視線に晒されない場所に行きたいと丁度思っていた所だった……

「怪我の具合はどうだって？」

「完治まで一ヶ月は掛かるって……」

そう言いながら彼女は自分のベッドに座る。

「学園には通えるのか？」

「様子を見るために三日間は病院で入院だけどそれからは問題ないって。顔の傷とかも深くないからすぐに消えるって」

「そうか」

それを聞いて剣二は安心した表情を浮かべる。

「ありがとだね。助けてくれて。でもどうしてわかったの？」

「ただの偶然だ。何となく寄り道をしたら戦いの音が聞こえてきたんだ」

「そうなんだ」

それっきり二人は黙ってしまい気まずい沈黙が流れてしまう。

何か話さねばと綾香が思っている……

「……ごめん」

と言って、突然、剣二が謝ってきた。予想外の行動に綾香は戸惑ってしまう。

「え？ な、なんで？」

「その……学校でどこもない態度で接してたと思うから……」

「あ……」

それを聞いて彼女は彼との関係を思い出した。

「理由は言えない……だけど時期に慣れてそういう事もなくなると思う……」

我ながら何と下手な言い方だろう。

そう思うがこれ以上のうまい言い方を剣二は思いつけなかった。

綾香は少しの間黙っていたがやがて、顔を上げると彼女は彼にこう言ってきた。

「それじゃあ、今度から綾香って呼んで」

「は？」

何を言ってるのかわからず剣二は疑問の声を上げてしまうが彼女は構わず言葉を続ける。

「その代わり私も剣二って呼ばせてもらうから。それでその件許してあげる」

そう言って彼女は剣二に笑みを見せた。

「……わかった」

溜息と共に剣二はそう答える。

「じゃあ、改めてよろしくね。剣二」

「ああ、よろしく。綾香」

そうして互いに握手を交わす。

病室がドアが開いたのは丁度その時だった。

「綾香！！大丈夫か！！」

ドアが大きな後を立てて空いた瞬間、二人は同時に手を引っ込め声の主を見ていた。

「お父さん！！どうして！？」

彼女にとって父親がここに現れたのが意外だったのか驚いた声を上げている。

「連絡を受けて急いできたんだ。すまない。私のせいで……」

「おおよその事情を聞いてやってきたのだろう。そう言いながら彼、
泉堂刀弥せんどうとうや

は娘に近づく。

「そんな……お父さんが悪いわけじゃないよ」

そんな父親を綾香が慰める。と、そこで刀弥は剣二の存在に気がついたようだ。

「すまない。気がつかなかった。私は泉堂刀弥。綾香の父親だ」

「初めまして。八神剣二と言います。お噂はかねがねお聞きしております」

手を差し出してきた刀弥に剣二もそう答えて手を差し出す。だが、刀弥は彼の名前を聞いた途端、驚いた顔をしてその動きを止めたしまった。

「お父さん？」

「！つとすまない。考え事をしてしまった」

その様子に綾香が不思議に思い父親を呼ぶ。呼ばれたことに気がついたのか、彼は瞬時に元の表情に戻ると笑みを浮かべて剣二に謝ってくる。

「いえ……」

ともかく二人は握手を交わす。

「そうか……君が……」

その独り言は娘には聞こえなかったが剣二の耳には入った。それで彼は刀弥が何に驚いたのか理解した。

「私、彼に助けられたの」

彼がここにいる理由を綾香が説明する。

「そうか。娘を助けてありがとう」

「いえ、そんな……」

感謝の言葉を述べる刀弥に剣二は戸惑う。

と、ふと、その視線が時計に止まった。

「それじゃあ、時間も時間ですので俺はこれで……」

「また明日ね。剣二」

「……それは明日も来いという催促か？」

そんなやり取りをして剣二は病室を後にした。

ドアを閉めると途端に父と娘の会話が始まったようだ。時折笑い声も聞こえてくる。

それを聞きながら剣二は帰るために病院の出口に向かって歩き始めた。

「おっはよ〜」

明るい声を出して綾香が入ってきた。

あの事件から三日が経過した。

事件の翌日には襲撃の事は新聞に載った。その時はまだ襲われた学生と助けた学生が自分達の学校の生徒としか書かれていなかったのだが綾香が欠席したことで襲われたのは彼女だと確定されてしまった。

そしてどういつ訳か助けたのが自分だという事も知られてしまっていた。

そうするとクラスメイト達が事件の事を知ろうと剣二に群がってきては矢継ぎ早に質問をしてくるようになったのだ。

おかげで剣二は自由時間のたびに彼らから逃れる羽目になったのは閑話休題である……

「綾香!!」

「泉堂さん!!」

「退院したの!？」

彼女の声を聞いてクラスメイト達が彼女の元に集まる。

「うん。入院は三日間だけだから……」

「そうなんだ」

「ねえねえ、事件の事聞いてもいい?」

早速誰かが事件の事を聞き始めたようだ。皆興味深々といった表情で皆が彼女を見つめる。

「剣二から何も聞いてないの?」

既に事件ことは大方知られていると思っていたのか綾香は意外と
というような顔で皆に尋ねる。

「八神君。全然口を割ってくれなくてねえ」

そう言って皆恨みがましい視線を剣二に送る。剣二は気がつかない振りをして机に突っ伏している。

「ふん」

綾香もまた彼に視線を向け、ふと何か思いついたのか突然は彼女は
笑みを浮かべる。

「どうしたの?」

それを不思議に思いクラスメイトが尋ねる。

「ん?何でもないよ。それよりも事件の事なんだけど皆には悪いけど
教えられないかな」

「えー!!!!!!」

彼女の宣言に彼らは抗議の叫びを上げる。

「ちよつと!!何でよ!？」

「八神君が駄目そうだから泉堂さんだけが頼りだったのに……」
次々と文句をいう彼らだがふとある事に気がつく。

「あれ?泉堂さん。今、八神君の事名前と呼んでなかった?」

「そういえば……」

「確か最初は八神君って呼んでたはずだけど……」
そうしてクラスメイト達は再び剣二に視線を向ける。

「どうした?」

さすがに今度の視線は無視する気にならなかったのか顔を上げて彼らに尋ねる。

「おはよう。剣二」

しかし、彼らがそれに答えるよりも前に綾香が剣二に挨拶をしてきた。

「おはよう。綾香」

そう返した剣二にクラスメイト達が反応する。

「一体……どうしたんだ？」

彼らの反応に訝しげな視線を送る剣二。

「いやゝ。なんていうかね」

「前進したんだゝって思っ」

「そうだな」

口々にそういう彼らは好奇の視線を剣二と綾香に送る。

さすがにこれには二人とも動揺する。

「まあ、二人ともがんばってゝ」

「応援してるから」

「口惜しいがお前に幸があらんことを……」

「お前ら……」

もはや呆れしか湧いてこず、剣二は思わず溜息をつく。

綾香は苦笑しているが若干その顔は赤い。

「お前ら何をしている？お、泉堂来たのか？とりあえず授業を始める。席につけ！！」

そこへ藤宮先生がやってきて生徒達を席につかせる。

そうして一日が始まった……

二章 一話襲撃者

それは綾香が襲われた事件がかなり経ったある日だった。

それはマンシヨンの郵便受けに入っていた。

手紙。ただし差出人はおるか「千堂剣二様」としか書かれていないその手紙は明らかに他の手紙よりも異様だった。

何よりも現在名乗っている八神剣二ではなく公に隠している本名の方を書いている辺りがその異様さに拍車を掛ける。

周囲を警戒しながら剣二は自分の部屋へと戻る。

部屋に戻るとすぐさま手紙を開けてみる。

内容を読んでみると自分の会いたいという内容の手紙だった。

現在16時。手紙の約束は17時で会う場所はここから1時間ほど掛かる。かなりギリギリの時間だ。

こちらに考える時間を与えない。これが意図的な罠の可能性も十分考えられる。行かないほうが懸命だろう。

しかし、剣二はあえて行くことにした。例えば罠であるならその理由是一年前の事件の関係すると考えたからだ。

念のため総一に手紙の事と会いに行くこと、時間と場所をメールで送っておく。電話で連絡しなかったのは反対されるのが分かりきっていたからだ。時間がない以上無駄に取られる訳にはいかない。

そうして準備を終えると剣二は指定された場所へと急ぐのだった。

指定された場所は公園だった。

行ってみるとそこには人影が立っている。

その人物は全身、黒のフードを被っていた。

そのためフードの下がどういう姿をしているのか知ることができなかった。

「あんたがあの手紙の主か？」

周囲を警戒しつつ剣二は相手に尋ねる。

すると相手はこちらの方に振り返る。しかし紡いだのは先程の質問の答えではなかった。

「ターゲットを確認。これよりターゲットを排除します」

その言葉と同時に走りだすフードの人物。一方の剣二の方も予想してただけあつてすぐさま反応。

手に持っていたアタツシケースを放り投げる。

既にロックは外してある。後は意思を送って動かすだけだ。

そしてアタツシケースから8本の剣が飛び出し、うち6本が相手に向かって飛翔する。

甲高い音、無論相手を貫いた音ではない。

剣がフードの人物の数メートル手前に出現した氷の壁によって阻まれた音だ。

すぐさま別の意思を送り氷の壁を避けて再びフードの人物の元へ向かわせる。しかし、再び氷の壁が剣の進行を妨げる。

——純粹に氷を作る効果補助型のアーティファクトか？

新たな意思を送りながらそう考える。

今のところ相手は氷の壁を使ってこちらの剣の進行を妨害しつつこちらに近づいてきている。

恐らく氷の壁で剣の妨害をしつつ近づいて武器でこちらを屠るつもりなのだろう。

念のため残りの剣を引き寄せ握っておく。

待ち構えているように見せかけてギリギリまで引きつけ一気に近づいて決める。

それが今剣二の考えているシナリオだった。

だが、何故だろうか。自分の感が警告を告げている。

そうしている間にも相手は近づいてくる。そして、相手が間合いに入った瞬間、剣二は動いた。

前に進む。と見せかけて右手に持っていた剣を投じたのだ。

しかしその直後、眼前で巨大な氷が生まれ投じた剣がその中に閉じ込められてしまった。

反射的に距離を取る剣二。もし今、自分が前進していたらあの氷に閉じ込められていたのは自分だっただろう。

その事に戦慄しつつも相手からは目を離さない。

と、肌に微かな寒気を感じる。迷わず飛び込むようにその場から離れるとその途端、先程自分がいた場所に先刻と同じ巨大な氷が生まれていた。

しかし、安心する暇を相手は与えない。再び相手はこちらを捉えるべく氷を次々と生み出していく。

相手の氷に閉じ込められないように動きつつ剣に意思を送る。

横方向からでは氷の壁に阻まれる。故に上方向からの攻撃に切り替える。相手の真上から2本の剣を落とすように放つ。

だが、この手を読まれていたのか相手は剣を見ずに避けてしまう。すぐさま新たな意思を送ってその剣を動かすが1本が間に合わず氷に捕らわれる。

それに動揺することなく次の攻撃を始める。今度は少し斜めの軌道で3方向からタイミングをずらしての攻撃を仕掛ける。

相手はこれを的確に回避しては剣を氷に捉えていく。しかし、それはこちらの想定内。相手が目的の場所へ誘導できたところで相手の足元に潜ませた剣に意思を送る。

潜んでいた剣は送られた意思に従い相手の腿目がけて飛んでいく。剣は相手の腿を貫く。それを確認してすかさず残り1本の剣を止めにと放つ。

別に殺すつもりはない。気を失わせるだけだ。相手は腿を貫かれた痛みで動けないはずだ。この攻撃は当たる。

しかし、そう思われた攻撃はあっさりと避けられ氷に包まれてしまった。

その事に剣二は愕然とする。腿への攻撃は間違いなく貫かれている。にも関わらず相手に痛がっている様子がないのはフードを被っているのもその動きからわかる。

——こいつ……痛みを感じていないのか？

驚きの表情で相手を見つめる剣二。

そこへ相手が接近のために走りです。剣は未だに腿に刺さったまままだ。

ともかく剣を回収するべく腿に刺さった剣を動かそうとするが剣は動く様子がない。

どういう事だ？と相手の方をよく見ると相手の腿を貫いた剣が貫いた部分ごと凍らされていたのだ。

これでは剣を動かすことはできない。そうなると残るのは左手に持っている剣のみ。

さすがに状況が不味いと判断した剣二は残り1本の剣に乗って空からの離脱を試みる。

しかしその直後、剣二の真上に日陰が生まれる。

見上げるとそこには巨大な氷の姿があった。

驚きで一瞬思考が停止する。それが致命的だった。

生み出された巨大な氷は重力に従い落下を開始する。真下にいる剣二を巻き込んで……

巻き込まれた剣二は剣から落ちそのままアスファルトに叩きつけられる。

「ぐっ！？」

背中を打ち付け息と共に声が吐き出される。

そこに相手が追い打ちをかけるべく駆け寄ってくる。

相手が右腕を伸ばすとそこに氷が生えて剣の形を成す。

氷の剣を右腕に装着した相手はこちらへとその腕を振り下ろす。

転がるようにしてその攻撃を避けるがそこへ予期していたかのよう

うに氷の剣の降り注ぐ。

寸前のところで呼び戻した剣でそれらを防ぐがそれでも数が多すぎたため対処には限界があった。

致命傷になりそうな氷こそ防いだが逆に言えばそれ以外の部分には大小様々な傷を作ってしまう。

そこに例の寒気が来る。すぐさま動き氷に捕まる事から逃れると

再び相手がこちらに接近してくる姿が目に入った。

反撃するべく逆に近づいて斬りかかるが相手はその攻撃を避け今度は回し蹴りを放ってきた。

これを身を仰け反らせる事で躲したつもりの剣二だったが直後、その靴裏に氷が生み出されリーチを伸びる。

幸い額を軽く切られるだけで済んだがこのままでは追い詰められるのも時間の問題だ。

——この場から何とか逃れる方法はないか？

逃げるように後ろへと飛びながら周囲に視線を向ける。

しかしこれといった妙案は思い浮かばない。

そこへ相手が近づいてくる。相変わらずフードで相手の顔は見えない。

と、そこで剣二はある事を思いつき、自身も相手に接近する。

先に仕掛けたのは相手の方。右腕の氷の剣を振り下ろす。

恐らく後ろに下がったところで剣のリーチを伸ばされるだけなのでこれを横に避ける。

そして再びに近づいて横の一線をみまう。

相手は氷の剣で防ごうとする。しかし剣二の姿勢は既に振り抜いた後の恰好なのに剣に当たった手応えがない。

相手は疑問に思ったのだろう。一瞬動きが止まる。それがチャンスだった。すかさず剣二は相手のフードへと手を伸ばす。

そしてフードを掴むとそのままフードを下へと引き降ろす。彼の腕に引かれて相手の姿を隠していたフードが逆に相手の視界を奪う。急いでフードを引き上げようとする相手。そこへ最後の剣が相手の右足を貫通し相手の足を地面に縫い付ける。

さすがに相手もこれには慌てたようだ。急いで剣を引き抜こうとするがフードで視界が奪われたままでは剣を巧く掴めない。

最も巧く掴めたとしても剣二のアーティファクトの力で引き抜くのは難しいだろう。

本当ならここで止めを刺しておきたい所だが残念ながら手札は全

て使ってしまったている。

そのまま剣二は逃走を試みる。

こうして剣の操作範囲外まで逃げた頃には、剣二は急いで現場に向かっていた総一達と合流することができた。

「全く何を考えてるんだ？」

夜、剣二の部屋では呆れた声を上げながら総一が剣二を見下ろしていた。

「逃げられたからよかったものの下手したら死んでたかもしれないんだぞー！」

そう言って正座をしている剣二を叱りつけるがこの展開を予想していた剣二としては特に怯えることもなかった。

「すみません」

ただ一言謝罪の言葉を口にする。

「全く……」

ため息混じりに総一はそうこぼす。

「まあまあ、久瀬さんも落ち着きなさいって……」

そこへ第三者が声が響いていく。

二人が声のする方を見てみるとそこには年配の女性の姿があった。

「冴子さん」

おの さいこ

小野冴子。剣二が最後にお世話になった先生だ。実を言えば記憶回復のために剣二に学園を生活をさせる案を提示したのも彼女だ。そのためか病院生活を終えて日常生活に戻る際にもいろいろと手助けしてもらい今も此の様に時たま顔を見せに来る。今回もマンションに戻ってきた一同の前に偶然現したのだった。

剣二としても自分の正体を知っているので気楽に話せる数少ない相手だ。

その冴子が3つのマグカップをお盆に乗せてこちらにやってくる。

ちなみに総一が連れてきた他の人達は外の車で待機中で呼び出せばいつでもすぐに駆けつけられる状態になっている。

「でも、私だって久瀬さんと同じ気持ちだよ。そこんとこ忘れないでよ？」

「はい」

ウイंकをしながらそう告げる彼女に剣二は答える。

「それじゃあ、お叱りの時間は終了。ほら、コーヒーでも飲んで別話をしようじゃないか」

彼女はお盆をテーブルに乗せるとそう言って手を叩く。

それで総一も怒りを収めたらしい。マグカップをとってコーヒーを飲み始めた。

剣二も正座をとりて立ち上がりお盆に乗ったマグカップを手にする。

「それで相手に心当たりは？」

「コーヒーを飲みながら冴子は剣二に尋ねてくる。

剣二はコーヒーを一口飲むと次のように答えた。

「ない。だから1年前の事件に関することだと予想したんですけど……」

「ふむ。なるほど」

総一の方を見る剣二に彼は相づちを打つ。そしてテーブルに置かれた手紙を見つめる。

「これが件の手紙か。少し預からせてもらおう」

「どうぞ」

恐らく犯人の痕跡がないか調べるつもりなのだろう。

そう考えてふと、剣二は気になることを思い出した。

「現場の方はどうでした？」

「穴とかなら見つかったそうだが残念ながら氷はおるかお前さんの剣すら現場にはなかったそうだ」

両手を上げてそういう総一に溜息で答え、再びコーヒを飲む。

「楠先輩に頼んで新しい剣を作ってもらわないといけないな」

「それどころじゃないだろう」

剣二の独り言に深刻な声で総一が口をはさむ。

「どういことですか？」

尋ねてはいるが既にその言葉の意味を理解してしまっているため自然と相手を刺すような視線になってしまふ。

「わかってるだろう。今回の相手は不味い。この間のチンピラとは訳が違う。相手はわからんが向こうはお前さんを殺すために専門の刺客を放ってきたんだ」

この間のチンピラとは綾香を襲った男の事を指しているのだろう。確かに今回の相手はあいつ以上の實力を持っている。

「君は強い部類だろうけどそれはその年齢ではという話だ。強い奴が相手なら君でも厳しいだろう。どの道我々が許さん。君には記憶を回復してもらふ必要がある以上死んでもらうわけにはいかない」

「だから、今回の計画を中断してまた以前と同じような生活を続けるということですか？」

「正確には病院ではなくどこかの住処になると思うがまあ大方そうなるだろうな」

「拒否します」

迷わず拒否の言葉を口にする。

意外な事に総一は剣二の反応を予想していなかったようで驚いた顔でこちらを見ている。

「何も一生とは言わん。向こうの正体さえ掴めれば……」

「そういう問題じゃありません！！」

怒りに似たような感情を言葉に混ぜた言い放つ。

「俺はここを離れる気がないと言ってるんです」

そう口にした途端、急に恥ずかしくなり顔を赤くしてしまふ。

「あそこが気に入ったのか？」

その反応を見て総一は笑みを浮かべて質問をする。気のせいか冴子も同じように笑みを浮かべている気がする。

「まあ、そうだし」

視線合わせないようにしつつそう答える。すると総一は笑い声を上げる。思わずむっとして彼を睨みつけるが彼は止めない。やがて笑い声を収めると彼は次のように言ってきた。

「まあ、どの道すぐに移動という訳にはいかん。当面は護衛という形で落ち着くだろうな。移動するかどうかはその経過しだいだが俺もできるだけお前さん側に回ってやるよ」

「護衛ですか？」

彼の答えよりも護衛の言葉に剣二は食いつく。

護衛を付けるという意味は理解できる。いつ襲ってくるかわからない相手なのだから常に自分を守る存在が必要になるだろう。しかし、正体を隠している自分に表向き護衛を付けるわけにはいかないはずだが……

「まあ、とりあえず学園の警備員にうちの人間を混ぜる。できれば教師や生徒の方にも送り込みたいところだな。無論登下校は目立たないようにさり気無く付かせてもらうぞ」

「しかし、教師はともかく生徒はさすがにどうすることもできないんじゃない……」

心配というか単なる感想を口にした一言だが彼は事もなげに言葉を返す。

「ん？安心しろ。うちにはお前さんと同年代の人間も一応いるから

……」

「え？いるんですか？」

予想外の言葉に剣二は驚く。

「おお、だから心配するな。まあ誰が来るかは向こうの都合もあるがな」

こちらが驚いたのがうれしいのだろう。ニヤけた顔でこちらに告

げる総一は楽しそうな声で告げる。

「とりあえずは警備員の方はすぐ取り掛かる。一応、このマンション内にも見張り用の部屋も確保することになるだろうから何かあったらそっちに逃げこんでくれ」

「わかりました」

そうして帰るために立ち上がる総一。それを見送るために剣二も同じく立ち上がる。

「帰るのかい？」

「そういう冴子さんはまだ居座る気ですかい？」

意外という顔で総一は彼女に尋ねる。

「今日は私が料理を振舞うつもりだったからね」

そう答えて彼女は台所の方を見る。台所には彼女が買ってきた材料がキッチンの上に所狭しと置かれていた。

「なるほど、私も興味ありますが残念ながら今晚中にいろいろやっておかないといけないので……」

残念そうな声でそう言う総一は部屋から出て行った。その後複数の足音が遠ざかるのが聞こえてきた。

二人はそれを見送り足音が聞こえなくなるとどちらともなくふうと息を吐く。

「それで怪我は大丈夫なのか？」

雰囲気を変えるためか冴子がそう聞いてきた。

「幸い浅い傷ばかりなので学校で気づかれることはないと思います」
そう言つて額にできた浅い切り傷をさする。

「別にそういうつもりで聞いたわけじゃないんだけど……」

苦笑ともいえる表情を見せて笑う冴子。

「わかってます」

僅かばかりの笑みを冴子に見せる剣二。

「まあ。さっきの話に関しては専門家に任せて私は大人しくすることにするよ」

「さすがに精神科の冴子さんじゃどうしようもないと思いますが…

…」

そう彼女の役割は剣二の記憶回復。血生臭い話は彼女の領分ではない。彼女が先程の話を聞くことができたのは単に今回の計画に提案者だからだろう。

「そうだな。だからこそ精神的な方面で何かあるなら言ってくれ。手助けしてやる」

「ありがとうございます」

素直にお礼を言う剣二。何というかこういう人なのだ。諦めたように諦めきれずその自分分の領域で取り戻そうとする。切り替えが早いようで実はこたわっている。それが小野冴子なのだ。

「例えば……そう、恋の悩みとか？」

「えっと……冴子さん？」

突然空気が変わるのを剣二は感じた。見ると冴子がゆっくりとこちらに迫ってくる。

思わず体が彼女から遠ざかろうとする。

「な～ん～で～に～げ～る～か～な～？」

そう言っ冴子は剣二を部屋の角に追い込んでいく。

「実際のところ、学園生活はどうなのよ？」

「別に普通ですよ」

すぐさま答えるが向こうの雰囲気を押されて若干焦りがちな声になっってしまう。

「じゃあ、何を焦ってるのかな？」

「そんな風に迫られたら誰だって焦りますー!!」

怒鳴るように言い返すが彼女は怯まない。

「さあ、学校の事。吐いてもらおうか」

この後、剣二が抵抗してしばらくの間、部屋が騒がしくなるのだがそれは閑話休題である……

二章一話襲撃者（後書き）

まずはいません。

ハードディスクが壊れたのかWindowsが動かなくなりました。

幸い小説はGoogleの方なので影響はなかったのですが

新しくOS買ったりハードディスクを買ったり2章の話の筋を書きなおしたりで中々投稿出来ませんでした。

これからは以前と同じペースになるよう頑張ります。

二章二話風紀委員へ

総一が言ったとおりあれから二日後には警備員の数が増えたようだ。

学園内を歩きまわっても所々で警備員の姿が目につくようになった。

総一の話では新たに来た警備員は全員彼の機関の人間という話だが、そもそも以前からいる警備員の顔も知らない剣二にはどれがその人間なのかわからない。

と、一人の警備員と視線が合ってしまった。

とりあえずお辞儀をすると相手の方もお辞儀を返してきた。そうして剣二は自分の教室に戻って行った。

「なあ、警備員の数が増えたみたいだけど気がついてた？」

「そうなの？」

「ああ、やたら目に付くと思ったたら増えてたのか」

教室に戻ってもそんな話が聞こえてくる。

やはり、こういうのはさり気無くという訳にはいかないものらしい。

やはり皆、変化には敏感ということなのだろう。

「警備員が増えてるみたいだけど何かあったのかな？」

席に着くと早速綾香が話しかけてきた。

「さあな」

理由を知っている剣二としては素っ気なくそう答えるしかない。

「それにしても剣二もすっかりなところあるんだね。アーティファクトを無くすなんて……」

「まあな」

なんともいえない表情を彼は浮かべる。

アーティファクトに関しては家に帰る途中で無くしたという事になっている。

通常、アーティファクトの紛失は悪用されるケースもあるため警察に届け出る必要があるがその辺は総一の協力もあるので大丈夫だ。とりあえずは警察には既に届けたという話になっている。

楠先輩には昨日のうちに頼んでいる。正直に理由を話したとはいえ非難されるような視線を向けられたのは無くした自分が悪いのだから仕方ないがそれでも了承してくれたことはありがたかった。

話によると一週間。予想以上に早いことに驚いたが型と細かなデータがあるからだそうだ。

ちなみにその間、剣二の実技の授業はマラソン等の基礎能力を上げる訓練だけになる。

本人としても物足りない気分だが仕方ない。

「楠先輩にはもう頼んでるんだっけ？」

「ああ、一週間ぐらいだそうだ」

何気なく返した答だったがそれを聞いた途端、綾香は目を丸くして驚く。

「え？そんなに早いのか？」

やっぱり予想以上に早いんだな、と考えつつ改めて楠奏の凄さを実感する剣二だった……

そしてその一週間後……

アーティファクトが完成したという連絡が剣二の携帯に届くのだった。

「どう？」

そう言われて剣二は剣を動かしてみる。

時間は放課後、連絡を受けたその日に剣二は受け取りを希望しこの時間となった。

剣は剣二の思ったとおりの軌道で移動し見事な調整をその身で実感することができた。

「問題ありません。こんなに早くありがとうございました」

お礼を言ってお辞儀をする。

それを聞いて話は終わったとばかりに奏はディスプレイに視線を向け何か作業を始めた。

「それとこんなに早くせっかく作ってくれたアーティファクトを失ってしまったすみません」

しかし剣二の話はそこで終わらず今度は謝罪の言葉を口にする。

その言葉に奏は手を止め、剣二の方に視線を戻す。

「一つ確認させて」

「はい、何でしょうか？」

「あれはあなたの役に立った？」

少し首を傾げて尋ねてくる彼女の問いに剣二は少し答えを考えるがやがて次のように答えた。

「はい。あのアーティファクトのおかげで今ここに生きています」

「それなら問題ない」

剣二の答えを聞いて奏は少し満足そうな表情を浮かべると再び視線をディスプレイに戻し何かの作業に没頭していった。

そして剣二はグラウンドに立っていた。

前回の襲撃者の戦い。

逃げることができなければ自分は死んでいただろう。

次に襲撃する時はまず間違い無く相手はこちらを逃がさないように対策をたててくる。

そうなってしまうえば今のままでは前回と同じ結果を迎えてしまう。

——今よりももっと強く……

その思いが体中を駆け巡る。

気がつけば剣二はアーティファクトを操作していた。

最初剣はそれぞれ思い思いに飛んでいたが突然集まってショットガンの弾のように飛ばしたり、剣に剣を弾かせて軌道を急速に変更させたりといろいろな動作を試していく。

そうして剣を足場にした移動の後、剣に乗って空を飛ぶと次の瞬

間には剣から飛び降り左右の腕で2本の剣を掴み着地と同時に前へと踏み込み2本の剣を振り回す。

斬り上げ、突き、振り下ろし、水平斬り。様々な剣戟を繰り出す。動き自体は悪くない。いつも通りだ。

だからこそ、剣二は満足していなかった。

あれから一週間近く経過したにも関わらず向こうからの動きがない。

相手が諦めたのならそれがいいがさすがにそこまで楽観はできない。

正直、翌日すぐ襲ってくるのではないかと考えていたのだがこれはこれで逆に不気味だ。

すぐに襲ってこない理由は何か？

怪我を治している？

あり得る話だ。腿と足に剣が刺さったのだ。完治するにはそれに時間がかかるだろう。

しかしそれ以外の理由もあるのかもしれない。だがそれが何なのかは検討がつかない。

だからこそ得体のしれない不気味さを感じてしまう。

今のままでは自分は不利だ。

相手は強い。それだけでも不利なのにアーティファクトの相性が悪いことが不利な状況に拍車を掛ける。

相手の氷に剣が捕まれば剣に自力で逃れるすべはない。

氷を粉々に破壊出来れば再び動かすこともできるのだが残念ながら氷を斬る事はできても破壊する術を剣二は持っていない。

——何か方法はないのか？

その方法を考えながら剣二は体を動かす。

「綺麗な剣舞だね」

聞きなれない声が聞こえたはそんな時だった。

反射的に声のした方へと構えてしまいが相手の姿を見てその構えを解く。声の主が同じ学校の生徒だったからだ。

剣二の視線の先、そこには男子生徒が立っていた。
外見的に恐らく3年生だろう。

男子生徒はこちらにゆつくりと近づいてくる。

剣二はちらりと彼の左手を見た。

彼の左手には彼のアーティファクトであろう鞘に収まった日本刀が握られていた。

「初めまして八神剣二君。僕は東堂達也^{とうだつ たつや}。よろしく」

そう言って相手は丁寧^{ていねい}に挨拶をしてきた。

「どうして俺の事を？」

「君の事は君が思っている以上に有名だって事だよ。それに泉堂さんからも君の話は聞いてるからね」

「綾香から？」

見知った人間の名前が飛び出して剣二は疑問を覚えるがその疑問は次の彼の言葉で解決する事になった。

「どうやら気がついてないようだね。僕はこの学園の風紀委員長だよ」

それで疑問が氷解した。綾香は風紀委員に所属している

それで彼女から自分の事を聞いたのだろう。

「それで風紀委員長が俺に何かようですか？」

「いや、君の剣舞がきれいだったからね。思わず話しかけたという訳さ」

綺麗な顔立ちの彼はそう言って笑みを見せる。

それは女子だったら喜びそうな綺麗な笑みだ。

「それにしてもおしいね」

と、そんな事を考えていると、呟くように漏らした達也の感想が剣二の耳に届いた。

「おしい？　どういう事ですか？」

それを聞きとがめ剣二は達也に聞き返す。

「うん。八神君って剣を振るときアーティファクトの力と腕力にしか頼ってないでしょ？」

彼の指摘に剣二は自分の動作を思い出す。

確かに彼の言うとおり剣二の近接戦時の剣の振りはアーティファクトの力と腕の力を使っている。

しかし、だから何なのか剣二には理解出来ない。

「ご指摘の通りだとは思いますがそれがどうかしたんですか？」

「うん。剣を振る際にはね。腕だけじゃなく手首や肩、腰とか体全体を同時に使って振るのがベストだよ。その方が速く振れるし威力も出るから」

そう言われ剣二はイメージしてみる。

……なるほど確かに腕だけで振るのと体全体を使って振るのとでは同時に複数の部分を使っている分、後者のほうが早いだろうし体全体の力を使う分威力も出るだろう。

「詳しいんですね」

「実家が剣術の道場だからね」

なるほど、と剣二は納得する。それなら詳しいはずだ。

そう考えた剣二はある事を思いつき駄目もとで達也に尋ねてみることにした。

「あの東堂先輩。よろしければ剣術を教えてくださいませんか」

「え？」

彼にしてみれば突然のお願いだ。

これまで剣二は自己流で剣を使っていたが彼の指摘していた事を全く思いつきもしなかった。

そういう所から考えてみてもこのまま一人で剣を磨いてたところで上達は遅い事が予測される。ならば誰かから教えを受けたほうが一人でやるよりも遥かに早く上達できると予想する事ができる。

見れば達也は何かを考えているのか腕を組んで目を瞑っていたがやがて目を開けてこちらに視線を向ける。

「いいけど、条件があるよ」

「何ですか？」

こちらとしても頼む以上はある程度聞き入れる必要はあるだろう。

とりあえず聞いてみることにする。

「うん。それじゃあ剣術を教える代わりに風紀委員に入ってもらおうかな」

「……風紀委員って今からなれるものでしたか？」

風紀委員の人員は春に集めると綾香の口から聞いた覚えがある。

「基本的に春先に集めるけどそういつた決まりはないよ」

彼の疑問に達也は答えを返す。

「それで、どうする？」

問われ剣二は考える。

風紀委員になる事にデメリットはあるのか？一番のデメリットは風紀委員の活動によって時間を縛られる事だが今の状況なら問題ないだろう。襲撃を逃れるなら多くの人の中にいた方が相手も手を出しづらい。おまけに現在学園内には総一の組織の人間もいる。下手な場所より安全だ。

「わかりました。ですけど大丈夫なんですか？」

彼の心配はいきなり自分が入ったことで問題が生じないかという心配だ。

「それは大丈夫だと思うよ。君の実力は有名だから入ったとしても皆納得してくれると思うけど」

それを聞いて剣二はその有名になった原因を思い返してみる。あの時は目立つことになってやっかいだと思ったものだがこうも意外な形で役に立つとは……

「それじゃあ、ちょっと生徒会に報告に行ってくるよ。剣術は明日からでいい？」

「はい」

「うん。それじゃあ明日。それが終わったら風紀委員について詳しい話をするね」

そう言つと彼は校舎の方へと戻っていった。

「ねえ、剣二」

翌日の昼休み……

弁当を取り出していると隣の綾香から声を掛けられた。

「なんだ？」

弁当を机に置いて剣二は尋ねる。

「剣二が風紀委員に入るって話があるんだけど本当？」

「早いな……」

その話をしたのは昨日の放課後だったはず。幾ら何でも早過ぎる。

「って事は本当なんだ？」

「まあ、な。東堂先輩に剣術を教えてくれと頼んだら交換条件としてな」

驚いた顔をする彼女に剣二は事情を説明する。

「へえ、そうなんだ」

その声がどこからうれしそうなのは気のせいだろうか。

「いつ入るの？」

「放課後、指導が終わったら詳しい説明をするって言ってたからもう少し掛かると思うけど……」

昨日の話を思い出しながら剣二は答える。

「ふん……あ、そうだ」

そう相槌を打ちながら綾香は弁当を食べていたが不意に何か思いついたのか顔を上げる。

「その放課後の練習。見学に行ってもいい？」

「別にいいけど……」

自分の練習の姿を見られるというのは何となく気恥ずかしさを感じるものだったが特に断る理由もない。

「うん。それじゃあ放課後ね」

そうしてこの話はそこで終わった……

二章三話風紀委員長

綾香と話をしたその放課後……

剣二と綾香はグラウンドで待つていた。

剣二は準備運動なのか剣を適当に飛ばしている。

綾香はそんな剣二の様子を眺めていた。

そこへ達也がやってきた。

「すみません。お待たせしました。あれ？泉堂さんどうしたの？」

彼は剣二の傍らに自分の部下がいることに気が付き声をかける。

「こんにちは。東堂先輩。剣二から話を聞いて見学に来ちゃいました」

そう言つて綾香はここにいる理由を説明する。

「なるほど。仲がいいんですね」

二人を交互に見ながら達也は笑みを浮かべた。

「あ、いや、その……」

「すみません。早速ご指導お願いしてよろしいでしょうか？」

彼の言葉に赤くなる綾香を尻目に剣二は変わらぬ表情で達也に尋ねた。

「その前に八神君の剣の腕を知りたいから一度、剣で一勝負しようと思うんだけど。いいかな？」

「それは構いませんが……」

彼の問いに剣二はそう答えると剣の一本を掴みとり、それを両手で持つと達也の方に向けて構える。

「では」

達也の方も自身の右手を腰に刺した刀へと伸ばして構える。

その途端剣二が動いた。狙うは達也の左肩。

力の乗った一撃は、しかし、達也に刀によって別の方向に逸らされてしまう。

僅かに態勢が崩れる。

その隙を逃さず達也が横の一線を放つ。

何とか避けることができたが予想以上に速い一撃はその剣先を剣二の目前まで迫らせる。

そしてその攻撃を避けた直後、達也がさらに新たな攻撃を放ってくる。

今度はその一撃を剣で防ぐ。

実際に受けてみて彼の攻撃が速さだけでなく重さも兼ねている事を実感し、このまま守りに入るのは不味いと判断する。

故に剣二は達也の腹目がけて蹴りを繰り出した。

「おっと」

この攻撃を達也は後ろに下がる事で避ける。

そのまま剣二は相手に接近して剣を振り下ろす。

だが、後から動いたはずの達也の刀がそれより先に剣二に迫ってくる。

攻撃を中断して剣の柄で達也の刀を防ぐことができたのはたまたまだった。

そのまま相手の攻撃の勢いを利用して距離を取る。

しかし、達也はそれにあっさり追いついてしまう。

そして達也は剣二に向けて剣戟を繰り出す。

その猛攻を前に剣二は守りに徹するが結局、持ちこたえられないはずもなく防御が崩れた瞬間に放たれた突きをモロに食らい剣二はそのまま気を失ってしまった。

「ん……」

「あ、気がついた」

傍で綾香の声が聞こえてくる。体の感触から自分の体が今横になっているのがわかる。頭の後ろから柔らかな感触を感じるという事は頭が何かの上に乗っているのだらう。

何故、そうなったのかを思い出そうしながら剣二は目を開けた。すると、目の前に横向きの綾香の顔があった。

「……」

予想外の事態に内心驚きつつも状況把握のために視線を左右に巡らす。

その結果、自分が綾香に膝枕されている事がわかった。
慌てて飛び起きる。

「大丈夫？」

一方、綾香は膝枕をしていた事等気にもせず剣二の容態を気にしていた。

ここに至りようやく剣二は自分が達也との剣の勝負に敗れたことを思い出す。

「東堂先輩は？」

辺りを見回すが彼の姿はない。

「私達の飲み物を買いに行ってる」

剣二が起き上がったため綾香も立ち上がる。

「それで大丈夫なの？」

「ああ、東堂先輩もしっかり手加減してくれてたみたいだからな。
もう痛みはない」

そう言つて突きをもらつた部分をさする。

「気がついたみたいだね」

丁度そこへ達也が缶ジュースを持ってやってきた。

差し出された缶ジュースを受け取った二人は蓋を開けてジュースを飲む。

「それでどうですか？」

一息ついたところで剣二は話を切り出す。

「やっぱり、剣に関しては無駄が多いかな」

サラリと達也は剣二の評価を口にする。

「そうですか」

その評価を事実として剣二は受け入れる。

「動ける？」

「大丈夫です」

体調を尋ねる達也に剣二は立ち上がって答える。

「それじゃあ悪いけど始めようか」

「お願いします」

「まずは前にも言ったけど剣を振るときは腕だけじゃなくて体全体を使う感じ。まずはそれを体で覚えるという事から始めてもらおうよ」

「はい」

「じゃあ、まずお手本を見せるね」

そう言つと達也が剣二の前に出た。

両手で日本刀を握る。

次の瞬間、日本刀は振り抜かれその余波で生まれた小さな風が二人を間を通り抜けた。

何とか剣二は目で追うことができたがそれでもかなり速い振り抜きの速度だった。

「今回だと手首、肘、肩、背中、腰を動かす感じたね」

そう説明をしながら達也はゆっくりと先程の動作を再現して見せる。

「じゃあ、やってみて」

「はい」

彼に促され剣二は前に出ると剣を両手で持ちまずは構えを作る。

そして先程の達也と同じ動作を行った、つもりだったのだが……

「なんていうか……全然違うね」

「……言うな」

綾香の指摘したとおり剣二の動きは達也とは似ても似つかぬ動きだった。

「ほら、何度でもやる」

達也に促され剣二はその後、何度も同じ動作を繰り返した。

一回一回動作をするたびに何がおかしいのかを考え、一つ一つ試し修正していく。

過去、いろいろな事でやってきた事だ。慣れたものだ。

そうして動きを直していくたびに剣二の動作は達也が見せた動作に近づいていく。

そんな変化を間近で目撃する事になった綾香と達也は感嘆の声を漏らす。

「これは……」

「動きが似てきている……」

思わず漏れてきたそんな声。

しかし動作の修正に集中している剣二の耳には届かない。

ひたすら作業に集中する。

腕の力加減、体のバランス、各部の力入れるタイミング、各部の力抜くタイミング、達也と剣二では体が違うため最適な動作は僅かに違う。

その事を頭に入れてもつともベストな部分にもっていく。

結果、達也程ではないが剣二の動作はかなり良くなった。

「いやはやすごいとしか言い様がないよ」

納得出来る動作ができて意識を体から現在に戻した時、傍らの達也からそんな感想が聞こえてきた。

「そうですか？」

いつも通りの作業をしていただけの剣二には何がすごいのかかわからず疑問を返す。

「後はこの動作を体で覚えるだけです」

「それは明日にしよう。もうこんな時間だし……」

言われ周囲を見ると確かに夕日が沈みかけていた。

作業に集中していて気がつかなかったがかなりの時間が経過していたようだ。

「それじゃあ、最後に風紀委員について説明するからそれが終わったら解散しよう」

達也の言葉に剣二は首を縦に振って了承した。

「風紀委員は知っての通り、校則違反の生徒を取り締まる組織。基

本的に学園内外の見回りが主な仕事かな」

「学園外でも見回りをしているんですか？」

意外な説明に剣二は驚く。

「そりやそうだよ。一番危惧すべきは危険なアーティファクトの力が一般市民に向けられることだからね。特に入学したてなんかは自分が強くなったと勘違いして暴走する人がいない訳じゃないから……」

そう苦笑して達也は話を続ける。

「そんな事になったら住民から文句を言われるのは学園だからね。そうでなくてもアーティファクトの力は危険だと主張する人達もいるから……」

「そうですね」

アーティファクトを危険視しそんな物を育成のためとは言え未熟な子供達に使わせるなんて危険だと主張する人達は少なくない。

実際、そういうトラブルは起こっており警察沙汰になることもある。

とはいえそれは予想されていた数値よりも小さい。

そういう意味ではしっかり対策が取られている現状は評価すべきなのだ。

「話が逸れたね。他にも先の外回りの件もあって近くの警察や自治体と連携を取ることもあるね。例えば小学生の通学路の見張りとか」「学園外の治安活動に協力する事もあるということですか」

「そういう事だね。まあ簡単なものばかりだけど」

確認のための剣二の問いに達也は答える。

他にもいろいろな説明があつたがそれらも終わると三人は風紀委員が利用している本部へと移動した。

「それじゃあ、これが届け出んだけど記入してくれないかな」

「わかりました」

そう言って差し出された用紙を受け取ると剣二はスラスラと内容を記入をしていく。

「これでいいですか？」

「うん。大丈夫かな」

達也は剣二が記入した用紙に目を通して問題ないことを確認すると視線を剣二へと戻す。

「後は生徒会にこれを提出して承認されれば晴れて風紀委員だね。進展は練習の時に報告するね」

「わかりました」

「それじゃあ、今日はこれで終わり。お疲れ様」

「ありがとうございます」

「お疲れ様でした。東堂先輩」

そう別れの挨拶をすると剣二と綾香は部屋から出て行った。

「もうすぐ剣二も風紀委員だね。楽しみになってきちゃった」
帰り道、先に口を開いたのは綾香だった。

「喜ぶのはせめて承認をもらってからじゃないのか？」

嬉しそうに言う綾香に剣二はそう指摘をする。

途端に綾香は頬を膨らませて抗議の視線を剣二に向ける。

「剣二ってドライだね」

「自覚はある」

その視線を無視しつつ剣二は言葉を返す。

「そういうば……今、気になったんだけどどうして剣術を教えるもらおうと思ったの？」

「単純に強くなるためだけど？」

何を聞いてるんだ？という様な顔で剣二が綾香を見る。

「まあ、そうなんだろうけど……なんていうか……剣二、焦ってない？」

核心に触れられ一瞬、鼓動が跳ね上がる感覚を感じたが幸い顔には出なかった。

「気のせいだろう」

そのまま何も無いという表情で答える。

「そっか」

確証がないのか綾香もその一言で納得してしまう。

その事に安堵しつつ剣二は彼女の鋭さに驚いた。

達也から生徒会からの承認をもらったと聞かされたのは翌日の放課後だった。

正式な配属は来週の月曜日。そこで他の風紀委員に紹介するとの事だ。

一緒になって聞いていた綾香はさも自分の事のように喜んだ。

剣二はわかりました、とだけ答えた。

そしてその月曜日の放課後……

「という訳で今日付けで風紀委員に入った八神剣二君です」

達也と一緒に風紀委員の本部に入ってきた剣二だが先に入っていた他の風紀委員の驚いた表情を見て自分がここにいる事がどれだけ特殊なことなのか嫌でも自覚させられていた。

ただ一人、綾香だけは嬉しそうな表情でこちらを見ているがあれは例外だと考える。

「この時期に？と考えるかもしれませんが彼の实力は皆さんも御存知だと思しますので反対意見は特にないと考えてます」

剣二がそんな事を考えている間にも達也は話を続けている。

やれやれと思いつつもやるからにはしっかりやらないと考えると剣二は気持ちを切り替える。

「それじゃあ、八神君。自己紹介を」

「はい」

そう答えて剣二は周囲を見渡す。

「八神剣二です。こんな時期での風紀委員入りですがやるからには

精一杯やらせていただきます。よろしくお願いします」

そう言って剣二は頭を下げた。

少しの間、沈黙が部屋を包む。

しかし、その沈黙を破るように誰かが拍手を始め、それを皮切りに次々と拍手が生まれて最後には部屋中に拍手の音が溢れ出した。ちなみに最初の拍手が誰かは音のした方角で剣二は予想がついている。

「それじゃあ、八神君は泉堂さんの隣が空いているからそこに座って」

「わかりました」

頭を上げると達也がそう言っただけで空いている席を指さした。

それに従って剣二は席に向かい座る。

「よろしくね。剣二」

「ああ、よろしく」

顔馴染みの人間だがとりあえず挨拶を交わした。

「それじゃあ、定例会を始めます。まずは見回りのシフトの話ですが八神君の加入で彼の面倒を見てもらう必要があるわけですが……」

「はい、それ私がやります」

元気な声で綾香が名乗りを上げた。

皆が彼女を見る中、何となくこうなるんじゃないかと予想していた剣二は他人事のように別の方向を向いている。

「まあ、同じクラスだし結構仲がいいみたいだからそれが妥当かな」
達也が苦笑しつつそう言った事で剣二の担当は綾香に決まった。

「それじゃあ、次に……」

そうして定例会は滞り無く進んでいった。

「以上です。それでは解散します」

副委員長の号令と共に頭下げると定例会は終了となった。

この後はいつもの練習だ。

綾香はまた来るのだろうか、とそんな事を考えていたせいか剣二はそれに気がつくのに遅れた。

突如として他の風紀委員が剣二を取り囲む。

突然の事に剣二は驚く。

剣二を取り囲む彼らの目は好奇に溢れており、次の瞬間はそれは言葉となつて放たれた。

「よろしくね。私……」

「俺は……」

「ちよつと皆、落ち着き……」

「すごい強いつて噂だ……」

皆が一斉に口を開き口々に何かを言っているようだが剣二は聖徳太子ではないので彼らが何を言っているのかわかるわけがない。

どうしたものかと考えていると手のひらを叩く音が部屋中に響いてきた。

音の主を見るとそれは達也だった。

「ほらほら、それじゃあ八神君だつて困るでしょ。とりあえず今回は自己紹介だけにしておいて」

それで皆納得したようだ。一斉に頷いた後彼らは次々と剣二に自己紹介をしていくのだった。

「ご苦勞様。どうだった？風紀委員に入った感想は？」

「実際に何かをした訳じゃないからまだ特には……」

自己紹介が終わり、グラウンドに出た三人。ちなみに三人目は当然綾香の事だ。

達也の問いに剣二は少し考えるそぶりをみせて答える。

「剣二は歓迎されて何も思わなかったって事？」

「歓迎と風紀委員に入った感想は別だろう……」

綾香の疑問に剣二は己の考えを返す。

「八神君はそういう考え方をするんですか」

「それより今日も以前の反復練習ですか？」

このままでは雑談で余計な時間を食ってしまうと考えた剣二は話を戻すべくそう尋ねる事にした。

「いえ、別の動作を見せますので以前のように覚えてもらいます」
「わかりました」

そうして練習が始まった……

二章四話氷の牢獄

人形は主の声を聞き目を覚ます。

自分は今、液体の満たされたガラス状のケースの中に丸まるように漂っている。

辺りを暗闇で何も見えはしない。

再び目を閉じ体中の状態を確認したところ特に異常はなく、以前の戦闘で負った傷も完全に完治している。

それを確認した直後、再び主の声が人形の耳に入ってきた。

「傷は治ったようだな。では任務の続きだ。今度はしくじるな」

人形の答えは決まっている。

「イエス。マスター」

「そこ！！今ゴミをゴミ箱にいれずに放り捨てたでしょ」

目ざとく放り捨てた瞬間を見ていた綾香が急ぎ足で放り捨てた本人の元へ向かう。

その様子を剣二は目で追いながら歩いて彼女の後を追いかける。

現在、時間は放課後、今日は剣二と綾香が見回りの当番だ。

休憩時間や昼休みも同じように見回っていたので大方の事は教えてもらっている。

剣二が綾香のところに追いついた頃には綾香に叱られていた生徒は綾香に頭を下げて急ぎ足でその場から離れようとしているところだった。

「やっと来た」

去っていく生徒を横目で見つつ綾香がこちらへ振り返る。

「もう、こういう時は早足で動かないと相手に逃げられるわよ」

「まあ、そうなんだろうけど……」

理屈ではわかるがゴミを放り捨てただけの相手にそこまでしよう

とは思えない。

この辺はまだ一般生徒の時だった感覚を引きずってしまっている。直さないとなと剣二は心の中で呟く。

と、綾香から外した視線が何かを捉えた。

迷わず剣二は持つていた剣を投擲する。

次の瞬間剣が何かとぶつかった。

剣とぶつかったそれは床に落ちてこちらへ転がってくる。

それは球体のアーティファクトだった。恐らく剣二と同じ意思操作型のタイプだろう。

「すみません……げ!？」

そこへ恐らく持ち主であろう男子生徒が謝りながらこちらへとやってきた。そしてこちらの正体に気づくと驚いた声を上げやってしまったという表情へと変わっていった……

「全く……狭い廊下でアーティファクトを使うなんて……」

綾香が怒った表情でそう呟く。

「まあ、さすがにあればフォローできないな」

あの後綾香に捕まった男子学生は風紀委員の本部に連行され綾香からの叱りを受け解放された。

表情からは本気で反省していたようなので恐らく次からは本当に気をつけるだろう。

「あ、そうだ。お礼がまだだったね。助けてくれてありがとう」

助けられた礼をしていない事に気がついた綾香が剣二に礼を言う。

「気にするな」

何でもないという表情で剣二は答える。

二人は現在グラウンドにいる。剣二は素振りを綾香はそれを見学している状態だ。

達也は今日はいない。家の都合で早く帰らないといけないという理由でそれを告げに来てそうそう帰っていった。

だから今日は素振りをやっている。

素振りといってもただ縦に振るだけではない。横や斜めや突き等達也から教わったいろいろな振り方で剣を振っている。

「だいぶ、よくなってきたね」

その様子を見て綾香が感想を漏らす。

「最初の頃は確かに酷かったからな」

その時の事を思い出したのか苦笑を浮かべて剣二は答える。

「ところで前から気になってたんだが綾香は練習とか訓練とかそういうのはしないのか？」

ふと、以前から気になっていた事を思い出しせつかくなので聞いてみる事にした。

「私のアーティファクトは人のいるところじゃ、ね……」

「なるほど」

彼女のアーティファクトは砲撃。それもかなり射程がある。人のいる場所では危なくて練習などできないだろう。

「だから、個人練習は家でしてるから別に心配しなくてもいいよ」
こちらを気遣うように彼女はそう言うてくる。

「なら、見学せずに帰って練習したほうがいいんじゃないか？」

相手の事を思っただけで言葉だったけど彼女には別の意味に取ったようだ。

「それって遠まわしに邪魔だからさっさと帰ってって意味？」

笑顔ではあるがどこか怒った感じの綾香がそう尋ねてきた。

「いや、ただ見学したせいで成績が悪くなったりしたらなんていうか悪いと思うし……」

せつかく全学年で第4位の實力を収めているのだ。できればこのまま維持して欲しいと剣二は思う。

「大丈夫。練習は毎日、決めた時間だけしているし、剣二の見学に来てからもペースは落としてないから心配しないで」

剣二の言葉に少しキョトンとした顔をした綾香だったが、やがて柔らかな表情に変わるとそう言うて問題ないことをアピールした。

「そうか。ならいいけど……」

彼女がそう言う以上剣二はもはや何も言えない。
とりあえずこのままでいいかと剣二は内心そう思いながら練習に
没頭するのだった。

素振りをしばらく続けていた剣二だったが少し疲れを取るために
休息する事にした。

綾香は今飲み物を買いに席を外している。

剣二は階段に座って息を整えている最中だった。

そんな時人の気配を感じた。

奇妙だったのはその気配が突然現れた事だ。

自然と気配のする方へ視線を向ける。

そこには……少女がいた。

一瞬、剣二はそれが人なのか疑ってしまった。

どこか冷たそうな手足、動くとは思えない小さな口に綺麗な顔立
ち……

そして生気を感じ無い無機質な瞳……それらによって剣二は少女
に対して人形を連想してしまう。

人形のような少女という事で奏を思い出す剣二だったが目の前の
少女は美しさよりも、その生気の無い気配が人形を連想させる要因
を作っており、それゆえに剣二は警戒した。

「誰だ？」

「主の命によりあなたを殺しに来ました」

剣二の問いに人形は答えを返す。

正直、答えが帰ってくるとは思ってなかったので剣二もこれには
驚いた。

「何故、俺を殺す？」

「……」

今度は答えを返さない。

相手が動く判断した剣二は瞬時に己の選択肢を考える。

以前の戦いから真正面から戦うのは不利なのはわかっている。
故に選択肢は時間を稼いで総一の仲間が来るのを待つか、以前の
ように逃げるかだ。

しかし、相手はそのいずれの選択肢も封じてきた。

気づいた時には遅かった。

「な!？」

突如、剣二と少女の周囲から氷の壁が生まれる。

壁は上へと伸びていきある程度上まで伸びると今度を横へと伸
びて天井を作った。

剣二が動こうとした時にはもはや人が通れるほどの穴もなく、そ
の穴もやがて閉じて消えてしまう。

こうして氷の牢獄は完成した。

「今度は逃がさない……」

相手はこちらへを見据えそう呟く。

先程の力とこの台詞。間違いなく以前襲撃してきた人物だ。

それを確認しつつ、剣二は己の判断の遅さを叱咤した。

これで逃げることはできない。助けが来たとしてもこの氷の壁を
突破するのにどの程度の時間が掛かるだろうか。

こうなると助かる方法の一つ。相手を倒すことだけだ。

剣二は覚悟を決め相手を見据える。

少女は右手に氷の刃を纏わせる。

そして……

両者はほぼ同時に駆け出した。

しかしその直後、剣二は方向転換。その瞬間、氷が剣二が直進す
れば来るであろうポイントに出現した。

剣二の方向転換はこれを読んでの事である。

他の剣は既に意思を飛ばして動かしている。とはいえ適当に動か
しても氷に捕まるだけだ。

迂闊な操作はできない。

故に現在は剣二の周囲に待機させている。

氷を避けた剣二は再び少女の元へ近づいていく。

先に攻撃を仕掛けたのは少女。氷を伸ばして剣二に斬りかかる。これを横に回避した剣二はそこから一気に間合いを詰め反撃する。躲した少女に畳み掛けるように剣が一本少女に向けて飛翔してくる。

少女はその剣に視線を向けて氷に捕らえようとする。

そこへ剣二が蹴りを繰り出す。

剣の方に意識を向けていた少女は氷の剣で防ぐが意識を剣二に戻したせいで氷は発動せず剣はそのまま少女に迫る。

少女は頭を下げて何とかそれを避ける。と今度は別方向から違う剣が少女に向かって飛翔してくる。

今度こそ氷に捕らえようとする少女に剣二は持っていた剣を投じる。

視界の外の攻撃だったがそれを少女は後ろへ倒れるようにして避ける。

後ろへと倒れた少女は背後に両手をつけ後転の要領で回ると足が地に着くと同時に背後へとさらに下がる。

それを追いながら剣二は近くに残っていた剣の一本を手取る。

その直後、相手の攻撃を予感し足を止める。

予感通りに目の前に氷が目の前に出現するが足を止めていた剣二はその範囲から逃れている。

その氷を回りこみ再び少女に迫る。

氷で捕らえる事を諦めたのか、少女は手に氷の苦無のような物を生み出し投擲する。

出来る限り苦無を避けそれでも当たりそうな物は持っている剣や付近の剣で防いだり弾いたりする。

そして間合いに入った瞬間、剣二は振るための構えに入る。

相手は間合いから逃れようとするが既に他の剣が彼女の周囲を囲んでおり逃れられない。

瞬時に相手は回避を諦め防御することを選んだようだ。両手を交差させその部分に氷を纏わせ盾にするつもりのようなのだ。

だが、剣二は構わず全力で攻撃を放つ。

手首、腕、肩、背中、腰……

達也の指導通り、体のあらゆる部分を同時に使い剣を振る。

速度と力ののった剣が氷の盾とぶつかる。

そのまま剣は氷の盾を切り裂き少女の腕に切り傷を作った。

これには少女も驚いたようだ。目を見開きその様を凝視していた。しかし、すぐに我を取り戻すと急いで腕を凍らし傷口を塞ぐ。そして傷を塞いだ氷を伸ばして両手に氷の刃を生み出すとこちらに反撃の斬撃を放つ。

それを剣二は周囲の剣で受け流す。そして受け流し、相手が態勢を崩したところへ一閃をみまう。

再び氷の盾で防御を試みるが剣二の剣はその氷の盾ごと相手を斬り裂く。

「ぐっ」

攻撃が効いたのか相手の口から声が漏れる。

そのまま一気に止めをさすべく剣二はさらに踏み込もうとする。

「……全リミッター解除……全出力完全開放……」

不意に少女の呟くような声が入ってきた。

と、同時に感じる微かな悪寒……

攻撃を中断し後ろへと飛んだのはもはや本能だった。

突如、少女の周囲に氷が生まれ少女を覆う。そのまま氷は少女を中心にその範囲を広げていく。

氷から逃れるために剣二は退避するが気がつけば氷の壁まで下がっていた。

氷は分厚く簡単に壊せない。

そして氷が目前まで迫ってきた。

二章五話氷人形

綾香は飲み物を買に行っていた。

今、素振りの練習は一旦中断し休憩に入っている。

座り込む剣二を見て綾香は飲み物を買に行くと言って校舎の方に戻ってきた。

そして自動販売機で自分と剣二、二人分の飲み物を買った彼女は来た道を戻り始めた。

彼女は思う。

最近の剣二は強くなることに焦っている気がする。

以前それを尋ねたら平然となんともないと返された。

だが、あれは嘘だと綾香の感が告げている。

とはいえ、あれ以上問いただしたところで本当の所は教えてくれないだろう。

「私だって力になりたいのにな……」

自然とそういう愚痴が溢れる。

彼が何故焦っているのかわからない。それは彼の事を余り知らないからだ。

病院に一年近く入院していた事。アーティファクターとしての実力が高いこと。今は風紀委員に所属していること。なんだかんだで優しいところ等。

しかし、彼の芯の部分はまだ触れる事ができていない。

元々、積極的に話す性格ではない上に過去や身内などに関しては口を閉ざす傾向がある。

何か辛い過去があるのだろうとクラス内では密やかに彼の過去に關して尋ねるのを躊躇う風潮ができています。

いつかはそういう話ができればいいな、と綾香が漠然と考えていた時だった。

突然、グラウンドの方で巨大な氷が現れるのが遠目でも見えた。

場所は剣二が休んでいた所の近く。嫌な予感がして急いで走ってきてみると……

そこには氷の檻に閉じ込められている剣二と少女の戦っている姿があった。

何故こんな事になっているのか。綾香は考えようとするが結論など出るはずもない。

そうしているうちに騒ぎに気がついた警備員達が集まってくる。

氷の檻が現れた事。その中に男子生徒が閉じ込められている事。そしてその生徒が見慣れぬ人間に襲われている事。驚くべきことが多すぎて警備員達は混乱する。

そんな中、騒ぎに混ざらず氷の檻を眺めていた警備員の一人がこう呟いた。

「くそ、彼を殺されるわけにはいかないのに……」

その呟きを聞いた綾香がそちらに顔を向けた時にはその警備員はどこかに向かつて走りだしていた。

追いかけようかとも思ったが今は剣二の方が心配だと考え諦める。彼の方を見ると相手の方も強そうだが何とか戦えているようだ。

相手の攻撃を凌ぎ、そして相手に強烈な一撃を与える。

すぐさま相手は反撃してくるがその反撃を受け流しバランスを崩したところへ再び斬撃をみまう。

さらに追い打ちをかけようと剣二は踏み込んでいく。

しかし、その直後、剣二は相手から距離を離れた。

どうしたのか？、と思っていた直後、氷が少女を覆ったかと思うとその範囲を広げ剣二に迫ってくる。

剣二は氷から逃れるために下がるがすぐに氷の壁にたどり着いてしまっただろう。

——助けなきゃ

反射的にその思った綾香は杖を手に取り氷の壁に狙いを定める。狙うのは剣二が逃げる方向にある壁。

狙いを定めるとチャージを始める。どの程度で壊せるかわからない以上できるだけ威力は高めておきたい。

彼女のアーティファクトは元々威力は高いのだがチャージすることとさらにその威力を高めることができる。

ただしチャージには高い集中力が必要なことから無防備になりやすく、一対一の戦いではそうそう使えるものではない。

父なら相手の攻撃に対処しながらチャージをする事もできるが自分にはまだ無理な芸当だ。

既に剣二は氷の壁に到達して氷はその剣二目がけて迫ってくる。

これ以上は待てない。

すぐさま綾香は砲撃を放った。

氷が迫る傍ら剣二は聞き覚えのある音を聞いた。

直後、剣二の近くの氷の壁が砕け氷の破片がこちらに向かって降り注ぐ。

防衛本能に従い剣が氷の欠片から剣二を守る。

見ると氷の壁が壊れ人が通れるだけの穴が空いている。

迷わず剣二はそこに向かって走る。

氷がこちらへと迫ってくる。急いで脱出しなければならない。

――間に合うか？

一瞬、そう考えたがその考えを打ち消し次のように考える。

――間に合うか？じゃない。間に合わせるんだ。

全力で走る剣二。氷は真後ろにまで近づいてきている。

そして剣二は氷の檻から脱出する。

脱出と同時に剣二は剣に飛び乗り上へと逃れる。

氷は氷の檻から飛び出しその範囲をしばらく広げたが、やがてそれも止まり静かになった。

それを確認すると剣二は高度を下げグラウンドに降りる。

「剣二――！」

降りた直後、綾香がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

やはり先程の音は綾香の砲撃だったようだ。

来るな、と彼女に警告を促そうと剣二は口を開きかけたがそれを止めざるえなくなった。

氷が消えていき少女が姿を現したのだ。

「……」

少女は何も言わない。ただこちらを逃がす気がないという事は彼女が発する気配からも伺える。

正直、剣二は彼女がこんな隠し玉を持っている事に驚いていた。まともに戦っているのはこちらが力負けするだろう。

そこへ複数の足音が近づいてきた。

足音は四方に散らばると少女を包囲する。

「八神剣二。君は下がっていたまえ」

警備員の制服を着た男が剣二にそう話しかけてくる。

恐らく総一が警備員に紛れ込ませていた一員だろう。彼らは各々のアーティファクトを構え少女を見据える。

そして一斉に動き出した。

ある者は遠距離から放ち、ある者は少女へと接近するために走ります。だす。

しかしその直後、少女の周囲に氷の壁が張り巡らされ彼らの攻撃を妨げる。

遠距離の攻撃は遮られ、接近を試みたものは近づくことを断念させられる。

そして少女の反撃、彼らを氷で捕らえようとする。

しかし、彼らもさる者。瞬時に反応して氷の束縛から逃れる。

そして遠距離攻撃のできる者は彼女の方に向けて攻撃を放つがそれらはやはり氷の群々に阻まれてしまう。

「やはりあの氷を突破できないとどうすることもできないな」

警備員達の言うとおり下がってそれまでの様子を見ていた剣二だったが現状かなりまずいと判断していた。

警備員達はよくやっているが結局、氷の壁を突破できないために

彼女に有効打を与えることはできていない。一方彼女の方は攻撃こそ巧く避けられてしまっているが氷の壁によって自身の安全は確保できている。

現在は膠着状態だが時期に彼女のほうが有利になってくるだろう。だが、剣二の頭の中にはそれを阻止する方法が思い浮かんでいた。

警備員と少女の戦闘は剣二の予想通り、徐々に少女の方へと流れが傾いてきた。

警備員達も少女の攻撃を避け続けてはいるが疲労で動きが悪くなっている。

このままではいつか少女の氷に捕らわれてしまう。

そんな悲観が頭の中をよぎり始めた時だった。

彼らの戦闘に剣二が加わってきた。

「な！？八神剣二！！君は下がれと言ったはずだ！！」

彼に話しかけていた警備員が彼に向かって怒鳴るが剣二は気にせず疾走する。

抹殺対象が加わった事で自然と彼女の狙いは彼に集中する。

以前よりも遥かに大きい氷を生み出し彼を捕らえようとする。

平面に逃げては逃れられないと判断した剣二は剣に乗って上空へと退避する。

そこへ少女は彼の頭上に巨大な氷を生み出し、彼を押し潰そうとする。

だが、この攻撃は剣二も予想済み。

既に横へ水平移動を始めており巨大な氷から逃れる。

そのまま空中から少女への接近を試みる。それに対して少女は巨大な氷の雨を剣二に向けて降り注がせる。

剣二は剣を操り氷の雨の中を掻い潜る。

避けきれない氷は他の剣をぶつける事で落下の軌道を変えさせ防ぐ。

そうして剣二は少女に近づいていく。

少女は守りに入っただけか周囲を氷の壁で囲みこちらの接近を阻止しようとする。

だが、剣二は構わず剣二はそこへと飛び込んでいく。

——先ほど思いついた方法。いきなりだがやってみるか……

その思考と共に剣二は周囲に待機する剣の内一本を氷の壁へと突撃させた。

甲高い音と共に剣は氷の壁に深く突き刺さる。しかし、深く突き刺さっただけで氷の壁は碎ける様子はない。

しかし、本番はここからだ。少女に接近しながら剣二は突き刺さった剣に意識集中させる。

イメージするのは僅かな動き。それを何千、何万、何億とも繰り返す。それはもはや動きではなく振動だ。

剣は剣二の意思に応えそのイメージを忠実に再現する。剣の振動は氷の壁にも伝わり氷の壁が僅かに震えた。

氷の壁は剣の振動によって僅かずつではあるが削られ剣はゆつくりとはあるが確実に進んでいく。

少女はその事に気がつくがどうする事もできない。このままでは確実に剣は氷の壁を突破してしまうだろう。

仕方なく脱出のために氷の壁を解く。

その隙を剣二は見逃さない。

剣の速度を上げて一気に接近する。

そしてその勢いのまま両手で剣を持ちすれ違いの瞬間、一気に振り抜いた。

嫌な手応えが剣を通じて伝わってくる。

振り返ると脇腹から激しい出血をしている少女の姿があった。自分が持つ剣にも大量の血が付着している。

しかし、それだけの怪我をしているにも関わらず少女は倒れない。苦悶の表情も浮かべずにこちらを見ている。

その事に剣二は戦慄するがここで押される訳にはいかない。すぐに表情を引き締めると再び少女に近づいていく。

それをさせまいと少女も氷を落したり氷の壁を作ったりして剣二の接近を妨害する。

その攻撃を快潜りながら剣二は少女に近づいていく。接近を嫌った少女は再び氷の壁を周囲に張り巡らせる。先程、彼が用いた方法は氷の壁を突破するのに時間がかかっている。少なくとも時間稼ぎにはなるはずだった。

しかし、剣二はそれを確認すると急に足を止め逆に彼女から離れ始める。

彼の行動の変更には少女は怪しむが直後にその疑問は解消された。すさまじい音と共に背後から砲撃が放たれたためだ。振り返ってみると砲撃の主は自分と同じくらいの年頃の少女だった。砲撃の威力はすさまじく氷の壁で防ぎきれものではない。

砲撃から逃れようと氷の壁を解錠しようとして少女は気がついた。周囲は既に剣二の剣で囲まれている。解除すれば剣はたちまち少女に襲いかかるだろう。

少女は回避を諦め防御の方に集中するつもりのようなのだ。砲撃が来る方に氷の壁がいくつも出現して少女を守る盾となる。

しかし、砲撃はその氷の壁を安々と突破していく。

そして砲撃は少女の元に到達した。

綾香は自分の砲撃が少女に直撃したのを見た。

剣二が囷になって注意を引いている間にできるだけチャージしてから砲撃を放つ。

それが戦場に飛び込む前に剣二から言われた事だった。

砲撃の衝撃で舞った砂煙が晴れて倒れた少女の姿を確認すると綾香はほっと胸を撫で下ろし剣二の元へ向かうのだった。

倒れ動かない少女の元へ剣二は近づいていく。聞きたい事があったからだ。

体は動かないまでも意識はあったようで少女の瞳がこちらに向け

られる。

「何故、俺を狙うのか。聞かせてもらう」

「……」

剣二の問いに少女は何も言わない。どうあっても理由を話す気はないようだ。

こちらに近づいてくる複数の足音。恐らく先程の警備員達だろう。恐らく彼女は彼らに連れていかれるはずだ。

「どの道、お前は喋らざるえないぞ？」

「それはありません」

剣二の言葉を否定するように少女はそう言ってきた。

どういう意味だ？、と剣二が問うよりも早くそれは起こった。

突然、少女の体が震えだす。何だ？、と剣二が考える間もなく少女の目から光が消えていき体の震えも止まっていく。そして体が動かなくなつたのと同時に少女の口の端から血が滴り落ち始めた。

その時になつてようやく剣二は毒という言葉が頭に浮かんだ。

周囲、こちらの様子を見ていた警備員達はその様子に急いで何かを言つて動くが何となく間に合わない予感が剣二にはあつた。

「剣二……」

聞き慣れた声に振り返ると綾香がこちらに歩み寄つてくるところだった。

彼女は少女の方に視線を向けて一瞬怯えたような表情になつたがそれでも構わず剣二に近づいてきた。

「剣二。怪我はない？」

綾香は剣二の身を案じて尋ねてくる。

「まあ、なんとか」

幸い怪我はないが正直に言えばかなり疲れた。

彼女を現場から離す意味もあつてどこで休みたいという予想通り彼女もそれに付き添うために付いて来た。

離れ際に剣二は少女の方に視線を向ける。

少女は動かない。だが得体のしれない雰囲気がそこから感じ取れ

た。

それと同時に剣二は怒っていた。命を何とも思わないそのやり方に彼は怒りを禁じ得ない。

そうして二人はその場を後にした……

二章五話氷人形（後書き）

次の章は短編の予定です。

短編墓参り（前書き）

申し訳ございません。

小説の書き方関連のサイトを見て「や」について知りました。

ここかは・・・を…に変えたり、を―に変更しようと思っています。
前の話も徐々に修正していくつもりです。

いきなり変わって驚かれるかもしれませんがご了承くださいませ。

短編墓参り

太陽が空高く大地を暑く照らす。

コンクリートは焼けるような熱を發し行き交う人達も体中から汗をかいている。

剣二も例外ではなく汗を体中から流しながら駅へと向かっていた。その両手にはいつも持っているアーティファクトの入ったアタッシユケースの姿はなく、代わりに花束と質素な鞆がそれぞれの腕に収まっている。

彼は静かに歩く。しかし何か考え事をしているのか彼の意識はここにはない。

「剣二」

彼が意識を戻したのは聞き慣れた声が聞こえてきたからだった。

「綾香……」

見るとそこには白のワンピース姿の少女がいた。

話は先の事件の翌日の戻る……

場所は剣二が暮らしているマンション。そこに剣二と綾香、冴子がいた。

先の事件で何故剣二が狙われたのか問い詰めてくる彼女に剣二がこの日、この場所を指定したのだ。

そうして今、その話を全て終えたところだった。

「……それが本当の剣二なんだ」

それが全てを聞いた綾香の最初の言葉だった。

「そのすまない……」

どんな顔をしていいかわからず剣二は目を伏せる。

その傍では冴子がコーヒーを飲みながら剣二と綾香の二人を交互に見つめている。

「仕方ないよ。事情が事情だもの」

そんな彼を励ますように綾香が声をかけてくる。

「それじゃあ、この事は他の人には黙っておいてくれるんだね」

彼女の反応を見て冴子がそう尋ねてくる。

「はい」

迷わず彼女は冴子にそう返事をした。

「そう。それじゃあこれでとりあえず一安心だね。なんか食べ物をとってくる」

そう言うつと冴子は立ち上がりキッチンの方へと向かっていった。

そんな彼女の様子に剣二と綾香は互いに相手の顔を見合うとほぼ同じように失笑するのだった。

「……なるほど。泉堂さんところのお嬢さんにね」

綾香が帰った後、まるでタイミングを見計らったかのように総一がやってきた。

綾香に全てを話した事を報告すると彼は一瞬顔をしかめたが彼の立場から考えればそれは仕方ないだろう。

こちらとしても何か言われるのも嫌なのですぐさま話題を変えることにする。

「それで今日はどんな用件でしたんですか？」

晩ご飯の準備をしながら剣二は訪ねてきた理由を尋ねる。

それを聞いて総一は思い出したようにその用件を告げてきた。

「そうそう。一年前の現場から君の妹のアーティファクトが見つかったって聞いてね。それを渡しに来たんだ」

その瞬間、剣二の動きが止まった。総一の側からでは顔を見えないが恐らく驚いた顔をしているだろう。

やがて、剣二は晩ご飯の準備を再開するがどこかその動きがぎこちないのは気のせいではないだろう。

「あいつのアーティファクト……見つけたんですか」

平静な声でそう答えるが内心そうでないのは誰の目にも明らかだ

った。

「ああ、これだ」

そう言って彼はポケットからビニール袋に入ったそれを取り出すとテーブルの上に置いた。

晩ご飯の合間にチラッと見ると確かに見覚えのある指輪がビニール袋に入っていた。

「……確かに妹のです」

「そうか」

それっきり二人は黙りこんでしまった。

「そういえば今月はどうするの？」

その沈黙を壊したのはそれまで黙って話を聞いていた冴子だった。「できれば行きたいとは思っているんですけど……」

二人が言っているのは妹の墓参りの話だ。

事件のあった日、つまり妹の命日には時折剣二は墓参りに行っている。

先月は編入で慌ただしかった事もあって行く暇がなかった。そのため今月は行こうと思っていた。ちなみにその日は再来週の日曜日。しかし、襲撃の件もあってどうしようかと迷っているところだった。

「折角だから行ってきたよ。綾香ちゃんと一緒に」

「綾香とですか？」

意外な名前が登場したことに剣二は驚く。

「本当の事、全部話したんだしこの際お墓も見せてきなよ。総一さんだって問題ないよね？」

「できればあまり出歩かないで欲しいのが本音なんだけどね」
冴子にそう言われ総一はあきらめ顔でそう答えた。

そうして綾香を誘ってみたところ彼女は喜んで彼の誘いを了承してくれた。

そうして墓参りの当日、駅で待ち合わせをしたのだった。

「それにしても剣二。随分と驚いてたね」

列車に揺られながら綾香が隣に座る剣二にそう話しかけてきた。

「……」

剣二は口を噤んで黙り込んでいる。余りに服装が似あっていて見惚れてしまっていたのだ。

そう言うのが恥ずかしくて聞こえないふりをしている。

その反応を見て綾香は楽しそうに笑う。

そうして黙りこんだ剣二は暇なこともあつてその視線を窓の外に向けることにした。

今は太陽がもつとも強くなる時間帯だ。

自分達は電車の中にいるためそれほど暑さは感じないが外の人達は大変だろう。

そんな事を考えていると不意に視界に体操服でマラソンをしている集団を発見した。

恐らく学校の部活だろう。皆、一生懸命に走り続けている。

それを見てふと、剣二は前の学園での生活を思い出した。

——確か自分も彩花もあんな風に走っていたな。

前の学園に入った年の事だ。

風紀委員に入った彼女は周りの期待に答えるためにと常に己を磨き続けていた。

戦い方の研究や基礎体力の訓練にアーティファクトの訓練。

その中に基礎体力を上げるためにとマラソンをしていた頃もあった。

剣二もまたそれに付き合っていた。

というより全ての訓練に剣二は付き合っていた。

彩花は別に付き合わなくてもいいのに、と言っていたが剣二としてはどうしてもやらなければならぬ理由があったのだ。

彩花と一緒にいれるだけの強さを手に入れる。

それが剣二が当時密かに抱いていた目標だった。

「今、考えると恥ずかしい目標だな」

ポツリと剣二は呟く。

「え？ 何……」

呟いた彼の言葉に綾香が反応する。

「いや、ちよつと昔のことを思い出してた」

「昔って妹さんと一緒に通っていた前の学園の時の話？」

その問いに剣二は頷く。

「そういえば剣二の妹さんってどんなアーティファクトを使っていたの？ 剣二と同じ意思操作型？」

前の学園と聞いて興味を持ったのだろう。興味津々といった表情で綾香が尋ねてくる。

「あいつのアーティファクトは効果補助型だな。効果は一時的な無機物創造。かなり相性良かったお陰か普通の剣や槍だけじゃなく銃やアーティファクトまで作る事ができてたな」

その言葉に綾香は目を見張る。

「やっぱり、驚くか」

「だって、それすごいことだよな？」

「まあな。他の人が使ったところでアーティファクトを創造することなんてできなかったみたいだしな。どういう訳か俺の場合は自分が使ってたアーティファクトだけは創造できたけど」

やはり兄妹だったからか？、と当時と同じ感想を思い浮かべる。

「あいつの戦い方は相手に合わせて適切なアーティファクトを創造、それを使って戦うタイプだったな。あいつ他のアーティファクトともそれなりに相性が良かったみたいだから」

思い出すように語る剣二に対して綾香は感心したようなため息を漏らす。

「ねえ、他には何かないの？」

「そうだな……」

そうして二人は目的地に着くまで昔話を堪能するのだった。

「お待ちしておりました」

その場所へ入ると総一はそこで待っていた男にそう挨拶された。場所は安置室みたいなところで台の上には白いシーツを被った何かがそこにはあった。

「それで？」

「まずはこれをご覧ください」

そう言つてその男はシーツをめくる。そこにあったのはこの間、剣二を襲つた襲撃者の遺体だった。

彼女の遺体はその後、総一達のところの機関が引き取つた。遺体から何か手掛かりが得られないか？、と考えたからだ。

そう考えたつた理由の一つが彼女の持ち物にアーティファクトがなかったためだ。そうしてその様子は当たつたようだ。

少女の遺体には何度か縫い直された後があつた。手術の後があつたため今ここにいる男がそこを切り開いて確認し、その後縫い直したためだ。そして遺体の横には何か小さな物が置かれていた。それは青の球体で球体のあちこちから配線のような物が伸びている。総一はそれに触つてみると回してみたり顔を近づけてみたりしてよく見ようとすると

「予想通り、今触つておられますそのアーティファクトの装置が彼女の中に埋め込まれていました」

男の報告を聞いた途端、総一は顔をしかめてすぐさまその球体から顔を離す。

「酷い事をするね」

「そうですね」

そう言いつつ総一は遺体の方へと視線を向け、相槌を打つた男もそれに同じようにそちらを見る。

しかし、これで相手の方の検討はついた。しかし……

「何で剣二君を殺そうとするんだ？」

その動機がわからず総一は首をひねるばかりだった。

「所詮、試験開発か……」

何処ともしれない場所で男は呟く。

そこへ新たな人物が姿を表す。

「マスターいかがしますか？」

それは少女だった。

もつとも男にとって少女は人形という位置づけでしかない……

男の位置づけ通りその人形も以前の人形と同じく生氣のない気配をまとっていた。

「無論、継続だ。バグの要因は消しておくに限る」

「イエス、マスター」

そう言つて人形は姿を消す。

「それにしても生きているとはな……」

人形がいなくなった後男はそう独り言をこぼした。

正直、生きてるとは思っていなかった。偶然、政府のデータベースにハッキングして知った時は驚いたものだ。

まず間違いなく1年前のあの日に死んだと思っていた。あの怪我で助かるはずがないのだから……

そこで男は考える。

——あるいはあれが無意識に……

そうして男は背後へと振り返る。

そこにはガラス状のケースがあった。

中には培養液が満たされており、その中には先ほどとは別の新たな人形の姿があった。

それは少女だった。少女が体を丸め培養液の中を漂っている。

よく見るとその少女はどこか千堂剣二に似ていた……

千堂剣二は墓の前に立っていた。

目の前の墓標には”千堂彩花”という文字が刻まれている。

「あれから、1年か……病院に居たときは長いと感じてたのにここに來てからは時間を短く感じてしまうな」

そう言いつつ剣二は墓の掃除をしていく。

敷地内からゴミを拾い、水を含んだスポンジで墓石を拭いていく。そうして後で水を掛け香炉に線香を焚てると花束を置き、眼を閉じて両手を合わせる。

お参りしながら思うのはいつもいた半身がいなくなってしまった悲しみだ。

いつも当たり前になっていたものがいなくなったのだから悲しむのは当然だろう。

しかし、それと同時に思うのはその半身のいなくなった生活が始まって、その生活を楽しむ自分がいるという驚きだ。

悲しみが無いわけではない、でもやはり心から笑っている自分もいる。

両者は相容れないものだと思っていたがそれは違うようだ。それを痛感させた。

「だから、彩花心配しないでくれ……」

そう一言だけ墓標に告げる。

そんな様子の彼の姿を綾香はを後ろから眺めていた。

三章 一話過去への怒り

蝉の声が窓の外からひっきりなしに聞こえる。

既に太陽は真上まで登っており、灼熱の太陽が大地を燃やすように照らしていた。

そんな中剣二は自分のベッドの中で未だ寝ていた。

本来なら学校があってもおかしくない時間だが今は夏休み、学校がないので寝ていられる。

しかし、さすがにこの暑さと蝉の鳴き声に眠気も消え失せてしまつたらしい。

のそりと起き上がると、腹を満足させるために適当な昼食を作ることにしたのだった。

夏休みに入って剣二は家にいることが多くなった。

理由としては襲撃を警戒して過度な外出を控えているためだ。

多少暇な時もあるが時間をつぶす心得はあるので特に問題ない。

昼食を作っている途中でチャイムの音が聞こえてきた。

キリのいいところで料理を中断しインターホンに出る剣二。

相手は綾香だった。とりあえず自動ドアのロックを外す。

「こんにちはって剣二、今までずっと寝てたの？」

開口一番綾香はそう挨拶すると同時に剣二の姿を見てそう言うてきた。

「いいだろう。別に夏休みなんだし……」

彼女の反応に彼は素っ気なく返す。

最近、綾香がよく家に来ることが多くなった。出かけない理由を話した後から増えだしたのでこちらを気遣っているつもりだろう。

襲撃がなくてもそこまで変わらないと思うのだが、と剣二は思いつつもその気遣いに彼は感謝していた。

もっともここにおいても基本的にやることもない。そのため暗黙の

うちに二人は課題を片付ける事になった。

アーティファクトを扱う学園といえど通常の学校が行う授業はあり、当然夏休みにもなればそれぞれの教科から大量の課題が渡される。

一人の時でも剣二は課題をこなしているが、二人だと答え合わせや質問などできるので二人のほうが捗る。

それに特に話すことはなくても話相手がいる事自体が楽しいと思う時もある。

こうして静かだがそれでいて楽しい時間が始まるのだった。

「……ここもハズレか」

部屋の中を見回して総一はそう口を開く。

部屋にはベッドや冷蔵庫等があるが部屋中に埃が溜まっており人が生活しているという感じではない。

ここに彼はいない。それが一目でわかる惨状だった。

「一応、手掛かりがないか調べておいてくれ」

彼が一言そう告げるとそれまで部屋の外に居た白衣の男達が部屋の中へと入り何やら調べ始めた。

ここしばらく総一はある人物を探していた。

恐らく彼が襲撃をしかけた人間だろう。だが、動機がわからない。資料にも目を通してみたが彼は必要なら殺すが無意味に殺すような人間ではない。必ず何か理由があるはずだ。

その後、部屋を調べていた白衣の男が総一に報告をしてくるが結果は予想通り何も出てこなかった。

「一体どこに隠れてるんだか……」

ため息混じりに彼は愚痴をこぼす。

彼が隠れていそうな場所をしらみ潰しに搜索しているがどこにも彼の姿はない。

残る心当たりも数が少ない。一番有力だと思われていた隠し研究

所はこれまでの調査からもはや存在していないのは明らかだ……

新しい隠し研究所を建てている可能性もあるが、現状それらしい報告は受けてない。

そこまで考えて総一はある事を思い出した。

「そういえば彼と剣二君の共通点といえばそれがあつたな……」

彼が言う共通点。それは彼の隠し研究所が剣二の生活していた一年前のあの事件の一带にあつたという事だった。

——ひょっとしたらあの二人には何か繋がりがあつたのではないか？

剣二が覚えてないのは偶発的な出来事でそれが記憶喪失の中に埋もれているしまっているからだ。

「ものは試しかね」

そう呟くと総一は後始末を作業していた白衣の男達に任せてその場を後にするのだった。

剣二と綾香はまだ夏休みの課題をやっていた。

「そういえばさ、剣二」

課題をする手を止めず綾香が剣二に尋ねてくる。

「なんだ？」

「あれから、進展はあつたの？」

何の、とは言わないがその部分が何かは剣二にはわかった。

「総一さんが調べているみたいだけど、何も聞かされていない」

「聞かないの？」

剣二を狙つたのなら当事者である剣二には何か聞かされている思つたのだろう意外な返事に綾香は驚く。

「必要なら向こうから言ってくるだろう。言わないという事は必要ないということだ。こつちも過去と今の生活ができるならそれ以外に関わるつもりはないしな」

平然と剣二は言葉が続ける。実際、襲撃という面倒事に陥っているが自分が関わらずに総一の方だけで解決するなら深入りするつも

りはない。ただ、そちらの方で自分の過去がわかったのなら是が非にでも聞かせてもらうが……

「なんていうか剣二って優先順位っていうかそういうのがはっきりしてるんだね」

「そうした方が交渉もしやすいだろうって。冴子さんからの受け売りだ」

そう言った時の楽しそうな彼女の笑みを思い出しながら剣二は答える。

「そういえば剣二って今まで病院を移ってたんだっけ？ どんな生活だったの？」

冴子さんの事を聞いて剣二が入院生活の事を思い出したのだろう。「どんなって……まあ、病院周辺の散歩ぐらいなら許可されてたけど基本は今の状況に近いな」

つまりできるだけだけ室内にいろという事だ。

「話し相手とかはいないの？」

「基本的に担当医と後は総一さんぐらいだな。まあ、総一さんの場合、暇潰しに本とかいろいろ持ってきてくれたりするけど。ちなみに柊先輩にアーティファクトを頼んだのも彼を経由してだ」

「そうなの？ どうやって知り合っただろう？」

彼女は過去に一度だけ総一と会っている。恐らくその時の事を思い出しているのだろう。確かにどういう接点で二人が知り合ったのか想像できる組み合わせではある。

「妹のアーティファクトが直った時にでも聞いてみるか」

「あれ、直してもらってるの？」

「ああ、あのままってのも嫌だったからな。柊先輩、かなり張り切ってたから大丈夫だろう」

その時の様子を思い出したのか剣二が笑みを漏らす。

「そんなに張り切ってたの？」

その表情をイメージできないのだろう。半信半疑の様子で綾香が尋ねてくる。

「ああ、アーティファクトの効果を説明したらすごい興味津々な顔で見てたし……」

「あの人がね。そういえば冴子さんとは最後の病院で知り合ったんだっけ？」

綾香はそう相槌を打つと新たな話を振る。

「ああ、俺の担当医だった。あの学園に行くことになったのもあの人の発案だな」

課題が終わったのだろう。出していた課題をしまい新しい課題をテーブルの上に置く。

「で、こつちに暮らすことになってからはいろいろと世話にはなってるな」

周囲を見渡しつつ剣二はそう告げる。彼が見たのは縫いぐるみ等の冴子が購入した品々だ。

剣二の視線につられて、綾香も彼女が買った品々を眺める。

「ああいうのも冴子さんが？」

「ああ。さすがに俺の趣味じゃない」

そう言っただけで彼は自分の意思で買ったわけではないという事をはっきりアピールする。

丁度そこへチャイムが新たな来客を告げた。

剣二は立ち上がり来客を確認する。

やってきたのは総一だった。

ロックを外すと彼はまっすぐ部屋までやってきた。

「おや、泉堂さん。いらっしやっただんですか」

部屋の中に入ると綾香に気づき総一は声をかける。

「はい。夏休みの課題を……」

テーブルの課題に視線を少し向け綾香が応える。

「なるほど。学生は大変ですね」

納得したという顔で頷くと今度は真剣な顔で剣二の方へと向き直った。

「ちょっと聞きたい事があるんだけど。今いいかな？」

問われ綾香の方を見ると彼女は構わないとばかりに首を縦に振ってくれた。

「どうぞ」

そう言っ て手近なところから座布団を引っ張ってくると総一の前に出した。

「どうも」

その座布団の上に総一は座る。

「それで早速なんだけど片山喜久雄かたやま きくおという人物に心当たりあるかな？」

それを聞いた瞬間、剣二は頭の中で妙な感覚を感じた。

具体的には説明しにくいが例えるなら壊れて引き出せない引き出しを無理やり引っ張っているような、そんな感じた。

僅かに反応が出たのだろう。こちらを見ていた総一が目を細め、言葉を続ける。

「私達は剣二君を襲撃した黒幕だと思っているんですけど……」

「どうしてそう思うんですか？」

質問したのは話を聞いていた綾香だった。

「この間の襲撃者。彼女の遺体を調べてわかったことがあるんですけど、それに関係していることを彼は研究していたもので」

そう言いつつ総一は懷から何かを取り出す。

それは写真だった。写真には白衣を着た男が写っていた。眼鏡をかけどこか不気味な雰囲気をもっている。

取り出した写真を総一はテーブルの上に置く。

「この人物だけど…… どうかかな？」

だが、剣二は既に総一の言葉を聞いていなかった。

写真を見た瞬間、剣二は自分の奥から怒りが湧き上がるのを感じた。次に湧きでてくるのは見たことのないイメージ。

…… 檻の中…… どこかの研究室と思わしき景色…… 見知らぬ少女…… 光を失った瞳の妹…… そして最後に来たのはイメージではなく心臓を貫くような痛みだった。

怒りと痛みで体が満たされるような感覚に剣二は苦しみだす。

「剣二君!？」

「剣二!？」

様子がおかしいことに気がついた総一と綾香が慌てて立ち上がり剣二に駆け寄るが苦しむ剣二はそれに気がつかない。

苦しみのあまりのた打ち回る。

終いには頭も割れるように痛み出してくる。

それらから逃れようと剣二はあがくが怒りも痛みも引く気配を見せない。むしろ、頭の痛みと怒りは時間の経過と共に増大していく。

……この苦しみから逃れたい。

そんな思いが頭の片隅によぎる。

そうして剣二の意識が暗闇に包まれた。

三章一話過去への怒り（後書き）

三章です。

恐らくですが三章が終わって次の章かその次で物語が終わる予定です。

大まかな流れは既にできているので後は詳細に文章にしていきたいと思います。

こんな物語ですが読んでくれた方には感謝しています。

では最後まで全力で書いていきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

三章二話禁忌の研究

目が覚めるとはそこは病院だった。

白い清潔な部屋が夕日を反射して少し眩しい。思わず目を細める。そこへ病室のドアが開いた。

やってきたのは綾香だった。

「よかった、気がついたんだ」

病室に入った綾香は剣二が起きたことに気がつくとしどしど安心した表情を浮かべ剣二が寝るベッドに近づく。

「俺は……」

何故自分が病院のベッドにいるのか？　それがわからず首を傾げる剣二だったが徐々に直前の状況を思い出したのだらう。状況を理解したという表情に変わる。

「そうか。気を失ったのか」

「うん。いきなり様子がおかしくなってびっくりしちゃった」

確認するように呟く剣二に綾香が肯定の言葉を返す。

「一体どうしたの？」

心配するように尋ねてくる彼女に何か答えようと口を開きかけたとき再び病室のドアが開く。

「お、気がついたか」

新たな入室者は総一だった。彼はドアを閉めると二人のもとにやってくる。

「早速で悪いんだけど……君が気を失う前にしていた話の続きいいかな？」

「そんなようやく起きたばかりなのに……」

剣二の身を案じる綾香は彼を叱責しようとするが以外にもそれを止めたのは剣二本人だった。

「お願いします」

そう言つて剣二は総一に視線を向ける。その真剣な眼差しに総一

は笑みを浮かべる。

「かなり真剣だな。それで聞きたいんだけど何か記憶は戻ったかな？」

総一の確認に、しかし剣二は首を横に振る。

「残念ながら何も……あの写真を見たときには何故か怒りを感じたんですけど何故そう感じたのかさえ……」

その返答に総一は考え込むと次にこのような事を言い出した。

「なら、もう一度あの写真を見るかい？」

その言語に綾香は驚きのあまりに声をあげそうになる。あれだけの事があつたのにその原因をもう一度見せようというのだ。彼女にはその考えが理解できなかった。

だが、剣二の考えは違ったようだ。

「お願いします」

むしろ、自分もそれを望んでいたようで頭をさげて頼み込む。

「剣二!？」

不安と心配が入り交じった顔で綾香は彼の方を振り返る。

「俺は知りたいんだ。俺とあの写真の男がどういう関係だったのか。失われた過去に何があつたのか……」

そう言われてしまえば自分には何も言う資格がない。綾香は何も言わず黙りこむ。

「それじゃあ……」

そう言つて総一は写真を懐から取り出すとゆっくりと剣二の方へとひっくり返してきた。

それを真剣な表情で剣二が見つめる。だが、1分経とうが5分経とうがあの時に頭に感じたあの怒りが湧いてくる様子はどこにもなかった。

「どうやら駄目なようだね」

しばらく待つてみたが結局反応はなく、総一がそい言いながら写真を懐に戻す。

「みたいすね」

残念そうな声で剣二が答える。

「さすがに二度目も同じようにはいかないか」

「ところでその男の人は何の研究をしてたんですか？」

剣二の気分を変える意味もあつたのだろう話をなるべく綾香が総一にそう聞いてきた。

「彼はアーティファクトと人の融合によるアーティファクトの性能向上についての研究をしていたのさ」

何でもないという風に総一はそう言ったが綾香はその言葉の意味を理解するのに少し時間が掛かったようだ。いや、むしろ信じたくないという思いがあつたのだろう。しばらくした後恐る恐るそれを確認のために口を開き尋ねる。

「え……それって……」

「そういう事。人の中にアーティファクトを埋め込む等の人体実験を行っていたのさ。酷いもんだよ。人間をモルモットみたいに扱ってるんだから」

「その人間はどうやって手に入れたんですか？」

今度は剣二は質問する。

「基本的には金で買ってるみたいだな。時たま優秀そうな素体は自分で手に入れているようだ……」

「誘拐ですか……」

「……そういう事だ」

無表情で総一はそう答えるが本人も内心はいい気分ではないのだろう。声が少し沈んでいるように聞こえる。

一方、綾香は先の言葉を聞いて絶句している。

「当然、そういう事がばれて逮捕する流れになったんだけど、それに気がついた本人は雲隠れ。今もどこかで隠れ住みながら研究を継続しているみたいだな」

肩をすくめながら総一は答え、さらに言葉を続ける。

「この間の襲撃者。遺体を調べてみたら体内からアーティファクトの装置が発見された。彼を疑っているのはそういう理由からだ」

「なるほど……」

それを聞いて頷く剣二。

「もう一つ、彼の隠し研究室の一つが一年前の事件のあった一帯にあった可能性がある。だから、もしかしてと思ってね……」

「俺のところに確認しに来たということですか」

総一の言葉を引き継ぎ剣二が答える。

「そういう事。先程の反応だとうやら何かあるみたいだな」

「でしょうね……」

しかし、記憶が戻ったというわけではないので具体的に何があったのかはわからない。それでも失った記憶に彼が何らかの関わりを持っている可能性は高くなった。ならば、彼を見つける事が出来ればそれを知ることできるはずだ。

「さて、そろそろ私はおいとましますが綾香さんはどうしますか？」

そう言っただけで総一は綾香に尋ねる。外の夕日は既に半分近くまで沈んでいる。夏なので綾香もそろそろ帰らないと不味いだろう

「もう時間ですし私も帰ろうと思います。それじゃあ、剣二。また明日」

綾香がそう言っただけで剣二に別れの挨拶をすると二人は病室を後にした。

「ああ、また明日」

剣二は二人を見送る。やがて、ドアが閉じると窓の方へと視線を向け剣二は外の風景を眺める事にした。

「あれから体に変化あった？」

剣二を診察する冴子がそう尋ねる。

翌日の朝、冴子が検診をすると言って病室に入ってきた。

大丈夫だ、と言ったところで続けるに決まっているので剣二は特に何も言わず検診を受け入れる

「いえ、特には……」

特に不調になった記憶のない剣二はそれを正直に報告する。

「そう。なら大丈夫だな」

診察結果を書きこみながら冴子はそう独り言をこぼす。

「それで俺はいつになったら退院できるんですか？」

昨日、聞きそびれたがそれが今、剣二の気になっていることだ。

「今回ので特に異常がないなら明日には退院できると思う」

聞かれた冴子は顔を上げて答える。

「そうですか」

それを聞いて剣二は少し安心する。正直、病院は居心地が悪い。

出来る事なら早く家に帰りたいたいと思っていたのだ。

「でも、本当に大丈夫なの？」

「え？」

突然、冴子がもう一度尋ねてきて剣二は思わず声を漏らしてしまう。尋ねた冴子は剣二の瞳を睨みつけるように見つめ剣二は視線を外すことが出来ない。

「あんたってそういうの自分の内側に抱え込む質だから嘘ついてるんじゃないのか疑ってるの」

「もしそうなら俺の答えは決まっていると思いますけど？」

嘘だとしても本当だとしても自分は大丈夫と答えることになる。

なら、彼女がこちらに聞く意味はない。

「……まあね」

溜息と共に冴子は剣二の言葉に同意する。

「まあ、本当に大丈夫そうだし恐らく明日には退院できるでしょ……」

「とりあえずわかりました」

そう言つと冴子は立ち上がり病室後にし病室は再び剣二一人を残して静かになった。

そして翌日……

剣二は病院の入口の前にいた。

無事退院の許可が降りたのだ。

「とりあえず退院おめでとう」

見送りに来た冴子がやる気のない声でそう言ってきた。

「ありがとうございます」

決まり文句を返す剣二。

「まあ、お決まり言葉だけど何かあったらすぐに知らせなさいよ」

そう言つと彼女は病院の中へと戻っていった。

それを見送つた後剣二は病院に背を向け自分の家に戻るべく歩き始めるのだった……

路地裏に大量の血が飛び散つた。血の主は体に穴を空け倒れておりもはや動く気配をみせない……

それを確認した人形は本来の目標がいるであろう場所へと視線を向ける。

既に他の護衛達も血の池に伏しており邪魔するものはいない。これedyouやく本来の任務に始める事ができる……

「千堂剣二……今度こそは始末させてもらいます」

呟くようにそう独り言をこぼした人形は己の任務を全うすべく動き出した……

三章三話風槍の人形

それはいきなりやってきた。

気づいたのは何となく視線をそちらの方に向けたからだ。

大気の揺れがこちらに近づくのが見えた。体が反射的に動く。

次の瞬間、先程まで剣二がいた場所を何かが貫いた。

その時になってようやく剣二は攻撃されたことを認識する。

攻撃が飛んだ方向に視線を向けると銀色の短い髪をした少女がこちらに向かった歩いて来るのが見えた。

敵だ。すぐさまそう思う。だが、現状は剣二にかなり不利だった。アーティファクトを持っていないからだ。

相手の方も何も持っていないが恐らく総一が言っていた通りなら体内にアーティファクトが埋め込まれているはずだ。

アーティファクトを持たない自分が彼女に勝つ可能性は殆ど無い。どうにかしてこの場を振り切る必要がある。

しかし、以前の襲撃者との戦いからそれがかなり難しいのは理解している。それでも剣二は諦めず相手の一挙一動に注意をはらう。

先程の攻撃から恐らく風を使うアーティファクトなのだろう。僅かな大気の変化も見逃せない。

対する相手はこちらへと近づいてくるだけでまだ何かを仕掛けてくる気配はない。

ともかくとりあえず逃げるために動いてみるか、と判断した剣二は相手から見て左の方向へと駆ける事にした。

その瞬間相手が動く。

複数の大気の揺らぎが生まれそれが剣二の進行方向に向かって飛翔していく。

形状は恐らく槍。大きさから考えても当たればまず刺し貫かれるだろう。

そう考えながら剣二は槍の群々をステップや伏せを使って回避し

ていく。

しかし、数が多い。いくつかの風の槍が剣二の服を破っていく。とはいえ、致命的な一撃は何とか対処できているので剣二はそのまま走り続ける。

最初の攻撃から二人の周囲には一般人が遠巻きに囲むように流れていたが相手が再び攻撃を開始したときには皆叫び声をあげて辺りに散っていく。

その中を剣二は走る。

細道には入らない。角々を次々に曲がればいいが曲がれなければ相手の風の槍から避ける術がないからだ。

ゆえにできるだけ広い道に行く。

当然、その先にも何の関係のない人達がいるのだが剣二に彼らを気遣う余裕はない。せいぜい警告の言葉を発するだけで精一杯だ。

「どいてくれ!!」

その叫び声に彼らは何事かと視線を向け自分達を巻き込まんとする危険が迫ってきていることに気がつくとすぐさまそれから逃れようと我先にと逃げ始める。

その彼らを見ながら剣二は駆け抜ける。

相手は周囲に人がいることなど気にせず風の槍を次々に放っていく。それを避ける中で何人かの人間が風の槍で怪我をする。

それを齒噛みしながら彼らの横を通りすぎていく。

やがて、大きな十字路に出ると剣二はそこを右折する。

そのすぐ後ろを風の槍が通り過ぎ、走行中の車の後部を貫通する。幸い運転手は無事だったようだ。だがそれを合図にここでも混乱が始まる。

「その少女!! 止まりなさい」

そこへアーティファクトを持った警官達がやってくる。

恐らく誰かが通報しこの騒ぎを聞きつけやってきたのだろう。

やってきた警官達は少女をとり囲みゆっくりと距離を詰めていく。

この間にも剣二は少女から離れるために逃げている。

少女はそれを追いかけようとするがそれを警官達が阻む。

「止まれ。投降するんだ」

しかし、少女は警官の言葉を聞いていない。

彼女にとって今傍によってくるのは自分の任務を阻む障害だ。障害は排除しなければならない。

ゆえに少女はそのための行動を開始した。

剣二は背後に振り返るが自分を追いかける少女の姿はない。

先程、警官達に阻まれていたのは見えたがあれで大人しくなるような相手だとは思えない。

ならば、自分のアーティファクトを取りに行くという方針はこのまま続行だ。

そうして剣二は自分の家に向かうために走り続ける。

正直、中々なきつい鍛えているおかげかまだ大丈夫だ。

追いかけてくる相手がいないせいかな少し剣二は余裕が出てくる。

故に今のうちに考えるべきことを考えてみることにする。

相手のアーティファクトは風を槍状にして放つ効果のようだ。その貫通力は高く、まともに受ければ一撃で死んでしまう可能性が高い。

つまり、あの攻撃は避けるかしつかり防ぐ必要がある。しかも相手はかなり数は放てる。常に注意をはらわなければならないだろう。逆に攻撃を通す場合に気をつけねばならないのがその数だ。

こちらが攻撃を仕掛ければ相手はそれを迎撃するためにいくつもの風の槍を攻撃にぶつけて相殺してくるだろう。

一本や二本程度ならどうにかなるがさすがにあの数で迎撃されたらいつかは落とされる。下手すれば自分のアーティファクト事態が壊されてしまうかもしれない。

一番いいのは相手に気づかれることなく攻撃を仕掛けることだが当然簡単な事ではない。

——どうするか？

ふと、そんな事を考えていると自分を襲ってくる相手の姿を思い浮かべる。

あの時は攻撃されたことに驚いてそれどころではなかったが今思い返すと彼女の姿をどこかで見たような気がする。

しかし、どこで見たのかを思い出せない。

——まあ、いいか。

仮にどこかであったとしてもそれで戦いの状況が変わるとは思えない。今考えるべきはどうやって襲撃者を倒すかだ。

その方法を模索しながら剣二は走るのだった。

自分のマンションに辿り着くと剣二は迷わずアーティファクトの入ったアタッシュケースを開けて自分の周囲に己のアーティファクトを展開させる。

八つの剣は剣二を守る盾のように周囲をとり囲む。

とりあえずこれで戦う力は整った。後は逃げながら相手を倒す方法を考えるだけだ。

そう思いながら外へ出ようとドアの方へと向き直した時だ。

突然ドアにいくつももの穴が開き、風の槍群がこちらへと迫ってくる。

身を低くしながら剣でそれらを防ぐ。

見るとドアの向こうには先程の少女の姿があった。その姿を見て

剣二は驚く。

彼女の体には血がべったりと付着していたからだ。

恐らくあの時取り囲んでいた警官達の血だろう。

しかし剣二は感想的な感情をすぐに消し去ると迷わず反対側の窓へと走る。

少女は逃さないとばかりに再び風の槍を放ってくるが剣二はそれを避け、防ぎながらベランダから飛び降りる。

頭上を風の槍が通過するのを見ながら一本の剣に意思を送りその上に乗る。

剣二を追う少女はベランドまで走り寄ると剣に乗って空を飛ぶ彼に向けて風の槍を放つが彼はそれを避けて彼女との距離を離していく。

このままでは逃げ切られると判断した少女はなんと、ベランドから飛び降りると屋根から屋根へと飛び移って剣二を追いかける。相手の動きから怪我をしている様子はない。

「前の奴もそうだったけどあいつら生身も異常だよな……」
相手の様子を見ながら剣二は呟く。

幸い両者の距離が縮まる事はないが開かれる距離も僅かだしかな
い。

それも相手の攻撃によってあつという間に取り戻されてしまう距離だ。

そのため剣二も反撃を開始する。

四本を守りに残し、後の三本で攻撃に入る。

剣はそれぞれ別の方向から少女に向かって飛翔していくが少女は風の槍でそれらを迎撃して弾いてしまう。

それならばとタイミングをずらしたり重ねて放つたりなど工夫も凝らしてみるがそれらの小細工も安々と防がれてしまう。

その間も相手は隙を見つけてはこちらへ攻撃を放っておりそのたびに守りに残した剣がそれらを防御してくれている。

やはり、中途半端な小細工では相手に通じない。

その事を剣二は闘いながら実感する。

そんな剣二は視界の中にあるものを見つける。

それを見た瞬間剣二は思考を巡らせ次の瞬間、その場所へ剣を走らせる。

襲撃者に勝つために……

三章四話終わりと完成

剣二が辿り着いた場所……そこは公園だった。
ブランコがあり、滑り台があり、滑り台の先に砂場がある。
他にもドーム状の遊具などが見える。

公園の周囲は入り口以外のところを緑の茂みが公園を囲んでいる。
幸い人気はなく、風でブランコが寂しそうに揺れているだけだった。

着地と同時に背後へ振り返ると、丁度追っ手が公園の中に入るところだった。

相手はこちらを発見すると同時に風の槍を放ってくる。
それに対処しながら剣二も反撃を開始する。

まずは二本の剣が相手に向かって飛翔する。

だが、相手は風の槍を使って弾く。

しかも弾いただけでは終わらず、弾いた剣に向かって風の槍のラッシュを放ってくる。

反射的に剣の意思を送るが、一本は逃れきれず槍の雨を受け粉々に砕け散る。

残り一本を呼び戻しつつ剣二は考える。

下手な攻撃は逆にこちらの選択肢を狭めれる事になる。

ならば、やはり当初の予定通りに戦うだけだ。

そう考えながら剣二は遊具の陰に身を隠す。

そこへ相手は障害物などまるで存在しないかのように風の槍を放つ。

剣二を隠している遊具は風の槍を何度も受けみるみる削れていく。
そして剣二の体一つ分しか隠せなくなった時、相手の背後の茂みから剣が一本飛び出してくる。

物陰に隠れた際剣を二本 相手に隠すように背後へと飛ばし茂み等に隠しつつ回りこませたのだ。

予想外の方向からの攻撃に相手も若干驚くが相手もさる者。すぐに元の表情に戻り迎撃しようとしちうへと身を向ける。

そのほぼ直後、反対側の茂みからもう一本の剣が姿を現す。反射的に振り返る敵。

その間にも最初の剣が相手に迫る。

何とか相手はその剣を避けて風の槍で弾くと、迫るもう一本の剣に向けて風の槍群を構える。

だが、その瞬間、相手が二本目の剣に気を取られている隙に放った三本目の剣が相手のすぐ後ろまで迫っていた。

相手の頬に一筋の赤い線が生まれる。

二本目に気を取られていたせいで、三本目に対応しきれなかったのだ。

怒りの表情を浮かべた相手は剣二に向けて風の槍を放つ。

砂場の方へ逃げつつ、先程の三本で剣二は反撃する。

だが、その程度の反撃は読まれていたようで、剣の方を見ずに放った風の槍に弾かれ届かない。

さらに剣二を逃さないとはかりに風の槍を大量に放つ。それを何とか剣で弾く。

丁度、砂場にいたためいくつかの風の槍が砂場に着弾し砂が舞う。相手の攻撃が止んだところでもう一度、三本の剣に意思を送り背後、上、右側から攻撃を繰り出す。と、同時に剣二自身も剣を持って相手に接近していく。

相手は飛翔してくる剣を次々と避け、接近してくる剣二に向けて風の槍を撃つ。

剣二はそれを剣で逸らしそのまま間合いにまで接近、縦と横の斬撃をしかける。

相手はそれを避けて至近距離から風の槍を放ってくる。

それを伏せて避け、その直後、背中に隠していた一本の剣を相手に晒し相手にめがけて放つ。

相手は避けようとするが間に合わず剣が肩に刺さる。

そのまま剣二は残りの三本と共に相手の元に飛び込む。

それに対して相手がつた迎撃は風の槍の全方位展開だった。思わず足を止める剣二。

そして風の槍が一斉に射出される。

「くっ」

剣は弾かれ剣二自身もいくつかの攻撃を防ぎつつも怪我を負ってしまう。

さらにそこへ相手の追撃が飛んでくる。

右へ回りこむよう避けながら剣を一本相手の頭上から落とす。

だが、相手はそれをスルリを避けてしまう。

しかし、それは剣二も予想済み。剣に意思を送り相手が避けた方向に一閃をみまう。

衣服が僅かに切れる。だが、相手には届かなかったようで相手は風の槍の一斉攻撃でその剣を破壊する。

——これで残り六本か。

そのことが頭の中に過ぎりつつ、剣二は相手の肩に刺さっている剣に意思を送る。

肩に掛かった剣が相手の体深くへ潜り込んでいく。

相手は僅かに表情をしかめるが、それでも剣二が予想していたほど怯む様子はない。

それどころか相手は風の槍を使って肩に刺さった剣を破壊し、動かないようにすると残った破片を肩から抜き出しその場に捨てた。下手したら自分の体に当たるかもしれない距離だというのにだ。自身のコントロールに相当の自信がなければできない芸当だろう。

そのことに内心感心しつつも剣二は新たな行動に出る。

二本を自分の近くに呼び戻しつつ、相手に突撃をかけたのだ。

当然、相手はそれを迎撃しようと風の槍を大量に展開、射出してくる。

それらの攻撃を防ぎ、弾き、時に逸らしながら剣二は進む。

そしてある程度近づいたところで、剣二は近くに寄せた二本の剣

を相手に向けて放つ。

相手は剣の迎撃を優先したようだ。二本の剣に向かって風の槍を集中させる。

剣二も剣を操作し迎撃を避けていくが、一本が風の槍の群れに捕まり、破壊される。

残り一本は相手の元に辿り着いたが、相手はそれを避け砂場に着地すると避けた剣に向かって風の槍群を放ち破壊する。

そうしてそれが終わると今度こそ剣二を狙うべく、攻撃を再開する。

それをかいくぐりつつ剣二は左手に持っていた剣を投擲。真っ直ぐ目標である相手に向かって飛んでいく。

相手がそれを破壊している間に、剣二は相手へ急接近。両手で持った剣を振り下ろす。

相手はそれを破壊することで攻撃を止めるつもりようだ。

多数の風の槍を同時に展開し放ってくる。

激しい音。

それと共に刀身が宙を舞う。

剣二が持っていた剣が刀身から折れたのだ。

既に彼の周囲には剣の姿はない。

相手は剣二を逃がさないよう、風の槍を大量に出現させる。それは今までの戦闘で出していた数よりも遥かに多い。

もし、これだけの数が一度に放たれれば剣二に避ける術はない。

これで終わりだ、と相手がそう思った時だった。

足元の砂場から突然、何かが飛び出す。

それは剣二の八本目の剣だった。剣二はずっと八本目の剣を砂場に隠し、そのことを気付かれないよう相手の意識を自分のほうに向けてたのだ。

完全に予想外の攻撃に相手は目を見開くがどうすることもできない。

そのまま剣は相手の胸を貫いた。

相手が崩れ落ちるのを見て剣二は大きく息を吐く。

どうにか狙い通りに上手くいったことに剣二は安堵する。砂場に隠した剣がバレないか内心ヒヤヒヤしていたのだ。

——あんな攻撃をかくぐって確実に決めるなら完全に相手の不意を突く必要があつたからな……

しかし、そのために相手の心臓を狙う必要が出てきた。とはいえ相手は自分の命を狙ってくる相手だ。

こちらが助かるためには贅沢は言えない。

改めて自分が危険な場所にいることを剣二は自覚する。

時期に誰かがこの様相に気がつくだろう。

——誰かに見つかる前にここから逃げつつ総一に連絡をとらないと

……

そんな風に考える。

剣二は完全に終わったと気を抜いていた。

故に背後で風の槍が形成されているのに最後まで気がつかなかった。

剣二が気がついたのは風の槍が自身の腹を貫いた時だった。

凄まじい痛みにも腹に視線を向け、そこから溢れる赤い液体に気がつく。

すぐさま振り返ると、僅かに意識が残っていたのかこちらを見る敵の姿が見えた。

だが、その直後に相手は倒れる。恐らく最後の力を振り絞って放ったのだろう。

狙いは恐らく心臓。だが、弱っていたためか狙いが外れ風の槍は腹の部分を貫いたのだろう。

頭の中でそう冷静に分析しているが、既に腹から血がお触れ体にも力が入らない。

連絡しようとポケットから携帯電話を出すけどのタイミングなのか、携帯の液晶にはひびが入っており動く様子はない。

やがて、手もしびれ始め剣二は持っていた携帯を落としてしまう。
膝をつき前のめりに倒れていく。

ふと、その時、剣二はこんな感覚を以前どこかで感じたのを思い出す。

そして、それがどこだったのか思い出しながら剣二は暗闇の中へ落ちていくのだった。

その様子を眺めている者がいた。

「ふん、やられるとは情けない」

男は非情にもそう告げる。人形に対してねぎらいの言葉もない。

「だが、バグの要因は取り除けた。これで心置きなく彼女を使うことができる」

そう言つて男はガラス状のケースへと視線を向ける。

「見せてもらおう。君の力を……」

男の顔は喜びに満ちていた。

四章一話その日の日常

「邪魔だ!! どけ!!」

病院の廊下を医者と看護師達が患者を連れて大急ぎで走る。

患者は腹部を貫かれ、出血中。かなり危険な状態だ。

急いで手術をしなければならない。患者を運ぶ彼らは皆そう思い急いでいる。

そんな中、患者である剣二は朦朧とする意識の中で一年前のあの日の出来事を思い出していた……

「……さん？ 兄さん？」

自分と呼ぶ声に剣二は我に返る。

声のした方へと振り返ると、そこには彼によく似た少女の姿があった。

多少、違いはあるものの剣二が髪を伸ばせば、大半の人達は一瞬悩んでしまうほどに二人はよく似ている。

おそろいのジャージを着ているのでそのイメージはさらに助長される。

二人は今、朝の訓練でマラソンをしている。距離としては大体目標の半分を走りきったところだ。

「なんだ？」

妹、千堂彩花に呼ばれ千堂剣二は尋ねる。

「『なんだ？』じゃないわよ。突然、ぼうつとしたすからどうしたのかと思って声をかけたんじゃない」

「悪い悪い」

怒り出す妹を宥めようと剣二は謝罪の言葉を口にする。

「もしかして疲れた？」

「まさか」

肩をすくめて答える剣二。

「この訓練も結構やつてるんだ。この程度で疲れはしない」

「そうだけど……」

そう同意はするが不安そうなその表情は彼の言葉を信用していない証だ。

「彩花。信用しろ。本当に無理なときは無理はしないって」

「つまり、それまでは無理をするってことじゃない」

「そ、それは……」

その返しに剣二は言葉をつまらせてしまう。

その様子を見て彩花は笑い始める。

「もう……わかった。信用してあげる」

「それじゃあ、訓練を続けよう」

「うん」

そうして二人はマラソンの続きを行うために再び走り始めた。

「終了」

「早く着替えて、登校の準備を整えないとな」

目標を一周し自宅の前に到着した二人、家に入り各々の準備を行う。

両親は事故で既に他界している。二人の保護者は近所に住む両親の知り合いだ。

寂しいと思う時もあるが家族がいるのでその寂しさはそれほど感じることはない。

着替えやシャワーを終えると二人は朝食の準備を始める。

ご飯は基本的に妹が作る。今日は白ご飯と味噌汁と焼き魚だ。

既に二人は制服姿で朝食を終え、片付ければいつでも出発できる状態だ。

エプロンを脱いだ彩花が席に着くと二人とも両手を合わせ、いただきますの挨拶をすると二人とも朝食を食べ始める。

朝食が終わると剣二が朝食の後片付けを始め、食器を洗い始める。

食器を洗い終わると登校にちょうどいい時間になる。

家を出て鍵をかけると、二人は学校へと向かう。

通学路に出ると自分と同じ制服の生徒たちがそこかしこにいた。時間帯的に言えば一番生徒たちの多い時間帯だ。

「おはよう」

「おはようございます」

「二人ともおはよう」

皆、こちらの姿を認めると次々に挨拶をかけてくる。

「おはよう」

「おはようございます」

剣二や彩花もそんな彼らに挨拶を返すのだった。

「相変わらず兄妹、仲良いよね」

そんな二人の様子を見てある女子生徒がからかってくる。

「ほつとけ」

それに対し剣二はそう言って返す。

そんなやり取りを周囲にいた友人たちは笑みを浮かべながら眺めていた。

そうして学園に辿り着く。

二人の教室は同じなのでほとんど二人は一緒にいることになる。

教室に入ると通学時と同じようにクラスの皆に二人は挨拶を交わしていく。

二人とも授業は真面目に取り組むタイプなので特に何事も無く授業の時間は過ぎていった。

そして六時間目、本日最後の授業は実技の授業。

皆、各々のアーティファクトを持ち並んでいる。

「それじゃあ、今日は模擬戦をやってもらう。五分以内に相手と組むんだ」

「はい」

男性教師の指示のもと、皆が声を揃えて答える。

「千堂妹、お前はいつも通りでいいぞ」

「はい」

続けて告げた男性教師の指示に彩花が一人返事をする。

「よし、始める」

それを合図に皆が相手を求めて動き始めた。

剣二は隣に並んでいた友人と組むこととなった。

ふと、彩花の方を見ると彼女の方には複数の人が集まっている。

男子が二人、女子が二人の計四人だ。

これは彼女の実力が高いせいだ。

そのため、彼女の場合、いつも複数を相手にするという形をとっている。それが男性教師の言ういつも通りの意味だ。

「大体、決まったみたいだな。なら、まずは千堂妹たちから始めてもらおうか」

「「はい」」

そう言って彩花と対戦相手たちが前に出る。

そして各自が構えを取り準備を整ったことを確認すると男性教師は試合開始の掛け声を叫んだ。

「それでは……始め!!」

その掛け声と共に彩花の対戦相手たちが動き出す。

彩花の見る先、対戦相手たちが彩花をとり囲むように散らばっていく。

恐らく全方位から一斉に攻撃をしかけるつもりなのだろう。

相手四人。アーティファクトは皆、効果攻撃型。その可能性は十分に高い。

それぞれの効果は火球群を放つ、マナの弾丸による射撃、鎌鼬、雷の矢を放つなどと多彩だ。

故に彩花も囲まれる前に動く。

――まずは……

その思考と共に彼女は自身のアーティファクトを使い無機物創造を開始する。

作ったのは意思操作型の小剣八本のアーティファクト。

創造完了と同時にマナを送り込み、小剣を操作する。

小剣はそれぞれ二本一組の形でそれぞれの相手へ向かって飛翔していく。

相手が小剣に対処する僅かな時間に次の創造を行う。

多くの人は彩花が使うアーティファクトを強力だと言う。

だが、彩花からすればこれがなかなか大変だ。

まず、創造中は常に効果を使っているためマナを供給しつづける必要がある。

つまり、今の戦い方をするためには複数のアーティファクトを同時に使用する必要があるのだ。

これはかなり難しい技術の上にマナの消費はその分、多くなるというおまけ付き。

代わりに得られるメリットは高い汎用性だが、いろんなことができるということは逆に言えば集中して伸ばすことができないということだ。

故にただ同じアーティファクトで戦えば、練度の低さと負担の重さ故に自分が負けてしまう。

勝つためには、自分や相手の特徴を掴み、自分が有利に相手が不利になるように状況を持つていく必要がある。

それで互角、勝つためにはさらに相手の僅かな隙を晒し、そこを突く必要がある。

そのためには的確な戦術を素早く構築する能力が必要になる。

彩花が新たに創造したのは氷の短剣。その効果は氷を生み出すこと。

創造完了と同時に効果を使用。相手と相手の間に氷の壁を生み出し、それぞれを孤立させる。

それと同時に、彩花は走り出し、火球群の使い手である女子生徒

と交戦する。

接近に気がついた相手は彩花を迎撃しようと彼女に向けて火球群を放つ。

だが、彩花はその攻撃を生成した氷の壁で防ぎ、そのまま接近する。

距離をとろうとする相手に対し小剣が妨害しつつ、氷の壁で逃げ道を塞ぐ。

相手がそのことに気がついたがもう遅い。そのまま接近して小剣と短剣による三連撃を見舞う。

相手が倒れたのを確認すると、隣の氷の壁を解除、マナの弾丸による射撃の効果をもつ男子生徒と対峙する。

その時、相手の背後にあった壁に穴が開いた。その穴から雷の矢が飛翔してくる。

反射的に身を屈め回避する。それと同時に女生徒が穴から姿を現す。

小剣の意思を飛ばし、それぞれにまわりつかせていた小剣を呼び戻す。

今、自分の周囲にあるのは六本。

それを今度は三本ずつ、二人に向けて放つ。

相手たちは雷の矢とマナの弾丸でそれらを弾こうとする。

その間に彩花は新たな創造を開始する。

生み出したのは意思操作型の鎖群。

生み出した鎖を相手の元へ飛ばす。

鎖に気づいた相手たちはそれから逃げようと背後へと飛びつつ迎撃する。

だが、彩花も再び氷の壁を用いて退路を断つ。

鎖が男子生徒に迫る。男子生徒は銃を撃って迎撃しようとするが数が多すぎて迎撃しきれない。結局、鎖に絡め取られ男子生徒は動きを封じられてしまった。

一方、女子生徒の方は雷の矢を大量に展開し氷の壁に一点集中さ

せて一斉に放つ。

氷の壁はその攻撃に抗いきれず人が通れるだけの穴を開けてしまう。先程の穴もこうやって作ったのだらう。

そのまま彼女はその穴から逃走を謀ろうとする。

だが、穴に入ったタイミングを狙って小剣が一斉に彼女に襲い掛かる。

そのことに相手は気づくが、穴は狭く避けることはできない。小剣の猛攻を相手はまともに受けてしまう。

残り一人になったのを確認すると、彩花は小剣と短剣の創造維持を解除。

最後の一人と対峙する。

とはいえ、彩花は今までの戦闘でかなりのマナを消耗した。かなり厳しい状況だ。

かといって負けるつもりはない。

その思いと共に彩花は駆ける。

接近に気づいた相手はすぐさま鎌鼬を放ってくる。

それをどうにか回避しつつ、彩花は創造。

生み出したのは銃、効果は銃弾の着弾時に爆発。

その銃を右手で構え狙い撃つ。

銃弾と鎌鼬があちこちでぶつかり、そこらじゅうで爆発が巻き起こる。

両者は互いに動き回りながら相手に向けて攻撃を放つ。

だが、彩花の狙いは別にあつた。

突然、相手の背後に何かが迫る。

それは相手に巻き付き縛る。それは先程男子生徒を絡めとっていた鎖群だった。

彩花は短剣と小剣の創造状態は解除したが鎖群までは解除していない。故に銃撃戦を囿に相手を鎖のところまで誘導したのだ。

「そこまでだ」

相手が動けなくなつたのを確認し男性教師は戦闘の終了を宣言す

る。

その途端、彼女の戦いを眺めていた生徒達は感嘆の声を皆漏らした。

四章二話その日の非日常

「相変わらず、すごい戦いだな」

放課後、帰る準備をしつつ剣二は彩花に先程の戦いの感想を述べる。

「眺めている分には面白いかもしれないけど戦っている本人は結構大変なんだよ？」

苦笑した顔で彩花がそう返す。

「今日は風紀委員の会議だっけ？」

彩花は入学と同時に風紀委員にスカウトされ、風紀委員に所属している。

中等部の一年が風紀委員に勧誘されるという事態はこの学園始まって以来の快挙で、この件で彩花の名前を知った生徒も多い。

以来、今日まで彼女は風紀委員に所属し続けている。

最近では高等部になると同時に風紀委員長になるのではという噂までたっている。

「うん。だから一緒に帰れないんだけど……」

すまないという表情で彼女は告げる。

「気にしてない。そっちこそがんばれよ」

「じゃあ、後で……」

そうして彼女は教室から出ていく。

剣二はそんな彼女の背中を見送ると、家に帰るべく自分も帰途につく。

剣二が帰途についている途中だった。

「あなたが千堂剣二ですか？」

名前を呼ばれふと、声の聞こえてきた方へ顔を向ける。

そこには少女がいた。肌は白く、細い手足と生気のない瞳。

一瞬、人形と見間違えてしまっ。

「そうだけど、なんだ？」

記憶を探ってみるが彼女に見覚えはない。

「了解しました。これより目標を確保します」

「は？」

呆けた声を漏らしたその直後、背後から打撃音が響き、それとほぼ同時に剣二は気を失ってしまった。

「ん……」

剣二は目を覚ます。

辺りを見回すと彼は檻の中にいるようだ。

ただし、決して古びた檻などではなく、むしろ逆に清潔な感じだ。何故こんなところにいるのか？ そのことを思い出そうとしたときだ。

複数の足音がこちらに近づいてくるのが聞こえてきた。

反射的に身構える。

やがて、檻の向こうに男と少女二人が姿を現した。さらにもう一人いるようだ。檻の奥へ下がった剣二からは死角となって影しか見えない。

「ようやく起きたようだな。丁度良かった」

男は剣二の姿を見て嬉しそうに笑みを浮かべる。

「誰だ？」

警戒しつつも見知らぬ男に純粹に疑問を持った剣二は彼に尋ねる。

「私は片山喜久雄。そうだな。分かりやすく言えばアーティファクトを研究している研究者だ」

少し考え込んだ後、彼はそう答えた。

「何故？ 俺を捕まえた」

考えてみるが捕まえられる動機がさっぱり思いつかない。自分がそんな人間に襲われる理由などないはずなのだ。

「そうだな。ある目的のためにその手段として君を捕まえた」

「……その目的とはなんだ？」

問うてみたが既に彼にはその目的とは何か見当が付いていた。

「無論、君の妹を捕まえることだよ」

途端に怒りが体の中から湧き上がった。

「あいつに何かしてみる絶対に許さないぞ!!」

怒りの形相で彼は喜久雄に対して叫ぶ。

だが、喜久雄は平然とした表情で彼にとって衝撃的な一言を述べる。

「なら、手遅れだ。既に君の妹は私の手の中だ」

「なん……だ……と……」

驚きのあまりに彼は言葉が出ない。

「素直にやってきたところを眠らせてね。君は大体丸一日寝ていたんだよ」

「そ、そんな……」

あまりのことに彼はその場に膝をついてしまう。

「そして遂に私の最高傑作が完成した!!」

「……どういう意味だ？」

怒りの形相で喜久雄を睨む。

「私の研究は対象にアーティファクトの装置を埋め込み、融合させることでその性能を引き出すというものだ。君が見ているこの二人にもその処置がされている。この間、面白い装置ができたもので、彼女なら使えるだろうと思ってね」

「あいつに……その装置を……埋め込んだのか？」

「無論だ」

当然といった表情で喜久雄は答える。

「貴様!!」

怒りのあまりに彼は檻まで走りよる。体ごと檻にぶつかり檻が軋むがそんなこと剣二には関係ない。

だが、剣二は駆け寄ったことで気づいてしまった。四人目の正体

に……

「あ、彩花？」

そう影だけが見えていた四人目は誰であろう、妹の彩花だったのだ。

「おい、彩花？ 大丈夫なのか？」

虚ろな目の妹に剣二は話しかけるが彼女が答える気配はない。

「無駄だ。既に彼女の感情は排除した今や私の言うことを聞く忠実な人形だ」

「な！？ き、貴様……」

もはや彼の胸の内に渦巻くのは怒りのみだった。

こいつは、こいつだけは許せない。

喜久雄を睨む彼の瞳には怒りの炎が灯っていた。

「怒りたければ怒ればいい。どうせそのうち君も彼女たちと同じ末路を迎える。それまでは大切に持っておきたまえ。それでは戻ろうか」

そう言って喜久雄が踵を返したときだった。

彼は気づく。彩花がこちらの命令を無視したことを……

彼女は動かず、ただじつと自分の元兄を眺めている。

「どうした？ 戻るぞ」

再び命じるが彩花は動こうとしない。

その時、小さな声が聞こえた。

「だ……め……」

それは小さく、か弱い、だがそれは間違いなく拒絶の声。

「な！？ 馬鹿な！！」

この事態に喜久雄は驚きの表情で彩花を見る。

「彩花？」

その言葉と同時。彼を閉じ込めていた檻にひびが入り檻が崩れる。閉じ込めていたものがなくなり、すぐさま剣二は彩花の元に走り寄る。

「に……げて……」

苦しげな表情で彼女は剣二を逃がそうとする。
だが、それは喜久雄の一言で不可能になった。

「……なるほど。そういうことか。殺せ」

その言葉が言い得るのと剣二の心臓に風の槍が突き刺さったのは
ほぼ同時だった。

彩花の前で剣二はパタリと倒れる。

「……え……」

苦しげな小さな声はただそれだけしか言えなかった。

見下ろすと自分の兄が背中から貫かれ倒れている。

「ははは……兄の姿を見て感情を取り戻すとは予想外だった。しか
し、これでバグの要因は排除された」

笑い声と共に喜久雄が何かを言っているようだが彩花には聞こえ
ていない。

彼女はただ兄を見つめている。

「嫌……嫌……」

元々苦しさに震えていた声がさらに震える。

「さあ、お前はもう一度処置だ。今度こそ私の人形になってもらう
ぞ」

喜久雄は彼女の様子などお構いなしに彼女の元に近づくとその腕
をとろうとする。

しかし、それはできない。突然、彼女の周囲を炎が取り囲んだか
らだ。

「く、なんだ？」

手を引っ込め、距離をとる喜久雄。

炎の彼女と彼女の傍に倒れる兄を守るように彼らを阻む。

「どうにかしろー!!」

彼の命令に忠実な人形たちが動き出す。

だが、氷を使って炎を凍らせど新たな炎が氷を溶かし、風の槍を
使っても突然生まれる鉄の壁に阻まれ届かない。

「おお!? 素晴らしい」

「私の処置は大成功という訳か」

それはもはや、神の領域に触れたといっても過言ではない力だ。

炎の中心にいる彼女はいつの間にか涙を流している。

「嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌……嫌——」

!!!

莫大な炎は当然一瞬ですぐ傍にいる喜久雄たちをも飲み込み、さらに広がる。

だが、炎の勢いは留まることをしらず広がり続け、遂には周囲の建物、人すらも飲み込んでいく。

莫大な炎は止むことを知らず、それが止んだのはそれから2時間経ってからのことだった……

既に彼女に意識はない。あるのは兄に死んでほしくないという思いだけ……

彼女の力が剣二の心臓や血を作り出し、穴の開いた体や服すらも塞いでいく。

少女は彼が無事なことを認めると、そのまま気を失っていく。

だが、その後も炎が彼らに近づくことはなかった。

「ようやく収まったか……」

その言葉と共に彼らを取り囲んでいた氷の壁が消え、中から喜久雄と二人の少女が姿を現す。

「正直、彼女がいなかったら私たちは存在のかけらすら残らなかったらうな」

そう言つて氷を生み出した少女を見る。

少女はかなり疲れている様子で深い呼吸を繰り返している。

「さてと……」

そうして彼は周囲を見まわし、目的のものを発見する。

「力を使い果たし、倒れたか」

そこには気を失い倒れている彩花の姿があつた。

彼はそれを抱き上げる。

「よし、引き上げるぞ」

「了解しました」

そうして彼らはその場を後にする。誰にも気付かれないように……

彼らは見落としていた。

彼らの死角に倒れていた一人の少年を……

今の少年はただ気を失っているだけで、その証拠に彼の胸の部分が僅かにだが上下に揺れている。

この後、少年は調査に来た隊員に見えられ無事保護される。

彼らが少年の存在を知るのはかなりの時間が経過してからだった。

四章三話目が覚めて

剣二はゆつくりと目を覚ます。

見えるのは天井だ。

剣二はこの天井に見覚えがある。病院の天井だ。

それを確かめるために視線を横に向けると予想通り、こちらの状態を伝える機器類の姿が見える。

何故ここにいるのか。それはわかっている。

あの日、自分を襲った少女に腹を貫かれたのだ。

まさか、二度も貫かれることになるとは思ってもみなかった。思わず苦笑してしまう。

そこに誰かが病室に入ってくる。

「気がついたんですか？」

やってきたのは以外にも奏だった。

「楠先輩はどうしてここに？」

彼女の性格上心配で見に来たという可能性は低い。何か用件があったのだろう。

「あなたが以前、依頼してきたアーティファクトの修復が先程、終わりましたのでから届けに来ました。」

そう言って彼女は剣二に近づくと彼の手の中に妹が使っていた指輪を入れる。

「ありがとうございます」

「私自身も興味があったのでお礼はいりません」

剣二の礼に奏は素っ気無く答える。

「大体、俺がここに運び込まれてどのくらい経っているんですか？」
この質問に彼女が答える。

「三日です」

随分と眠ってたんだな、とそんな感想が頭の中に浮かぶ。

「用件は終わりましたのでこれで……」

そう告げるとは彼女はさつさと病室を後にする。
残ったのはベッドで横になっている剣二だけ。
暇になった彼は考える。

失われていた記憶は取り戻せた。

片山喜久雄と自分との関係。妹にされたこと。

そして、自分のこと……

倒れていた間、何があつたのかはわからない。だが、気を失う僅かな前に妹が炎を生み出したのだけは覚えている。

恐らくあの爆発は妹が起こしたもののなのだろう。

自分が生きているのも妹のお陰なのだろう。

あの中でそれができそうなのは彼女ぐらいだ。

これは推測だが、妹に埋め込まれたアーティファクトの力とは妹が持っていた指輪の力の上位版みたいなものなのだろう。

それこそ、炎を生み、自分の心臓を治すほどの……

何かを創造する効果。

故に無機物の一時的創造のアーティファクトが使える彩花が被験体として選ばれたのだろう。

もし、彼女がそんなアーティファクトを使えなければ襲われることもあの事件が起こることもなかったのだろう。

しかし、もはやもしの話をする段階は過ぎ去っている。

確かに彼女にはその才能があり、あの事件は起こってしまったのだから……

「外に出るのは久しぶりだな」

喜久雄はそう言いながら周囲を見渡す。

時間は昼間ということもあって人通りが多い。

喜久雄の姿は白衣を纏った研究者の服装。

当然、彼の格好は目立ち、行き交う人々は彼の方をチラチラと見

る。

しかし、喜久雄がそのことを気にする様子はなかった。彼は今最高に気分がイイからだ。

「よし、始めるぞ」

そうして彼は後ろへ振り返る。

そこには千堂彩花の姿があつた。

虚ろな瞳の彼女は喜久雄の言葉に頷き彼の前に出る。

そして次の瞬間……

風が全てを吹き飛ばした。

全てとは人、車、電柱、建物といった全てだ。

風が止んだ時、彼らの周囲には何もなく、ただひび割れたコンクリートと砂埃だけがそこにはあつた。

「ああ、素晴らしい。君の力は本当に素晴らしい」

その成果を見て喜久雄は自分のことのように喜ぶが彩花は無反応で何も答えない。

「これでようやく私の成果を皆が認めるだろう。彼らがどのような顔をするのか楽しみだ」

そんな風に喜久雄が独り言を呟いている間に周囲に動きがあつた。それは警官だった。アーティファクトを持った彼らが喜久雄たちをずらりと取り囲んでいるのだ。

「ほお、思ったよりも早いじゃないか」

しかし、喜久雄は驚かない。何でもないという表情で彼らを見回す。

「まあ、来るのはわかっていた。それでは私の実験台になってくれたまえ。やれ」

その言葉を合図に彩花が前に出る。

少女が前に出たことに何人かの警官たちは驚くが、気を引き締め直し彼らは身構える。

そして、戦闘が始まった。

その時、剣二はテレビを見ていた。
他にすることもなく暇だったからだ。

そのテレビで緊急報道の番組に切り替わった。
どうやらこの近くの駅で突風現象が起きたらしい。

凄まじい風で人や車、葉亭は建物まで吹き飛んだということだ。
今でテレビの画面は現場に向かうヘリからの映像が映されている。
しかし、現場についたヘリは予想外のことを知らせてきた。

なんとアーティファクター同士の戦闘が巻き起こっていたのだ。
片方は警官のようで、それが複数と結構な数がいる。

一方の少女は一人だが、信じられないような力を用いて警官たち
を倒していく。

そして剣二はその少女に見覚えがあった。

「彩花……」

間違いなく自分の妹だ。

何故とは思わない。戦闘で動く映像の中に見覚えのある男が映っ
ているのだから……

正直駆けつきたい。だが今の彼にアーティファクトはなく戦う力
はない。

——今、この瞬間あいつを助ける力もないなんて……

悔しさで手を強く握ってしまう。

しかし、次の瞬間、あることを思い出した。

反射的に剣二はある物へと視線を向ける。

「くそ、このタイミングで動くとは……」

総一は病院の中を走っていた。

彼が向かう先はある少年の病室だ。

既に喜久雄が動いたことは連絡を受け知っている。傍らに立つ少

女が誰なのかということも……

だから、彼は急いでいる。彼がそのことに気がつく前に……
そして彼は病室に辿り着く。

「剣二君!!」

叫び病室に入る総一。だが遅かった。

「くそ、手遅れだったか」

彼が見たもの、それは風が入り、主のいない病室だった。

最終章 一話その力共に

剣二は走っている。町の中を。

今彼が見ているのは人々が逃げる景色だ。

まだ見えぬ人波の向こう。そこで警官たちと喜久雄の人形、剣二の妹の彩花が戦っている。

その激しい戦いに人々が怯え、巻き込まれるのを避けるために出来る限り離れようとしているのだ

その姿を見て他の人たちも怯え始め、最初の人たちと同じよう逃げ出す。

そしてその姿を見た人たちも……というように怯えと逃走の連鎖がこの人々の波を作り上げているのだ。

そんな彼らの間を剣二が逆走する。

彼の手に自身のアーティファクトはない。

だが彼の右手の中指。そこには妹が使っていた指輪が嵌められていた。

一方、喜久雄たちの方の戦闘は意外にもまだ続いていた。

「ふむ。予想外に粘るな」

彼の言うとおり、警官たちは多数の負傷者、怪我人をだし、戦闘不能になった者もかなりいるが、それでもまだ残っていた。

「まあ、実際には警官ではないしな……」

笑みを浮かべて彼はそう呟く。

彼の言うとおり、彼らは警官の制服を着ているが実際は違う。総一の所属している機関の者たちだ。

警官の姿をしているのは人々の目を誤魔化すためのものだ。

「だが、だからこそ。この作品の相手として相応しい」

嬉しそうに顔をニンマリさせて彼らを見る。

警官姿の彼らはそんな喜久雄を無視して少女を睨んでいる。

これまでの戦闘で彼女の恐ろしさを実感したからだ。

喜久雄を止めるためには彼女をどうにかする必要がある。

故に彼らは相手の一挙一動を見逃さないように見据える。

彩花はそんな彼らをただ無表情に眺めていた。

と、そこに警官の一人が飛び込む。彼は己のアーティファクトの力を使い、己の身を彼女のもとへ飛ばす。

彼女は鉄の壁を作り彼の接近を阻もうとする。

しかし、その壁が突然壊れた。

別の警官が巨大な鉄槌のアーティファクトを壁にぶつけた途端、壁が崩れ去ったのだ。

さらに、別の警官が風を放って鉄の瓦礫を吹き飛ばす。

障害物のなくなった警官は速度のままに彩花に迫る。

だが、警官が持っていた短剣を振ろうとした瞬間、彩花の姿が消えた。

これには彼だけでなく彼を援護した警官たちも驚く。

そんな中で喜久雄は余裕の表情を浮かべていた。

「何を驚いている？ そもそも彼女の本来の戦い方はアーティファクトの創造による多様な戦術だ。当然こんな戦い方も出来る」

その直後、彼女に接近していた警官が倒れる。

その瞬間、風の放っていた警官が風を放つ。

「ほお、光を曲げることで姿を消す効果を見切ったのか」

少し驚いた表情を浮かべる喜久雄。

警官は僅かに聞こえた接近の足音から、彼女が使ったアーティファクトの力を特定したのだ。

後は足音が聞こえた場所に攻撃を放てばいい。

近くには仲間がいるが彼らも覚悟を持って任務に挑んでいる。だから、彼は迷わず放った。

透明化を解除した彼女は相手と同じ効果を持つアーティファクトを創造。形は短剣だった。

同じ風の力を使って攻撃を相殺する。

そこに彼女の背後から鉄槌の警官が襲い掛かる。彼のアーティファクトの効果は鉄槌が触れた物体を砕くため人などに向けてもその力は働かない。

しかし、人相手ならそんな効果使うまでもなく、鉄槌の重さだけで十分なダメージが期待できる。

故に振り下ろす。

彩花はその攻撃を持っていた短剣で受けようとするが、相手が悪い。

巨大な鉄槌の重みを受けきれぬわけもなく、その威力に彼女は押しつぶされる。だが、これで終わりではない。

「やれ！！」

その掛け声と共に先程の警官が彼諸共風を放ってくる。

その風に巻き込まれた彼は吹き飛ばされ、やがて地面へと落下する。

傷ついた体を無理に動かし彼は起き上がり、先程の成果を確認する。

丁度その時、彩花がゆっくりと立ち上がる。その右腕はプランと垂れ下がっている。

先程の攻撃で骨が折れたのだろう。筋肉も痛めたはずだ。

だが、次の瞬間それがたちどころに治ってしまう。

恐らく、己の体の部品を創造したのだろう。

「全く、なんてデタラメなアーティファクトだ」

呟くように漏らす。

そこに他の仲間たちが彼女に襲いかかっていく。

彼女は避け、防いでは彼らに反撃を放つ。

その現場に彼は向かう。

もはや全身がスタボロだ。しかしまだ任務を完遂しておらず、自分は何も動けない。

ならば行くだけだ。

周囲の者達にあわせ一斉に接近する。

彼らを迎撃しようと彼女は周囲の熱を上げ、炎を生み出す。

一瞬、足を止める彼ら、それに合わせて仲間の一人が風を放ち、炎を吹き飛ばす。

それに対して今度は周囲に鉄の壁をいくつも作り出す彼女。

それを巨大な鉄槌が砕いていく。

また、意思操作御型のアーティファクトがいくつも彼女へと迫る。彼女は同じ意志操作型のアーティファクトでそれを迎え撃ちつつ、指輪型のアーティファクトを生み出す。

今度のは力場の足場を空中に作る効果のようだ。そうして彼女は上へと登るか。

逃がさないと彼らは視線で彼女を追う。そこでようやく彼らは空中に何かが浮かんでいることに気がついた。

一言で表すならそれは輪つかだった。黒い腕輪ぐらいの大きさの輪が合計8つ。広がりように円をつくるようにに配置されていた。

そして彼女がその輪よりも高い位置に登った瞬間。

警官たちは何かの力に押しつぶされた。

その様子を喜久雄は離れた場所で眺めていた。

彼女が使ったのは輪が囲んだ円内の重力を増大させる効果を持ったアーティファクトだった。

そのため警官たちだけでなく空間内の建物や瓦礫が全部が自身の重みに軋みをあげる。

そうしている間にも重力は増大しているのか軋みの音が徐々に大きくなり、一部の建物は己の重みに耐え切れなくなり崩れ落ちていく。

警官たちとて、このままでは重力の重みで自身の体が潰され死んでしまうだろう。

動けない苦しむ声をあげるしかない。

と、その時甲高い音がいくつも響く。

黒い輪が意思操作型の剣によって断たれたのだ。

たちまち効果は消え、重力は元通りに戻る。

剣はそのまま主のもとへ戻って行く。

喜久雄はその剣を追い、そしてその姿を見て驚いた。

「久しぶりと言うべきか」

空を飛ぶ剣の上……そこには少年の姿があった。

彼は喜久雄を見下ろすかのように彼に視線を向けていた。

「千堂剣二……」

忌々しげな感情を込めて彼は少年の名前を告げる。

それを聞きそれから剣二は少女の方へとその視線を動かす。

死んだと思っていた家族……それが目の前にいた。

あのとき、彼女は自分を助けてくれた。

「だから彩花。今度は俺がお前を助ける番だ」

その言葉に呼応するかのように剣群がその剣先を彼女へと向ける。

最終章 一話その力共に（後書き）

いよいよ最終章です。

こんな小説ですが最後までよろしくお願いいたします。

最終章二話取り戻すための戦い

人々が過ごしていた町並みの姿はそこにはなく、もはや廃墟としか言えないような惨状。

そこで二つの攻撃がぶつかり合っていた。

一つは彩花の放つ多種多様な攻撃。

もう一つは剣二の操る剣群による攻撃。

互いの攻撃はときにぶつかり、時に防がれながら互いの間を行き交っていた。

剣群が追うように彩花の後に続いたと思えば、彩花が放つアーティファクトの火球が剣二へと迫る。

両者は互いに各々武器を用いて弾き、防ぎ新たな攻撃を繰り出す。時折、刀弥の剣が破壊されるが、破壊された次の瞬間には別の剣が刀弥の付近に姿を現す。

「ほお……」

それを見て喜久雄は驚きの声を漏らす。

「彼もまたあのアーティファクトを限定的とはいえ使えるのか」

彼の周囲にある剣。それは全てあのアーティファクトで生み出したものなのだろう。

限定的とは使えるのなら大したものだ。何せ千堂彩花を除き誰も扱えなかった代物なのだから。

「しかし、となると彼がいつまで持つか……」

あのアーティファクトの創造は維持にもマナが掛かる。

つまり、剣を扱うためのマナと剣の創造を維持するためのマナを剣二は消費している状態なのだ。

彼はそれに慣れてはいない。

加えて生きていたとはいえ、以前の戦いで傷を負ったのは間違いない。

たったこれだけの期間で治るはずがないので、まだ引きずっているはずだ。

故に彼の状況かなり厳しいはず。

本来であれば自分の作品が負けるはずがないのだが……

「……やはり」

そう呟いて彼は己の作品を見る。

そこには苦悩蹙いと苦しみの表情があった。無論動きも悪い。

彼と出会ってすぐにこの反応だ。

以前より協力な処置をしたつまりだが、やはり危惧した通り駄目だったようだ。

それでも戦ってくれているだけ以前よりはマシだといえるが……

「最悪の場合は私が直接留めを刺すべきか……」

そう言って彼は二人の様子を眺めていた。

喜久雄の考えていた通り、剣二はかなり厳しい状況にいた。

マナの負担に以前の戦いで傷の痛み。

それでも彼は戦い続ける。

相手の方を見るとその顔にははつきりと苦悩の顔がある。

どうやら新たな処置とやらでも完全に感情を消し去ることはできなかったらしい。

だからこそ、自分を狙ったのだろうと刀弥はそう結論する。

自分に悪い状況はあるものの、相手にとっても良い状況ではないようだ。

——何とかして彩花を取り戻す。

それが剣二の勝利条件だ。

そして、そのためには……

ちらりと剣二は喜久雄の方を見る。

最初の襲撃者は負けた途端、いきなり絶命した。

恐らく何らかの方法で、喜久雄が口封じに殺したのだろう。

ならばその事態を避けるためにも、どうにかしてその方法を封じ

る必要がある。

恐らく、リモコンが何かを持っているはずなのだが……

そんな剣二に突如炎が迫って来る。

それに気付いて、急いで剣二は回避する。

そして回避後、剣を動かして彼女を牽制する。

——喜久雄をどうにかするにしても、どうやって彩花を突破するかだな。

まず、彼を狙えば彼女が守りに動くだろう。

かといって彼女を先に倒してしまえば、以前と同じことになってしまう可能性がある。

「……よし、やってみるか」

少し悩んだ後、彼はそう呟くと彩花の方へと向き直る。その顔は何かを決意したような顔だ。

何かを仕掛けることに気づいたのか彼女は剣二に注視している。

そして剣二は剣を創造する。いくつもの剣を同時に……

驚く彩花と喜久雄をしりめに彼はそれを一斉に放った。

辺り一帯に轟音が響き、砂煙が舞う。放った剣の創造を解除しながら剣二は周囲を探る。

その砂煙の中から彩花が飛び出してくる。その手には二つの剣が握られている。

次の瞬間、彼女の周囲に氷と炎の槍がいくつも出現する。恐らく持っているアーティファクトの効果だろう。

そのまま彼女はそれらを剣二に向けて放つ。

それらの攻撃に対して剣二は避けながら剣で防いでいく。

攻撃をしながら彩花は剣二に接近していく。

それを見て剣二は手近な剣を手元に寄せる。

かん高い音と共に二人の剣がぶつかり、時折、彩花の方から炎と氷の槍が放たれるが、それらの攻撃は周囲の剣で防いでいく。

逆に剣二もまた剣を操り、彩花の背後や上などの死角から攻撃を仕掛けるが、その攻撃も彩花があらゆる手段を用いて防御する。

状況を膠着状態に入っていた。

そんな様子を喜久雄は遠くから見ていた。

膠着した状態がいまだ続いている。剣二は妹を死なないように遠慮し、彩花は兄に死んでほしくないという心の抵抗のために殺すことに躊躇いを持っている。

互いにあと一步のところで遠慮してしまっているのだ。そのため、決定打が出ない。

その結果が今の状況だ。

喜久雄はどうするか、考える。

あまり時間をかけるわけにはいかない。かの機関からの増援も時期にやってくるだろう。

——そろそろ引くべきか。

剣二を殺すことは難しい。しかし、逃げろぞ、と言えば彼女はこちらの命令に素直に従うだろう。

そう考えた彼はそう命じるために彼女の方を見ようとして、気づいた。背後の物音に……

何だ、と振り返ったその瞬間、二本の剣が喜久雄の両腕を切断した。

剣はそれで終わらない。新たな剣が彼の足を傷付け、さらに別の剣が服を切り裂いていく。

彩花が喜久雄の状態に気付いて戻ろうとするが、もう遅い。

裂けた喜久雄の服のポケットから何かが落ちる。それはリモコンだった。これこそ剣二が探していたものだ。

それに焦点にあてた剣二は剣に命じる。

主よりの命を受けた剣は彼の意に従い、それに向かって飛翔する。そして彼の願い通り剣はそれを破壊した。

その様子を喜久雄は驚きと悔しさの入り交じった表情で見ている。これで、取り戻すための問題はクリアされた。後はもう取り戻すだけだ。

そうして彼は妹の方に視線を戻す。

彼の視線に合わせて剣たちも彼女の方へと飛翔していく。

彼女はそれを避けていく。

——逃がさない。

喜久雄があれだけの怪我を負ったのだ。

間違いなくこの場から逃れようとするだろう。

だが、彩花を取り返すためにもここで逃がすわけにはいかない。

そのために彼は踏み込む。

彼女の目前まで接近し彼は剣を振る。

気づいた彩花が剣で防御しようするが、それに対して剣二がその剣を手放す。

彼の手を離れた剣は彼の意思に従い、回りこみ背後から斬撃を見舞おうとする。

瞬時の判断で避けた彼女に対し、さらに別の剣が彼女を追い立てる。

それを回避し剣二を見据えようとした彼女は彼を見失ったことに気がついた。

慌てて周囲を見回すが、姿はない。

どこにと思ったその時、彼女は己と太陽を遮る陰に気がついた。

剣から飛び降りた剣二が、そのまま剣を振り下ろす。

それを手持ちの二つの剣で防ぐ。

金属音。だが、音が軽い。

見ると、そこには剣しかなく本人の姿はない。

視線を下げると、彼は身を低くして構え、そこに彼の背後から別の

剣がやってきて彼の手に収まる。

先の攻撃はフェイントだ。

そして彼は一気に近づく。

急いで剣を下げて防御姿勢をとろうとするが、それらの動作を別の剣が妨害する。

もはや防ぐことは敵わない。

そのまま剣二は剣の横の部分を使い、相手の腹を叩くように剣を振り抜いた。

鈍い音が響き、妹はうめき声を上げる。

うめき声を上げた彼女は剣を落とし、そのまま崩れそうになる。

慌ててそれを抱きとめる剣二。気を失っているだけなので、心配はない。

彩花の顔をよく見ると、その顔はどこか安堵しているように見える。

「終わったな」

溜息と共にそんなつぶやきが漏れた。

全身に疲労が滲み出てくる。

じきに誰かしらが来るだろう。

それまでは自分は少し休ませてもらおう。

そうして剣二は短い眠りにつくことにした。

最終章二話取り戻すための戦い（後書き）

いよいよ。次でラストです。

こんな物語ですが、読んでくださった方には感謝の気持ちで一杯です。

どうぞ最後までお付き合ってください。

それでは……

最終章 エピローグ

剣二は病院の廊下を歩いていった。

廊下には患者や看護師の姿が行ったり来たりしている。

「あら、今日も来たんだ」

その中の一人、顔見知りの看護師の女性が剣二に気がつき声をかけてくる。

「はい」

「毎日顔を出すなんて殊勝ね。彼女も喜ぶわ」

「そりゃあ、家族ですから」

褒める看護師に剣二はそう返す。

「退院いつだっけ？」

「先生の話だと夏休みが終わる頃にはと言っていましたけど……」

「そっか。あ、それじゃあ、仕事があるから」

「はい」

そう言って看護師はその場から去っていく。

それを見送った剣二は再び彩花の病室を目指して歩き始めた。

あの事件の後、彩花は病院に運ばれた。そうして体力を取り戻してから彼女の体内にあるアーティファクトの装置を取り出す手術を行い、それも無事に成功した。

後は体調が完全に回復すれば退院できるそうだった。

喜久雄がどうなったのかは知らない。あの後、彼は総一の機関が確保したそうだった。

それからのことは向こうが特に言っていないので問題ないのだろう。

そうこうしているうちに剣二は目的の病室に辿り着く。

まずはドアをノックをする。

「どうぞ」

中からの返事と共にドアを開け剣二は病室へと入る。

「兄さん」

病室のベッドには彩花が横になっていた。

病院の服を来て、こちらに顔だけを向けている。

ノックの主が兄だとわかると、彼女は嬉しそうな表情を浮かべた。

「調子はどうだ？」

彼女のベッドに近づきながら剣二はそう尋ねる。

「悪くはないかな。兄さんに打たれたところはまだ少し痛むけど…」

…」

尋ねられた彩花はそう答えお腹の部分をさする。

「仕方ないだろ。他にやりようがなかったんだから……」

「わかつてる」

むつとした表情で反論する剣二に彩花は笑みを返す。

「全く……変わらないな……」

「兄さんもね……」

そうして二人とも苦笑する。

「一年ぐらい離れていたはずなんだがな……」

「そんなこと全然感じないね」

同じような感想を抱いていることに二人はやっぱり、兄妹だなという考えが浮かぶ。

「それで、兄さんはこの一年を何をしてたんですか？」

そう妹に尋ねられた剣二は、これまでのことを思い出しながら話す。

「それなら心配なさそうですね」

「一体何を心配してたんだ？」

安堵の顔を浮かべる妹に剣二は疑問の表情を浮かべる。

「いいじゃないですか。それよりその泉堂綾香さんのこともっと教えてください。何だか似ているところが多くて友達になれそうな気

がします」

「まあ、その辺は俺も同じ感想だな」

彩花の言葉に微笑を浮かべて剣二は答える。

そうして二人は時間が来るまで話を続けたのだった……

そして始業式……

夏休みが終わり、学生たちが次々と学校に登校していく。

当然その中に剣二の姿があつた。

彼の隣には彩花の姿もある。

「ここが兄さんが通っている学園ですか」

学園の校門を見上げて彩花がそう呟く。

「ああ、そうだ」

その言葉を剣二が肯定する。

二人の周囲を他の生徒たちが通り過ぎていく。

無論その中には剣二の顔見知りもあり、彼らは剣二の隣にいる見知らぬ少女の姿に驚きながらも、そのまま校門の中へと入っていく。ただ一人を除いて……

「あれ？ 剣二どうしたの？」

そう言つて近づいてくるのは綾香だ。

「ああ、綾香か」

彼女に気が付いた剣二はそう言つて声をかける。それを聞いて妹も彼女の方に視線を向ける。

「もしかして彼女が兄さんの言っていた人ですか？」

「……兄さん？」

見知らぬ少女の口から出た言葉を聞いて綾香は彼女を注視する。

「もしかしてメールで言っていた剣二の妹？」

事件のことは既に彼女には知らせている。無論、妹が助けられたことも。

ただ、互いに会うのは今日が始めてというわけだ。

「始めまして。ここでは八神彩花と名乗った方がいいのでしょうか？」

そんな疑問とともに彩花はそう挨拶した。

「始めまして泉堂綾香です。よろしくね、彩花さん」

「つと、そろそろ時間もやばいな」

剣二の言葉に他の二人も時間を確認すると、確かにもうじき予冷のチャイムとなる時間だ。

「急ごう、剣二」

「ああ、彩花。職員室は……」

「大丈夫。一人で行けるから行って」

「ああ、じゃあ後でな」

そうして剣二と綾香は走りだす。

新たなスタートを始めるために……

最終章エピローグ（後書き）

これでこの物語は終了致しました。

今まで読んでくださった方。

こんな物語でしたが最後まで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3767q/>

八天の聖剣

2011年5月25日17時40分発行